平成１７年度－１９年度
科学研究費　基盤研究（C）　報告書

「内的作業モデルの世代間伝達と
その変容プロセスに関する研究」

平成２０年３月

京都教育大学

研究代表　内田利広

はじめに

本研究は、平成１６年度京都教育大学教育活性化経費（科研促進経費）によりスタートしたものである。その年、「内的作業モデルの世代間伝達に関する基礎的研究」と題して学内的な予算措置をいただき研究をすすめ、それが今回の科研費・基盤研究（C）「内的作業モデルの世代間伝達とその変容プロセスに関する研究」の基になっている。

しかし、もともとの研究は、私の研究室を修了した山口美穂さん、河合三奈子さんの修士論文で取り上げられた内的作業モデルに関する研究に、内田が関心を示し、さらに研究を発展させるために平成１３年度より、毎月１回研究会を行うようになった。

そこで様々な文献を読み、最近の内的作業モデルに関する研究の流れを理解するとともに、「内的作業モデルに関する文献展望と今後の課題」（内田・山口・河合　京都教育大学紀要 103 号　2003 年）として、まとめることができた。

このような研究を踏まえ、この３年間、毎月１回研究会を重ね、途中からは大学院生の大田千登世さんにも参加してもらい、調査研究を行い、それらを学会でも報告してきた。

今回、この３年間の研究の成果を１冊の報告書としてまとめることができたのは、この研究会に参加していただいた３名の協力者をはじめ、調査に協力頂いた保護者の皆さん、大学院生の皆さんのお陰だと感謝しています。

また、今回の報告書では、できるだけ研究の全貌をあげておきたいということで、質問紙の内容や評定過程等の全ての資料をできるだけ掲載するようにした。

研究は、代表の内田を中心に、全てのメンバーが関わって行ったが、報告書作成においては、以下のように担当をお願いした。

第１章　河合三奈子
第２章　山口美穂
第３章　内田利広
第４章　大田千登世

本報告書が、これからの皆さんの研究にとって、何らかの刺激や参考になることを願っています。また、京都教育大学内田研究室において、今度もこの研究をすすめていきたいと思っていますので、ご質問やご意見、ご助言等がありましたが、ご連絡頂ければと思っています。

平成２０年３月１９日

研究代表者　京都教育大学准教授
内田利広
E ﾒｰﾙ:uchida@kyokyo-u.ac.jp

目　次

はじめに

第１章　「母親の内的作業モデルからみた『子どもの育てにくさ』に関する研究」……　3
—「ぐずりやすさ」「育てやすさ」「関係のとりにくさ」をめぐって—

問題と目的
方法　１．調査対象者と調査形式
２．調査時期
３．質問紙の構成

結果　１．因子分析
２．IWM タイプによる子どもの育てにくさの捉え方
３．母親の受容度、子どもの行動頻度と IWM との関連
４．母親の IWM が子どもの育てにくさに及ぼす影響

考察
まとめ
文献
資料

第２章　「TAT 物語から見た内的作業モデル」…… 19

問題と目的
方法　１．調査対象者と調査形式
２．調査時期
３．質問紙の構成

結果と考察
１．ＴＡＴ物語における各群の典型例
２．ＴＡＴと自己意識、家族関係との関連
３．TAT と愛着スタイルとの関連
４．TAT による評定と愛着スタイル尺度による評定が
異なるケースの検討

まとめ
文献
資料

第３章　「内的作業モデルの児童期から青年期における変容に関する研究」・・・・・ 41
－重要な他者との出会いをめぐって－
問題と目的
方法　　１．対象
２．各尺度について
３．分析の手続き
結果と考察
１．各尺度項目の基礎統計(天井効果、ﾌﾛｱｰ効果)
２．各尺度の因子分析
３．IWM 尺度（児童期・青年期）の４分類による分析
４．「見捨てられ不安」・「親密性の回避」の得点の変化量から見た検討
まとめ
文献
資料
第４章　「愛着」や「内的作業モデル」に関する論文リスト・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 72
１．「乳幼児」・「母子」を対象とした論文
２．「児童期・思春期の子ども」を対象にした論文
３．「青年期」を対象とした論文
４．学会で発表された論文
５．その他

第１章

母親の内的作業モデルからみた「子どもの育てにくさ」に関する研究
—「ぐずりやすさ」「育てやすさ」「関係のとりにくさ」をめぐって—

【　問題と目的　】

近年、児童虐待を始め、母親の育児困難の問題が大きくなっている。そうした背景について原田（2006）は、子育て中の母親を対象に 1980 年と 2003 年に行った調査の結果を比較して、乳幼児と接触したことがないまま母親になり、どのように関われればよいかがわからず育児困難に陥るケースが増加していると指摘している。それに加えて、乳幼児を育てる親の孤立化が極端に進んでいることも同じ調査から明らかとなっている。こうした現状を抱える現在において、Bowlby（1969：1973：1980）が提唱して以来これまで主に発達領域でなされてきた多くのアタッチメント研究が、臨床場面でどのように適用されうるのかが言及されるようになってきている（数井・遠藤，2007）。

Bowlby の理論の中でも、特に「内的作業モデル（Internal Working Model：以下 IWM とする）」理論は、母子間の関係性の問題について理解を深め、それを防ぐための援助法について示唆を与えてくれるものとして期待されている（内田・山口・河合，2003）。IWM とは、幼少期に愛着対象との持続的な相互交渉を通して形成される、愛着対象および自己に関する心的な表象のことである。愛着対象に関する IWM とは、愛着対象への接近可能性や愛着対象の応答性に関する表象モデルであり、自己に関する IWM とは、自分が他者から、特に愛着対象から受容され、助けてもらえる種類の人物であるかどうか、といった表象モデルである。そして、この二つのモデルは相互に補うように、また相互に強めるように発達すると考えられており、各個人は、そうしたモデルによって出来事を知覚し、未来を予測し、自分の計画を作成すると仮定されている（Bowlby，1973；久保，2003）。

アタッチメント理論をベースに母親と子どもとの関係性について検討した研究には、以下のようなものがある。例えば、世代間伝達に関する研究からは、親の IWM と子どものアタッチメントパターンとの関連性が概ね認められている（e. g. Fonagy, Steel & Steel, 1991；数井・遠藤・田中・坂上・菅沼，2000）。また、母親の IWM によって子どもへの具体的な関わり方が異なることも確認されている（e. g. Crowell & Feldman，1988）。そこでは、安定したＩWMをもつ母親は子どもによりサポーティブで子どもの学習や自己発見を促すようなスタイルをとり、愛着軽視型（関わりあいを避ける傾向にあるタイプ）の母親は子どもに指示が多く、とらわれ型（他者は自分を見捨てるのではないかという思いにとらわれやすいタイプ）の母親は、子どもに統制的もしくは子どもを混乱させやすいとしている。

このように、母親の IWM によって子どもへの関わり方が異なるということは、子どもの行動を母親がどのように捉え、それを育てにくいと捉えるのか、それとも受け入れられるものだと捉えるのか、等の「捉え方」において差異があるのではないだろうか。そこで、本研究では、母親の IWM という観点から子どもの育てにくさについて検討し、どのような IWM タイプがどのような育てにくさと関連するのかについて明らかにすることを目的とする。

【 方法 】

1．調査対象者と調査形式

保健所において、子どもの 3 歳児健診に訪れた母親に調査を依頼し、承諾の得られた 194 名に質問用紙を配布した。そのうち 109 名から郵送にて返信があり、記入漏れ等の不備のあったものを除いて、102 名の回答を後の分析に用いた。

調査対象者は皆、3 歳ごろの子ども（平均月齢 38.9 ヶ月）をもつ母親で、平均年齢は 32.8 歳であった。

2．調査時期

2004 年 11 月に調査を実施した。

3．質問紙の構成

(1)フェイスシート：年齢、職業、家族形態、子どもの年齢および性別を尋ねた。

(2)成人版愛着スタイル尺度（詫摩・戸田，1988）:「secure（例：私はわりあいにたやすく人と親しくなる方だと思う)」、「avoidant（例：私はあまり人と親しくなるのは好きではない)」、「anxious/ambivalent（例：人は、本当はいやいやながら私と親しくしてくれているのではないかと思うことがある)」の 3 つの下位尺度から構成されている。全 18 項目について 6 件法で回答を求めた。以下、「IWM 尺度」と表記する。

(3)子どもの育てにくさに関する尺度：子どもの愛着パターンを評定する方法として開発されたアタッチメント Q ソート法（Attachment Q-sort：以下 AQS と表記する）の質問項目を用いた。AQS とは、日常場面における子どもと養育者の行動観察に基づいて、90 項目からアタッチメントの安定性スコアを算出し、その個人差を測るものである（遠藤，1999：近藤，1993)。本研究では、全 90 項目のうち 53 項目を、子どもの育てにくさに関する質問項目として用いた。この 53 項目は、全 90 項目から基準値 6.0 以上の項目を除いたものであり、母親としては、子どもとの関わりでやりにくさを感じたり、あまり好ましいと思えないような項目が含まれている（例えば、「昼寝や夜寝るとき、お母さんが寝かせようと

すると、泣いたり嫌がることがしばしばある」や、「お母さんの注意をひとり占めにしたがる。もし、お母さんが忙しかったり、誰かと話していると邪魔をする」等)。これらを「子どもの育てにくさ尺度（以下、育てにくさ尺度と表記する)」と命名した。

こうして選択された 53 項目それぞれにおいて、各項目の行動を実際にどれくらいの頻度で子どもが示すかという、子どもの行動に関する質問と、そうした行動を子どもが示した時、母親がどの程度それを受容できるかに関する質問を行った。子どもの行動については、「ない」から「よくある」までの３件法で、母親の受容度については「全く受け入れなれない」から「非常に受け入れられる」までの６件法で回答を求め、それぞれを「行動得点」、「受容得点」とした。

【　結果　】

１．因子分析

育てにくさ尺度の 53 項目に対し、主因子法・Varimax 回転による因子分析を行った（表１)。

因子負荷量の高いもの（0.4 以上のもの）を採用し、３因子 33 項目を抽出した。第１因子（12 項目）は「望むことをお母さんにやってもらう手段として泣いたり、ぐずったりする」に代表される「ぐずりやすさ」因子とし、第２因子（14 項目）は、「機嫌のよい時には、一日中、その状態でいることが多い」に代表される「育てやすさ」因子、第３因子（７項目）は、「家を訪れるたいていの大人を無視し、自分自身の活動の方に興味を示す」に代表される「関係のとりにくさ」因子と命名した。

表1 「育てにくさ尺度」の因子分析結果

	項目	因子負荷量 Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	共通性
	Ⅰ ぐずりやすさ α＝. 8938				
49	望むことをお母さんにやってもらう手段として泣いたり、ぐずったりする	0.862	0.028	0.088	0.751
48	すぐにお母さんに腹を立てる	0.754	0.078	0.313	0.672
44	お母さんがして欲しいことをすぐにやらないと、あたかもお母さんはして欲しいことを全くやらないと予測しているかのようにふるまう(ぐずったり、怒ったり、あきらめて他のこと	0.725	0.169	0.046	0.557
22	お母さんに対してわがままで気が短い、自分の望むことをお母さんがすぐにしないとぐずぐず言ったり、頑固に要求し続ける	0.628	0.130	0.114	0.424
17	お母さんの注意をひとり占めにしたがる。もし、お母さんが忙しかったり、誰かと話していると邪魔をする	0.594	0.376	0.129	0.510
38	お母さんが、お子さんがいましている活動を止めさせ、次の活動をさせようとすると、すぐに機嫌が悪くなる(たとえ、新しい活動がお子さんのいつも喜ぶものであった場合で	0.577	0.158	0.260	0.425
43	いつも持ち歩いたり、寝床に持って入ったり、機嫌が悪くなると抱きしめたりするぐらい大好きな特定のおもちゃやタオルがある(お子さんが2歳未満の場合、哺乳瓶やおしゃぶりは含まれない)	0.561	0.162	0.038	0.343
37	自分でしてみる前に、先に誰かに手伝ってもらおうとする	0.528	0.141	0.312	0.396
45	家にいるとき、お母さんが部屋から出ると機嫌が悪くなったり泣いたりする(後追いするかしないかは問題としない)	0.496	0.186	0.406	0.446
50	たいていの場合、遊びに使うおもちゃや遊び方は特定の限られたものである	0.471	0.095	0.253	0.295
9	お客さんが何か気に入らないことをすると、すぐにお客さんの相手をやめる	0.455	0.031	0.302	0.299
35	お母さんと荒っぽく遊ぶ。活発な遊びの中で、たたいたり、ひっかいたり、かみついたりする(必ずしも、お母さんを傷つけようというつもりはない)	0.433	0.038	0.431	0.374
	Ⅱ 育てやすさ α＝.8529				
36	機嫌のよい時には、一日中、その状態でいることが多い	0.029	0.719	0.034	0.518
10	ぶつけたり、転んだり、びっくりしたりしてもたいてい平気である	−0.088	0.649	0.188	0.464
40	だいたい、お母さんより活動的なタイプである	0.132	0.591	0.035	0.368
47	両親やおじいさん、おばあさん以外の人に抱かれたり、かわいがられるのを喜ぶ	0.136	0.552	−0.046	0.326
12	お母さんが厳しく言ったり声を張り上げると、機嫌が悪くなったり、お母さんを怒らせたことですまない気持ちや恥ずかしい気持ちになる	0.246	0.550	0.036	0.365
21	たいへん活動的で、いつも動き回っている。静かな遊びより活動的な遊びを好む	0.005	0.549	0.234	0.357
51	身ぎれいにしていたり、家の中をきちんとしておくことにいくらか努力する	0.012	0.545	0.010	0.298
52	お子さんがしたことでお母さんが笑ったり誉めたりすると、何度でも繰り返してする	0.227	0.540	−0.006	0.343
4	誰に対してもすぐ笑ったり微笑んだりする	−0.042	0.508	0.203	0.301
8	人形やぬいぐるみのような生き物をかたどったおもちゃを好む	0.148	0.498	0.002	0.270
2	怪我をしたり機嫌が悪くなったとき、お母さん以外の大人がなだめても受け入れる	0.117	0.467	−0.044	0.234
41	めったにお母さんの手助けを求めない	0.087	0.461	0.250	0.283
15	時々、誰かが話しかけても気づかないほど物事に熱中していることがある	0.188	0.430	0.125	0.236
42	お子さんがしたことをお客さんがおもしろがって誉めたりすると、何度も繰り返してする	0.248	0.412	−0.034	0.233
	Ⅲ 人との関係のとりにくさ α＝.7810				
33	家を訪れるたいていの大人を無視し、自分自身の活動の方に興味を示す	0.244	−0.002	0.783	0.673
6	昼寝や夜寝るとき、お母さんが寝かせようとすると、泣いたり嫌がることがしばしばある	0.167	0.125	0.719	0.561
23	お母さんから離れて遊んだり、一人でおもちゃで遊んでいるとき、事務的で淡々としている	0.301	0.007	0.586	0.434
27	家に来たお客さんとそのうちに打ち解けるかもしれないが、はじめはお客さんを無視したり避けたりする	0.232	0.264	0.564	0.442
14	お母さんがお子さんをお父さんやおじいさん、おばあさん、よく知っている人に託して外出すると、泣く	0.005	−0.009	0.499	0.249
46	もし選べるなら、大人よりおもちゃと遊ぶ	0.332	0.065	0.435	0.304
19	お母さんが立ち去ったことで機嫌が悪くなったとき、その場に座り込んで泣く。お母さんの後を追うことはない	0.322	0.325	0.408	0.376
	累積寄与率	24.80%	34.51%	39.78%	

2．IWMタイプによる子どもの育てにくさの捉え方

IWM尺度をもとに、どの下位尺度得点が優勢であるかによって、調査対象者を安定、回避、両価の３群（それぞれ２１人、８人、１４人）に分類し、育てにくさ尺度の３つの下位尺度得点について分散分析を行った（表２）。その結果、「育てやすさ」に関する子どもの行動において有意傾向がみられ、多重比較の結果、回避群が両価群よりその得点が高いこ

とが示された。

表2 IWMタイプによる「育てにくさ」の行動得点の分散分析

	安定群(21人)	回避群(8人)	両価群(14人)	F値	多重比較結果
ぐずりやすさ	17.81	18.88	20.86	2.228	
	(3.44)	(4.79)	(4.83)		
育てやすさ	32.33	34.00	30.00	3.202+	両価＜回避
	(3.37)	(4.14)	(4.06)		
関係のとりにくさ	11.62	12.44	12.29	.695	
	(2.06)	(2.19)	(2.02)		

数値は平均値、( ) 内は標準偏差　　+：＜.10

次に、母親の受容得点から子どもの行動得点を引いた点数を「ゆとり得点」とし、同様にIWMの3群における分散分析を行った（表3）。その結果、「ぐずりやすさ」において有意傾向が示され、両価群に比べて安定群のゆとり得点が高く、子どもがぐずった時の対応において安定群はゆとりがあるという傾向が示唆された。

表3 IWMタイプによる「ゆとり得点」の分散分析

	安定群(21人)	回避群(8人)	両価群(14人)	F値	多重比較結果
ぐずりやすさ	24.14	22.50	18.07	2.949＋	両価＜安定
	(8.10)	(6.82)	(6.13)		
育てやすさ	36.21	37.00	37.71	.186	
	(7.96)	(6.12)	(6.04)		
関係のとりにくさ	18.81	19.13	19.29	.030	
	(5.93)	(4.49)	(6.13)		

数値は平均値、( ) 内は標準偏差　　+：＜.10

3．母親の受容度、子どもの行動頻度とIWMとの関連

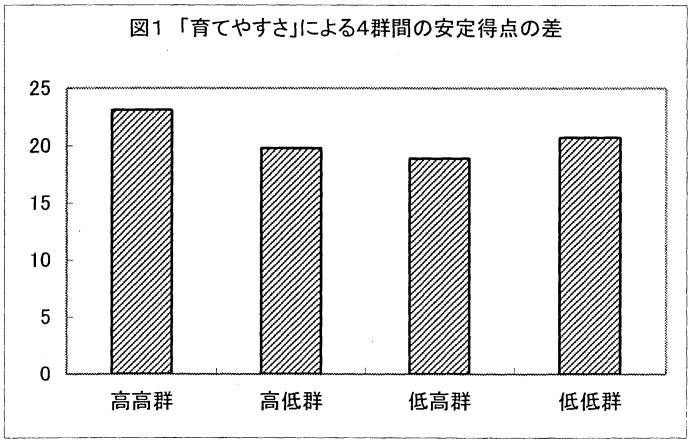
「ぐずりやすさ」「育てやすさ」「関係のとりにくさ」の3因子における受容得点と行動得点について、平均値±0.25SDを境に調査対象者をそれぞれ高群と低群に分類した。受容（高・低）×行動（高・低）の組み合わせによって、4群（高高・高低・低高・低低）を構成し、4群間でのIWM得点の違いについて分散分析を行った。結果、「ぐずりやすさ」因子については有意な群差はみられなかったが、「育てやすさ」因子の安定得点において有

意差が示され、高高群が他の３群に対し安定得点が高いことが示された（表４、図１）。つまり、育てやすさに関する子どもの行動の頻度が高く、また受容度も高い母親は、他の群に比べ母親のIWMの安定性が高いと言える。

表4 4群(受容×行動)間の「育てやすさ」におけるIWM得点の差

	高高群(24人)	高低群(10人)	低高群(10人)	低低群(19人)	F値	多重比較結果
安定	23.13	19.80	18.90	20.74	5.11 **	低低、低高、高低＜高高
	(3.43)	(3.80)	(3.25)	(2.81)		
回避	16.84	16.90	18.50	18.58	1.15	
	(4.00)	(1.66)	(3.03)	(4.11)		
両価	15.44	16.70	18.90	16.37	1.67	
	(5.02)	(5.12)	(3.35)	(2.29)		

数値は平均値、( )内は標準偏差　　**：p<.01　*：p<.05　＋：p<.10

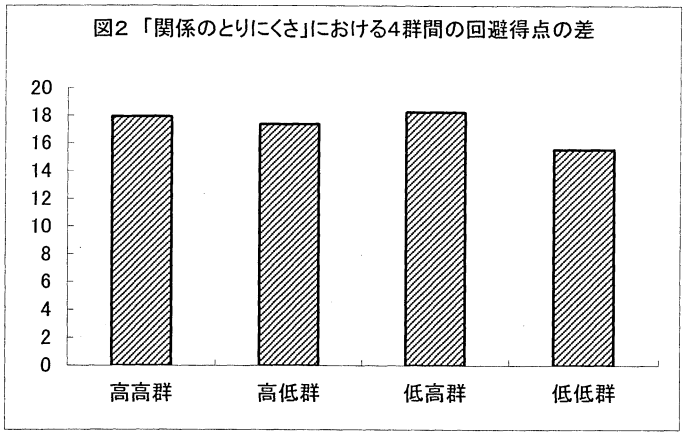


また、「関係のとりにくさ」因子による４群間の比較では、回避得点において有意傾向が示された。多重比較の結果、低低群が、高高群や低高群に比べて回避得点が低いことが示された（表５、図２）。つまり、関係のとりにくさに関する子どもの行動が「よくある」と報告した群（高高群・低高群）は、そうした行動が少なく、かつ受け入れにくいと報告した母親（低低群）よりも、回避得点が高い傾向にあるということが言える。

表5 4群(受容×行動)間の「関係のとりにくさ」におけるIWM得点の差

	高高群(16人)	高低群(16人)	低高群(18人)	低低群(20人)	F値	多重比較結果
安定	20.53	22.44	20.83	21.80	.92	
	(3.59)	(4.15)	(3.33)	(3.98)		
回避	17.94	17.38	18.25	15.55	2.48 ＋	低低＜低高、高高
	(2.95)	(2.96)	(4.48)	(2.78)		
両価	17.06	16.81	16.35	15.75	.34	
	(3.11)	(4.05)	(3.10)	(5.80)		

数値は平均値、( )内は標準偏差　　**：p<.01　*：p<.05　＋：p<.10



4．母親のIWMが子どもの育てにくさに及ぼす影響

母親のＩＷＭが子どもの育てにくさにどのように影響を及ぼしているかについて、重回帰分析によって検討した。その結果、子どもの「関係のとりにくさ」という行動に対して、母親の回避得点が正の影響を及ぼしていることが示された（表６）。

表6 IWMが行動得点に及ぼす影響（重回帰分析）

	ぐずりやすさ	育てやすさ	関係のとりにくさ
安定	.12	.18	−.12
回避	.06	.03	.24 ＊
両価	.23 ＋	.03	.01
R^2	.05	.03	.09 ＊

＊＊：p<.01　＊：p<.05　＋：p<.10

【　考察　】

1．IWMタイプによる子どもの育てにくさの捉え方

調査対象者をIWM得点によって３群に分類し、育てにくさ尺度との関連を検討した。その結果、回避群が両価群より「育てやすさ」に関する子どもの行動得点が高い傾向にあることが示された。つまり、回避群の母親は、「機嫌のよい時には、一日中、その状態でいることが多い」等の育てやすさに関する子どもの行動を、「よくある」と、より高い頻度で答えていたということである。

こうした結果から、回避群の母親の子どもが実際に最も育てやすいのか、というと、安易にそう結びつけることはできないのではないだろうか。それは、回避的な愛着は、養育者が拒否的であることによって、それを未然に防ぐため愛着に対する要求を最小限にとどめたり、そうした拒否が意識されないように距離を置いた接触を続けようとすることが背景にある（久保，2003）からである。つまり、佐藤（1998）も示しているように、こうし

た過程を経て回避型のIWMが優勢となった親は、不安が高まり愛着システムが活性化された場合、起こりうる葛藤を避けるために相手との接触から距離を置く傾向があるので、子どもの育てにくいような行動に巻き込まれないよう、無意識的に避けたり、そこに目を向けないようにしている可能性があるからである。

次に、IWMの3群において母親の「ゆとり得点」（母親の受容得点から子どもの行動得点を引いたもの）に差があるのかを調べた。その結果、「ぐずりやすさ」において両価群よりも安定群のゆとり得点が高く、子どもがぐずった時の対応において安定群はゆとりがあるという傾向が示唆された。

安定型の母親がこうした余裕のある関わり方をすることについて、一つはAinsworth,et.al(1978)のストレンジシチュエーション法（Strange Situation Procedure：以下SSP）のB型（安定型）の子どもがとる行動様式の点から考えられる。つまり、SSPでのB型（安定型）の子どもは、分離前に積極的に探索行動をとり、母親との分離では悲しむが、再会時には接触を求め、安心感を得て再び豊かな遊びや探索行動に移行することができる。これは、愛着対象の利用可能性を予期しており、常に愛着対象の行動を警戒する必要がなく、それだけ活動に注意資源を割り当てることができるからである（佐藤，1998）。この点から考えると、安定型の母親もまた、自らの養育体験が喚起されるような子どもとの関わり、特に子どもがぐずってストレスのかかる場面においても、世界や自分への信頼感でもって、自身の過去体験にとらわれずに目前の子どもの問題として注意を注げるのではないかと考えられる。

一方で、子どもがぐずった際に、両価群の母親がよりゆとりのない傾向があることについては、以下のように考えられる。佐藤（1998）によれば、両価型はそのメカニズムとして、「良い表象と悪い表象の分裂」と「悪い表象の強化」が特徴とされ、相手との葛藤により感じられた欠点が長所と切り離されて区分化される傾向があり、そのため否定的側面が肯定的側面に緩衝されずに情報処理をガイドしてしまうという。このことから考えると、そうした両価型の特性によって、子どもがぐずるといった行動をより否定的に感じやすいため、母親としてもゆとりがなく、その体験にとらわれてしまうのではないかと考えられる。

2．母親の受容度、子どもの行動頻度とIWMとの関連

母親の受容度（高・低）×子どもの行動頻度（高・低）の組み合わせによって、4群（高高・高低・低高・低低）を構成し、4群間でのＩWM得点の差異について検討した。結果、育てやすさに関する子どもの行動の頻度が高く、受容度の高い母親は、他の群に比べ母親のIWMの安定性が高いことがわかった。安定したIWMをもつ母親の子どもが最も育てやすい行動をとる傾向があるという本研究の結果は、アタッチメントの世代間伝達仮説を支持するものであると言えよう。

また、「関係のとりにくさ」因子では、回避得点において４群間に差がみられ、低低群（「関係のとりにくさ」に関する子どもの行動を受け入れにくいが、実際にそうした子どもの行動は少ない群）が、高高群（「関係のとりにくさ」に関する子どもの行動が多くみられるが、そうした行動を受け入れられる群）や低高群（「関係のとりにくさ」に関する子どもの行動が多くみられ、それを受け入れにくい群）に比べて回避得点が低いことが示された。つまり、関係のとりにくさに関する子どもの行動が「よくある」と報告した母親は、そうした行動が少ないと報告した母親よりも、回避得点が高い傾向にあるということが言える。母親の回避的な特性と関係のとりにくい子どもの行動との関連が示唆されたこの結果もまた、アタッチメントの世代間伝達仮説を支持するものと考えられる。

では、「関係のとりにくさ」に関する子どもの行動が少ないことは共通しているにも関わらず、低低群が低高群よりも回避得点が低かったのはなぜだろうか（有意差はみられなかったものの、両価得点においても低低群が最も低かった）。両者を比較すると、例えば「家を訪れるたいていの大人を無視し、自分自身の活動の方に興味を示す」や「昼寝や夜寝るとき、お母さんが寝かせようとすると、泣いたり嫌がることがしばしばある」といった子どもの関わりにくい行動について、「受け入れにくい」と回答しているか（低低群）、「受け入れられる」と回答しているか（低高群）に違いがある。こうした子どもの行動を受け入れにくいと感じることは母親として自然なことであり、むしろ、そうした行動を「非常に受け入れられる」と回答した方が、よくふるまおうとしていたか、ネガティブなことから目をそむける傾向があるという可能性も考えられる。アダルトアタッチメントインタビュー（Adult Attachment Interview：AAI）において、否定的な内容も肯定的な内容と併せてバランスのとれた見方で落ち着いて語れることは、安定型の特性だとされている（久保，2003）。つまり、子どもとのネガティブな体験についても、防衛や恐れなく容易に接近（回想）し適切に評価できるのは、低低群が最も不安定な IWM 傾向が低いということを裏付けている。

３．母親の IWM が子どもの育てにくさに及ぼす影響

母親のＩＷＭが子どもの育てにくさにどのように影響を及ぼしているかについて検討したところ、子どもの「関係のとりにくさ」という行動に対して、母親の回避得点が正の影響を及ぼしていることが示された。つまり、関係のとりにくい子どもの行動と、回避傾向の母親との関連が示されていると考えられる。

表２の結果においては、回避群の母親はそれほど育てにくさを感じず、むしろ育てやすさを多く報告していたが、この重回帰分析の結果からは、回避傾向の IWM をもつ母親の対人関係は、子どもの関係のとりにくさに影響していることが明らかとなった。加えて、先の表５の結果からも、「関係のとりにくさ」に関する子どもの行動頻度と母親の回避得点との関連が示されていた。このことから、回避群の母親は、子どもの育てやすい行動を強

調しており、一見安定した親子関係を築いているように見えるものの、実際には母親の回避傾向は子どもの関係のとりにくさに影響を及ぼしているということが示唆された。

【 まとめ 】

1．本研究では、子どもの育てにくさに関する質問紙調査を母親に行い、因子分析によって「ぐずりやすさ」「育てやすさ」「関係のとりにくさ」の３因子を抽出し、この尺度を「子どもの育てにくさ尺度」と命名した。

2．次に、その３因子と母親の IWM の関連について調べ、回避群が両価群に対して子どもの育てやすい行動をより多く報告している一方、子どものぐずりやすい場面における両価群のゆとりのなさ、安定群のゆとりのある様子が伺えた。

3．また、表５、６の結果より、母親の回避特性と子どもの関係のとりにくさとの関連が示唆された。回避群は、子どもの育てやすい行動を強調しており、一見安定した親子関係を築いているように見えるものの、実際には母親の回避傾向は子どもの関係のとりにくさに影響を及ぼしているということが明らかとなった。

4．このように、子どもの育てにくさにもいろいろな側面があり、またそれは母親の IWM の異なる側面と関連している可能性が示唆された。母親の IWM の特性を考慮することで、目に見える関わりだけでなく、より深いレベルで子どもの育てにくさや母子の関係性を捉えることができた。

【 文献 】

Ainsworth,M.D.S., Blehar,M.C., Waters,E., & Wall,S. 1978 *Patterns of Attachment: A psychological study of the strange situation.* Hillsdale, NJ: Erlbaum.

ボウルビィ，Ｊ． 黒田実郎・大羽蓁・岡田洋子（訳） 1976 母子関係の理論Ｉ―愛着行動― 岩崎学術出版社

(Bowlby,J. 1969 *Attachment and loss*, vol.1, *Attachment*. New York: Basic Books.)

ボウルビィ，Ｊ．黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子（訳） 1977 母子関係の理論Ⅱ―分離不安― 岩崎学術出版社

(Bowlby,J. 1973 *Attachment and loss*, vol.２, *Separation : Anxiety and anger.* New York : Basic Books.)

ボウルビィ，Ｊ．黒田実郎・吉田恒子・横浜恵三子（訳） 1981 母子関係の理論Ⅲ―愛情喪失― 岩崎学術出版社

(Bowlby,J. 1980 *Attachment and loss*, vol.3, *Loss : Sadness and depression*. New York : Basic Books.)

Crowell,J.A. & Feldman,S.S. 1988 Mother's internal models relationships and children's behavioral and mental developmental status in mother-child interaction.

Child Development, 59, 1273-1285.
遠藤利彦　1999　アタッチメント研究の方法論に関する一試論：Strange Situation Procedure と Attachment Q-Sort は何を測り得るか？　九州大学教育学部紀要, 43, 1-21.
Fonagy,P., Steel,H., & Steel,M.　1991　Mental representations of attachment during pregnancy predict the organization of infant-mother attachment at one year of age. *Child Development*, 62, 891-905.
原田正文　2006　子育ての変貌と次世代育成支援―兵庫レポートにみる子育て現場と子ども虐待予防―　名古屋大学出版会
数井みゆき・遠藤利彦（編）　2007　アタッチメントと臨床領域　ミネルヴァ書房
数井みゆき・遠藤利彦・田中亜希子・坂上裕子・菅沼真樹　2000　日本人母子における愛着の世代間伝達　教育心理学研究, 48(3), 323-332.
近藤清美　1993　乳幼児におけるアタッチメント研究の動向と Q 分類法によるアタッチメントの測定　発達心理学研究, 4, 108-116.
久保恵　2003　情緒的対人情報処理と内的ワーキングモデル　風間書房
佐藤徳　1998　内的作業モデルと防衛的情報処理　心理学評論, 41(1), 30-56.
詫摩武俊・戸田弘二　1988　愛着理論からみた青年の対人態度―成人版愛着スタイル尺度作成の試み―　東京都立大学人文学報, 196, 1-16.
内田利広・山口美穂・河合三奈子　2003　内的作業モデルに関する文献展望と今後の課題―IWM 研究の臨床領域への活用に向けて―　京都教育大学紀要, 103, 111-128.

【　資料　】～使用した質問紙～

保護者の方へ

アンケート調査への協力のお願い

京都教育大学教育臨床心理学研究室では、これまで３歳児前後のお子様をお持ちの母親に対して、どのような意識・態度で子どもさんに接しておられるかを検討してきました。この度、伏見保健所のご協力のもと、別紙のようなアンケート調査を行うことになり、ぜひ皆様にご協力をお願いしたいと思います。

同封の調査用紙の説明にしたがってご回答いただき、そのまま封をし、ご投函いただければ有り難いです。なおご協力いただいた方には、簡単な粗品を同封しております。

今後の子育て支援の一助になればと考えていますので、どうぞよろしくお願い致します。

研究代表
京都教育大学　教育学科
助教授　　内田利広

1. あなたの3歳前後のお子さんについて、以下の質問にお答え下さい。
   ①年齢・・・・・(　　)歳(　　)ヶ月
   ②性別・・・・・　男　/　女
   ③出生順位・・・・・(　　)人中　第(　　)番目

2. 以下に、子どもの行動について書かれた文章があります。それぞれの行動は、あなたの3歳前後のお子さんに、どれくらいの頻度でありますか。また、もしあなたのお子さんがそのような行動をした時、あなたは「全く受け入れられない」から「非常に受け入れられる」のうち、どのような気持ちになりますか。最も適当な所に○をつけて下さい。

※頻度については、「よくある」→○
「たまにある」→△
「ない」→×　　でお答え下さい。

		頻度（○△×）	全く受け入れられない	受け入れられない	あまり受け入れられない	やや受け入れられる	受け入れられる	非常に受け入れられる
例)	はじめははずかしがっていた人や、恐がっていた物に慣れるのが早い		1	2	3	4	5	6
1)	遊びの後お母さんの方へ戻ってきたとき、理由もないのにぐずぐず言うことがある		1	2	3	4	5	6
2)	怪我をしたり機嫌が悪くなったとき、お母さん以外の大人がなだめても受け入れる		1	2	3	4	5	6
3)	お母さんがそばにいて何か遊びたい物を見つけた時、ぐずぐず言ったりお母さんに取ってもらおうとする		1	2	3	4	5	6
4)	誰に対してもすぐ笑ったり微笑んだりする		1	2	3	4	5	6
5)	いったん泣き出すと、激しく泣く		1	2	3	4	5	6
6)	昼寝や夜寝るとき、お母さんが寝かせようとすると、泣いたり嫌がることがしばしばある		1	2	3	4	5	6
7)	お母さんが立ち去ったために機嫌が悪くなった時、お母さんがいなくなった後でも泣き続けたり、時には怒ったりする		1	2	3	4	5	6
8)	人形やぬいぐるみのような生き物をかたどったおもちゃを好む		1	2	3	4	5	6
9)	お客さんが何か気に入らないことをすると、すぐにお客さんの相手をやめる		1	2	3	4	5	6
10)	ぶつけたり、転んだり、びっくりしたりしてもたいてい平気である		1	2	3	4	5	6
11)	お母さんが自分以外の家族の者と一緒に座ったり仲良くしたりすると、自分の方にお母さんの注意を向けようとする		1	2	3	4	5	6
12)	お母さんが厳しく言ったり声を張り上げると、機嫌が悪くなったり、お母さんを怒らせたことですまない気持ちや恥ずかしい気持ちになる		1	2	3	4	5	6
13)	お母さんの見えないところで遊んでいるとき、お子さんは自分で好きなところに行ってしまう		1	2	3	4	5	6
14)	お母さんがお子さんをお父さんやおじいさん、おばあさん、よく知っている人に託して外出すると、泣く		1	2	3	4	5	6

		頻度（○△×）	全く受け入れられない	受け入れられない	あまり受け入れられない	やや受け入れられる	受け入れられる	非常に受け入れられる
15)	時々、誰かが話しかけても気づかないほど物事に熱中していることがある		1	2	3	4	5	6
16)	おもちゃに腹をたてることがよくある		1	2	3	4	5	6
17)	お母さんの注意をひとり占めにしたがる。もし、お母さんが忙しかったり、誰かと話していると邪魔をする		1	2	3	4	5	6
18)	お母さんに抱かれているとき、降ろして欲しいと合図するので降ろすと、ぐずったり、またすぐ抱いて欲しいと要求する		1	2	3	4	5	6
19)	お母さんが立ち去ったことで機嫌が悪くなったとき、その場に座り込んで泣く。お母さんの後を追うことはない		1	2	3	4	5	6
20)	お母さんに対して独立している。一人で遊び、遊びたいときには容易にお母さんから離れる		1	2	3	4	5	6
21)	たいへん活動的で、いつも動き回っている。静かな遊びより活動的な遊びを好む		1	2	3	4	5	6
22)	お母さんに対してわがままで気が短い、自分の望むことをお母さんがすぐにしないとぐずぐず言ったり頑固に要求し続ける		1	2	3	4	5	6
23)	お母さんから離れて遊んだり、一人でおもちゃで遊んでいるとき、事務的で淡々としている		1	2	3	4	5	6
24)	単に、お母さんの居所に注意を払っているばかりではなく、お母さんの近くに留まったり、たびたびお母さんの方に戻ってくる		1	2	3	4	5	6
25)	音楽に合わせて、歌ったり踊ったりするのが好きである		1	2	3	4	5	6
26)	つまずいたり、転んだり、ぶつかったりしないで走ったり歩いたりする		1	2	3	4	5	6
27)	家に来たお客さんとそのうちに打ち解けるかもしれないが、はじめはお客さんを無視したり避けたりする		1	2	3	4	5	6
28)	お客さんと遊ぶとき、お客さんの背によじ登ったり、ひざに座ったりと言った身体接触を持ちながら遊ぶ		1	2	3	4	5	6
29)	小さな物を扱ったり、小さな物どうしをくっつけたりすることがうまくできない		1	2	3	4	5	6
30)	お母さんがちょっと手伝おうとしただけでも、していることを邪魔されたかのように振舞う		1	2	3	4	5	6
31)	難しそうだと見てとると、ためらったり興味を失ったりする		1	2	3	4	5	6
32)	恐い物知らずである		1	2	3	4	5	6
33)	家を訪れるたいていの大人を無視し、自分自身の活動の方に興味を示す		1	2	3	4	5	6
34)	一つのおもちゃや活動を終えても、活動の合間にお母さんの方に戻ることなく、たいてい自分で次にすることを見つける		1	2	3	4	5	6

	頻度（○△×）	全く受け入れられない	受け入れられない	あまり受け入れられない	やや受け入れられる	受け入れられる	非常に受け入れられる
35) お母さんと荒っぽく遊ぶ。活発な遊びの中で、たたいたり、ひっかいたり、かみついたりする（必ずしも、お母さんを傷つけようというつもりはない）		1	2	3	4	5	6
36) 機嫌のよい時には、一日中、その状態でいることが多い		1	2	3	4	5	6
37) 自分でしてみる前に、先に誰かに手伝ってもらおうとする		1	2	3	4	5	6
38) お母さんが、お子さんの今している活動を止めさせ、次の活動をさせようとすると、すぐに機嫌が悪くなる（たとえ、新しい活動がお子さんのいつも喜ぶものであった場合でも		1	2	3	4	5	6
39) 家にお客さんがいると、みんなの注目を自分に集めたがる		1	2	3	4	5	6
40) だいたい、お母さんより活動的なタイプである		1	2	3	4	5	6
41) めったにお母さんの手助けを求めない		1	2	3	4	5	6
42) お子さんがしたことをお客さんがおもしろがって誉めたりすると、何度も繰り返してする		1	2	3	4	5	6
43) いつも持ち歩いたり、寝床に持って入ったり、機嫌が悪くなると抱きしめたりするぐらい大好きな特定のおもちゃやタオル等がある（お子さんが2歳未満の場合、哺乳瓶やおしゃぶりは含まれない）		1	2	3	4	5	6
44) お母さんがして欲しいことをすぐにやらないと、あたかもお母さんはして欲しいことを全くやらないと予測しているかのようにふるまう（ぐずったり、怒ったり、あきらめて他のことをしたり等する）		1	2	3	4	5	6
45) 家にいるとき、お母さんが部屋から出ると機嫌が悪くなったり泣いたりする（後追いするかしないかは問題としない）		1	2	3	4	5	6
46) もし選べるなら、大人よりおもちゃと遊ぶ		1	2	3	4	5	6
47) 両親やおじいさん、おばあさん以外の人に抱かれたり、かわいがられるのを喜ぶ		1	2	3	4	5	6
48) すぐにお母さんに腹を立てる		1	2	3	4	5	6
49) 望むことをお母さんにやってもらう手段として泣いたり、ぐずったりする		1	2	3	4	5	6
50) たいていの場合、遊びに使うおもちゃや遊び方は特定の限られたものである		1	2	3	4	5	6
51) 身ぎれいにしていたり、家の中をきちんとしておくことにいくらか努力する		1	2	3	4	5	6
52) お子さんがしたことでお母さんが笑ったり誉めたりすると、何度でも繰り返してする		1	2	3	4	5	6
53) 何かで機嫌が悪くなると、その場に座って泣く		1	2	3	4	5	6

3. 以下の各項目の内容は、普段のあなたにどの程度あてはまりますか。最も適当な所に○をつけて下さい。

	全くあてはまらない	あてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	あてはまる	非常によくあてはまる
1) 私はわりあいにたやすく人と親しくなる方だと思う	1	2	3	4	5	6
2) 私はあまり人と親しくなるのは好きではない	1	2	3	4	5	6
3) 人は、本当はいやいやながら私と親しくしてくれているのではないかと思うことがある	1	2	3	4	5	6
4) 私は人よりも知り合いができやすい方だ	1	2	3	4	5	6
5) 私はあまり自分に自信を持てない方である	1	2	3	4	5	6
6) 私は気楽に頼ったり頼られたりすることができる	1	2	3	4	5	6
7) 人は全面的には信用できないと思う	1	2	3	4	5	6
8) 私は時々、友達が本当は私を好いてくれていないのではないかとか、私と一緒にいたくないのではないかと心配になることがある	1	2	3	4	5	6
9) 私は人に好かれやすい性質だと思う	1	2	3	4	5	6
10) 私は人に頼らなくても、自分一人で十分にうまくやっていくことができると思う	1	2	3	4	5	6
11) 私は誤解されやすい方だ	1	2	3	4	5	6
12) どんなことがあっても、友達は私を見捨てたりしないと思う	1	2	3	4	5	6
13) 人に頼るのは好きではない	1	2	3	4	5	6
14) たいていの人は私を好いてくれていると思う	1	2	3	4	5	6
15) 生涯つきあっていきたいと思うような友人はほとんどいない	1	2	3	4	5	6
16) 人にあまりにも親しくされたり、こちらが望む以上に親しくなることを求められたりすると、イライラしてしまう	1	2	3	4	5	6
17) 私はいつも人と一緒にいたがるので、時々人からうとまれてしまう	1	2	3	4	5	6
18) 私は自分を信用できなくなることがよくある	1	2	3	4	5	6

これで質問は終了です。
最後に、記入もれがないか、ご確認をお願いします。
ご協力、本当にありがとうございました。

第２章

TAT物語から見た内的作業モデル

【　問題と目的　】

Bowlby（1977,1981）は、愛着の問題を乳幼児期に限らず、生涯発達の問題として捉え、その発現の仕方や様相は異なるが、青年・成人にとっても重要な問題であること、幼少期の愛着をめぐる経験から、内的作業モデル（Internal　Working　Models：以下IWM）が構成され、それが対人行動を規定するとした。

IWMは発達早期の経験が表象モデルに取り込まれ、内的表象になったものであり、養育者からどのような養育を受けたか―敏感（sensitive）で応答的な（responsive）養育だったか否か―により、養育者の近接可能性と応答性、および自分がそれに値するかに関して異なった表象が構成される。それは「他者は自分の要求に対してどの位応じてくれる存在なのか、自分は他者からどの程度受け入れられている存在なのかという他者・自己の有効性に関する内的表象」であり、対人的情報を処理する際の枠組みとなる。

BowlbyがIWMという概念を提唱して以来、臨床および発達分野で様々な研究がなされてきたが、特に青年期以降のIWMについては、質問紙によってそれを捉えているものが多い。本来、IWMとは、無意識的な領域を含んだ個人の表象モデルであるため、質問紙法という意識レベルでの自己評定には限界があると考えられる。一方、面接によって個人のIWMスタイルを捉えるために、Mainによって開発されたAdult Attachment Interview（以下AAI）は、その手続きが公にはされておらず、習得にもかなりの時間を要するものである。

愛着史の記憶や対人関係の認識によってIWMが検討され、Bowlby理論が実証されてきたのだが、これまでの研究で各測定法が扱ってきたIWM概念が必ずしも等質でないことを遠藤（1992）が指摘している。託摩・戸田（1988）の質問紙では、一般的な自他対象という意味でのIWMが扱われているのに対して、AAIでは両親との関係、現在の対人関係への影響など包括的な表象が扱われている。IWMの分類に際しても、AAIでは、思い出への近接容易性や語りの一貫性などといった、メタ的な評定に基づいてIWMの働き方が調べられているのに対して、質問紙では、自己評定結果がそのままIWMの個人差として扱われている。今後IWM研究を進めるにあたっては、どの表象をどの次元で評価しているのかという問題に慎重になりながら、各結果の関連性を検証し、IWM概念そのものを説明していくことが必要と思われる（久保、2000）。

一方、主題統覚検査（以下TAT）は、Freud(1938)の「知覚のメモリーは、現時点での

刺激の知覚に影響を与えている」という仮説に基づいている。そしてBellak（1971）は、統覚について「ある知覚についての主体の意味深き解釈」と定義している。つまり、個人にとっての新しい体験は、あらゆる個人的な過去の経験の残留物（residuum）によって変容され意味付けられるのであり、「特定場面の知覚には、個人のそれに関わる特定の体験や先行するイメージ、そこから喚起される特定の感情が一時的に、しかし全体的に影響を及ぼしている」というのがTATの基礎理論である。

ある特定のエピソード記憶や、類似のエピソード記憶が一般化された表象を下位構造として機能する内的ワーキング・モデルは、いわば「過去を通して現在を評価し、未来を予測する」モデルであり、この意味では、過去体験や先行するイメージが現在の特定場面での知覚に影響を及ぼすという上記の統覚理論と対応していると言える。（久保田、1993）

また、TATにおいて、山本（1992）は「TAT物語にあらわれる個人の人物像は、現実の対人関係におけるそれぞれ具体的な何人かの人物と短絡的に関係しているのではなく、様々な対人関係の問題を処理する際の、相手への反応のしかたや考え方など、語り手のもつ基本的かかわり方にもとづいてイメージ化された人物像なのである」と述べている。このことから、TAT物語とIWMにおける概念の重なりが考えられる。

そこで、本研究では、IWM研究の方法としてTATを用いることの妥当性を検討する。IWMをより豊かに捉える試みについて考察したい。

【　方法　】

1．調査対象者と調査形式

大学生の男女145名に講義内で質問紙に回答してもらい回収した。記入に不備のなかった125名を分析の対象とした。

2．調査時期

・予備調査：2004年5月　20名

・本調査：2004年11月及び2005年5月

3．質問紙の構成

（1）成人版愛着スタイル尺度（詫摩・戸田，1988）：「secure（安定）」「avoidant（回避）」「ambivalent(両価)」の3下位尺度×6項目の全18項目から構成される。6件法。

（2）FACESKG-Ⅳ（立木，1999）：FACESKGはOlsonらが開発したFACESをもとに立木が日本の生活や文化に即して構成概念を検討して項目を作成したもので、信頼性・妥

当性が確認されている。このモデルは家族のきずな（Cohesion）、かじとり(Adaptability)の２つの次元が家族機能を決定する上での中心概念と考え、両次元を組み合わせてモデル化している。

（３）自尊感情尺度（山本，1982）：ローゼンバーグ(1965)により作成された自尊感情尺度を山本らが邦訳したもの。10項目について5件法で回答を求めた。

（４）自己肯定感尺度（平石，1990）：青年期の自己肯定意識の発達のあり方を検討するために作成されたもので、青年期特有の心性を反映させたものになっている。本研究では、対他者領域の「自己閉鎖性・人間不信」8項目、「自己表明・対人的積極性」7項目について5件法で回答を求めた。

（５）TAT

①実施手続き：「これから6枚の絵をお見せします。それぞれの絵について、絵を見て、そこから感じることをもとに自由にお話をつくってください。そこにいる人が何を感じ、何をしているのかを含んだ物語を作り、回答欄の番号に合わせて、記入してください。」という教示に基づき、図版を見ながら、そこから感じることをもとに物語を作成し、用紙に自由記述した。

②検査図版の選択とその意義：TAT図版より特に自己や対象との関係が現れやすいと考えられる6枚（1、2、5、14、15、19）を抽出した（表1）。図版1は導入にふさわしく、図版2では家族イメージが出やすく、3者関係をどう捉えるかという視点がある。図版14ではポジティブな反応が多く、語り手の一人でいる内面の世界がよく出る。図版15ではネガティブな反応が多く、図版14の反応とのコントラストを見ることも大切である。図版5・19では母子関係が表現されることが多い。それぞれの図版への反応および6枚通しての反応の仕方を検討することで、IWMのタイプを評定する。

表１　ＴＡＴ図版の特性＜山本（1992）より抜粋＞

図版1	この図版はまさに導入図版としてふさわしい特徴を持っている。同一視しやすく、反応の失敗が最も少ない。被検査者の検査への不安、意気込み、緊張、自信などが物語の展開の中に二重映しとして出てくる。

図版2	2枚目で3人の人物がいる複雑な場面が示され、被検者にとってはかなり緊張し戸惑う図版である。絵のちぐはぐさに敏感な人は、絵の細部にこだわったり、前の女性と背後とを全く関係の無いものとしたりする。そこに、強迫傾向や固執性の傾向や人間関係の葛藤の処理の仕方がでやすいことになる。テーマの出現の仕方について、3人の人物で1つの物語が作られることがこの絵に仕組まれている課題である。大体が家族イメージに関するものである。時には男女の三角関係的テーマもでてくる。また、前面の若い女性と背後の2人との世界がどうしても結び付けられないこともある。
図版14	「希望図版」と呼ぶことがある。この窓の明るさが、未来の希望を象徴しているように語られることが多いからである。特に黒い世界がこれまでの苦労や、閉じ込められた世界を象徴し、そこから開放されていく感じが窓について語られる。1人でいる方が楽な人はこの絵を好む。内面の葛藤、野心、希望、生活設計が良く出る。その語り手の一人でいる内面の世界が良く出てくる。
図版15	自分の中の攻撃的欲求の処理の仕方を良くここで見ることができる。愛する人や頼れる人を失って一人孤独になった物語を引き出すこともある。また、孤独、死に対する不安、老いに対する恐怖がテーマになって出てくることもある。 図版14の男性があごをやや上に向けて前向きの感じを示しているのに対し、それに続く図版15はあごを引いた過去を見つめる雰囲気をかもしだしている。この2つの図版は、1人でいる内面の世界が続けて出されることが多い。両方の図版で作られる物語の雰囲気のコントラストを見るのも大切である。
図版5	母親的な世界を中心とする家族全体の雰囲気が触発されるように組まれている。この部屋の中に導入されてくる人物とのぞいている女性との関係や情感の流れなどが物語の雰囲気と構造を決めていく。特に離人体験を持つ人は、寒々とした空虚感とひんやりとした雰囲気を示す人が多かった。家族内の緊張、不信、不安を暗示させるとも考えられる。
図版19	語り手の母親との基本的関係（basic relation）を良く示す物語が作られると見ている。「母子基本関係図版」と呼んでいる。ここで語られる物語が、小屋のまわりが雪や嵐であっても小屋の中にほのぼのと温かいものがあればほっとさせる。それに対して、冷え冷えとしていたり、廃墟であったり、大火事で燃えている時は、母子の基本的関係に重大な問題があると考えられる。これまでの図版で作られた母子関係の物語に示されてきた母子関係の構造の断片が、この図版で創られる物語によって象徴的に基本構造を浮かび上がらせてくれる。また、家や船、潜水艦、時には鯨のお腹の中といった囲いが登場する。その「囲い」の象徴的特性と雰囲気は、物語の中の母親イメージを暗示させる。ＴＡＴの画面にとらわれ、感情移入できないまま物語を作ってきた人にとっては、この図版19はどうしていいか分からないものになる。「だれか有名画家の描いた絵」「抽象画」

	という反応に終わり、イメージが出てこない。それ自体、母との関係において基本的に問題があることを暗示させる。その場合、語り手の感じるこの場面の雰囲気について一言聞いておくと良い。

③評定方法；Bowlbyや先行研究（高橋他，2002）のIWMタイプ（secure/avoidant/ambivalent）に関する記述を参考に、予備調査から3名の合議によって各図版に共通する点を抽出し、分類基準を作成した（表2）。IWMに対応する形で安定/回避/両価型としている。3枚以上の反応がある被験者を対象として、図版ごとにその記述内容から安定・回避・両価のいずれにあたるかを評定した後、6枚の図版を通しての被験者のタイプを評定した。まず被験者80名について、筆者ら3人で基準に照らし合わせて協議し、評定を行い、その後、45名については各々で評定した。一致率は、前半80名においては71%、後半の45名については83%、全体で78%であった。TAT評定結果を表3に示す。

表2 TAT物語の分類基準

安定型	・図版と内容との間に整合性がある(極端な内容でない) ・negativeな内容とpositiveな内容の両方が語られている ・図版から感じ取られるnegativeな刺激を自然に捉え、語ることができている
回避型	・反応量が少ない ・negativeな刺激から目を背けて反応しない、または理想化する ・ギャグ調にごまかす、脚色する ・関係性に言及せず、ばらばらに要素を語る ・状況説明のみで感情表現がない ・「～のよう」「～みたい」とぼかし、距離をとる
両価型	・不安感や不全感が強く語られている ・negativeな刺激に過度に反応し、極端な内容である ・自分の感情や葛藤をかきたてられ、図版の性質以上に過剰に反応する(絵から離れた表現)

表3 TAT評定結果(人)

安定	回避	両価	合計
74	28	23	125

【　結果と考察　】

１．ＴＡＴ物語における各群の典型例

TAT 物語の分類基準により、各群に評定された被験者の TAT 物語の典型例を表に示す。

（１）安定群におけるＴＡＴ物語の典型例

図版２においては、３人の人物で１つの物語が語られていて、主人公の感情が表現されている。図版５においては、主人公の状況が語られるとともに、少しさびしい思いと嬉しさの感情が両面から語られている。図版１９では、冬の寒さと対照的に家の中のあたたかさが表現されている。（表４）

表４　安定群における TAT 物語の典型例

図版２	被験者 No. 20	彼女は裕福な家庭に育ったので、世間知らずである。学校の帰り道に農作業を行う夫婦を見て、何か自分のすんでいる世界にはない魅力にちょっとした憧れをいだいている。また、農婦が妊娠しておなかが出ていることに、生命の神秘のような、前述とは異なる、女性としての憧れのような、興味のようなものを感じている。
図版５	被験者 No. 36	ケガをして部屋に迷い込んできた鳥を看病していた。少しずつ回復し、もう離してもいい時がきた。窓をあけ、鳥をはなつと、青い空へ勢いよく飛び出していった。青い空の中へすい込まれたように消えていく鳥を見て、少しさびしい思いと元気に飛び立っていったうれしさを感じている。
図版19	被験者 No. 133	とても寒い地域の冬の景色。家には雪が積もっていてとても寒いが、家の中には暖炉があってとても温かい様子の絵である。

（２）回避群におけるＴＡＴ物語の典型例

図版２においては、背景の人物を絵画の世界として切り離しており、感情の交流や関係性の言及が見られない。図版５では、非常に短い文になっていて、反応量が少ない。また、状況説明のみで、感情表現がない。図版１９では、ギャグ調の表現で図版への言及をぼやかしている。（表５）

表５　回避群における TAT 物語の典型例

図版２	被験者 No. 80	先生が絵画の前に立って子ども達の方を向いている。まだ授業は始まっていなくて、生徒が全員集まるのを待っているところ。
図版５	被験者	屋上へ出ていくところ。

	No. 108	
図版19	被験者 No. 18	これが2000年後のせかいなのかー。タイムスリップ:フューチャー

（３）両価群におけるTAT物語の典型例

図版２では、母親に対する不安感が語られている。図版５では、ポジティブな反応が多い図版に対して、極端にネガティブな反応がされている。図版１９では、図版から離れた極端な表現が見られ、不安感がネガティブな表現で語られている。（表６）

表６　両価群における TAT 物語の典型例

図版2	被験者 No. 17	とても裕福な家庭、しかし、家族のつながりは極めてうすい。少女は、なんとかして母の目にとまりたかった。一生懸命勉強して、よい成績をおさめれば、母はこっちを向いてくれるだろうか。
図版5	被験者 No. 120	少年は空を飛びたくてしかたありませんでした。そしてロウで作った羽で飛び立ちましたが、ロウが溶けて落ちて死んでしまいました。
図版19	被験者 No. 10	粘りつくような闇は濃く、ただぐるぐるとうずを巻き、ただその空に停滞する。何かがいそうなその夜に、人は外に出てはならない。もしも命がおしいなら、屋根からのぞくその影を知ろうなどとはしてはいけない。灯る明かりの中にいて、夜の闇を見てはならない。外にあるの闇は夢だから。ただ留まり続ける夢だから。粘る闇はくりかえす悪夢。何をしてもおわらぬ悪夢。忘れ得ぬ想い。

２．ＴＡＴと自己意識、家族関係との関連

TAT により分類された３群（安定/回避/両価）を独立変数、自尊感情尺度および自己肯定間尺度の２因子（人間不信・自己表明）を従属変数として、分散分析を行った（表７）。自己肯定感尺度の「人間不信」で両価群が安定群より有意に高い。

表7　TAT評定3群における自尊感情、自己肯定感の得点

	T A T				
	安定群	回避群	両価群	F値	
（人数）	（74名）	（28名）	（23名）		
自尊感情	33.6	32.75	31.03	0.44	n.s.
	(7.80)	(7.00)	(6.69)		
自己肯定感					
人間不信	19.76	21.04	23.27	3.96	** 両＞安
	(6.72)	(6.66)	(5.20)		
自己表明	24.07	24.18	22.08	0.78	n.s.
	(5.12)	(4.71	(3.18)		
（ ）標準偏差			25	** P<.01	

TAT により分類された３群（安定/回避/両価）を独立変数、家族関係尺度の２因子（きずな・かじとり）を従属変数として、分散分析を行った（表８）。
家族関係尺度の「きずな」で安定群が両価・回避群より有意に高い。

表８　TAT評定3群における家族関係の得点

	T A T				
	安定群	回避群	両価群	F値	
（人数）	（74名）	（28名）	（23名）		
家族関係					
きずな	5.13	2.68	2.30	4.62	** 安＞両・回
	(4.78)	(3.93)	(5.88)		
かじとり	-0.61	-0.14	0.41	2.06	n.s.
	(1.65)	(2.80)	(1.99)		
（ ）標準偏差				** P<.01	

こうした結果は、IWM 理論とも一致し、TAT を用いた本手続きが IWM を捉えるのに妥当であることが伺えた。

３．TAT と愛着スタイルとの関連

TAT により分類された３群（安定/回避/両価）を独立変数、愛着スタイル尺度の３因子（secure/avoidant/ambivalent）を従属変数として、分散分析を行った（表９）。

表9 TAT3群における愛着スタイル得点の差

		T A T				
		安定(74名)	回避(28名)	両価(23名)	F値	多重比較
愛着スタイル	secure	22.22	23.18	21.17	1.00	
		(5.18)	(4.69)	(4.95)		
	avoidant	16.16	17.29	18.57	2.12	
		(5.08)	(5.48)	(4.34)		
	ambivalent	18.55	19.89	20.78	2.35＋	安＜両
		(4.95)	(3.74)	(4.59)		

数値は平均値、( )内は標準偏差　　＋:＜.10

群ごとに得点を見ると、まず TAT 安定群は愛着スタイルの secure 得点が比較的高く、avoidant、ambivalent 得点は他群と比して低い様相が、また TAT 回避群は secure 得点が高く、avoidant、ambivalent 得点も中程度に高い様相が、TAT 両価群は secure 得点が低く、avoidant、ambivalent 得点が高い様相が見てとれ、TAT と愛着スタイルとの関連性がある程度伺えたものの、有意な差としては ambivalent 得点においての群差（安定群＜

両価群）のみであった。その他は有意な関連はみられず、愛着スタイル尺度によって捉えられるIWMと、TATによって捉えられるIWMは、完全には重なり合うものではないことが伺えた。

これについては、まず第1に、意識レベルで回答する質問紙法と、無意識レベルを含んだTATとの差が考えられる。特にTAT回避群においては、図版のnegativeな刺激に対してギャグ調でごまかしたり脚色したりして理想化する特徴があり、そうした防衛的方略によって、愛着スタイル質問紙においても理想的な回答をし、secure得点が高くなったということも考えられる。

4．TATによる評定と愛着スタイル尺度による評定が異なるケースの検討

（1）ＴＡＴ評定は回避型であるが、愛着スタイルはsecure型のケース

典型的な回避型に比べてしっかりとしたストーリーはあるが、文末で「～のように思える」「感じがする」「雰囲気がする」等、距離をとるような表現となっている。また、ギャグ調の表現が目立ち、真意を覆い隠そうとする傾向がある。（表10）

対人関係、対自己関係において、無意識的に距離をとったり、真意を隠し、ごまかしてうまくやる傾向があるので、一見安定したＩＷＭを形成しているように見える可能性がある。

表10　TAT：回避、愛着スタイル：secureの被験者の具体例

被験者 No. 56	図版2	「手前の女性は、何かに悩みをかかけ、何かを見つめている。と言った感じがする。とは別に、おくの女性は馬をあつかう男の監視もしくは、夫を上目から見ている女王様気分の女性のように思える。」
	図版14	黒すぎて分かりにくいが、男性が部屋をくらくして、明るい（夜）外をせつなくみていそうな感じがする。「心に悩みを抱えながらも、明るい未来へ飛びたとうとする気持ちから足をだしているように思える。」
	図版15	何か固くて暗いTににかこまれ、悲しくかつ冷たい表情をしているように思える。手を合わせていることから目に見えない何かにしばられているように思える。背を落とし、肩も落としていることから、落ち込んでいるのでは？「僕はここから出られないのか～」
被験者 No. 30	図版2	ジェニファーは学校へ行く途中です。「なんであのオッサンはだかやねん。」不思議に思いました。
	図版14	「夜になったし窓しめな。蚊が入ってくるわ」といいながらジョニーは窓を閉めました。
	図版15	父親の墓前にて。。。「私、身も心も女の子になりましたの」と報告に来ました。

（２）ＴＡＴ評定は両価型であるが、愛着スタイルは secure 型のケース

図版 14 のように negative な要素の強い刺激に対しては、両価的な過剰な反応をするものの、図版５や図版 15 のようなレベルの刺激には、比較的安定的な表現をする。

基本的には安定的なＩＷＭを形成しているように見えるが、不安や葛藤等 negative な刺激の強い状況においては、より不安感を感じ、困惑する可能性がある。（表 11）

表 11　ＴＡＴ：両価、愛着スタイル：secure の被験者の具体例

被験者 No.67	図版５	「あら、出かけたのかしら。宿題ちゃんとしていったのかしらね。」
	図版14	「やっと光が見えた！！」僕の心はこれまで真っ暗。決して笑顔をふるまうことなんてできやしなかった。先生のおかげで、僕はやっと光のある地へふみだすことがいまこそ叶う！！
	図版15	天外孤独のダニーじいさん。彼は、本当に孤独でした。彼は死んでからも誰の心の中に残ることもなければ、誰にも最後をみとってもらえないことにぜつぼう感を感じています。せめて、埋葬だけでも誰かにしてほしい・・・。
被験者 No.101	図版５	「どこにいるの？チャーリー、どこー？」母は息子を探している。しかし、家のどこにもいない。「チャーリー、いいかげんにしなさいよー」。そのころチャーリーは、家の外にうまく出ていた。「よしっ！！いこうっ！！」チャーリーとポールは家を背にかけだしていった。
	図版14	ついに脱出できた。男は、今までの苦しい生活からようやくのがれたのだ。まっくらなところからの脱出。しかし、まっくらな所にいすぎたせいか、明るすぎて何もみえない・・・。
	図版15	老人は許してもらおうと必死だった。１人で真夜中に墓地に出かけ、妻のもと（墓石）へいった。「ゆるしてくれ、ゆるしてくれ、あのことはなかったことにしておくれ・・・」それから老人は、毎日墓地へ出掛けるようになった。

現今の青年期・成人期に関するアタッチメント研究には、大きく２つの流れがあると言える（Simpson＆Rholes, 1998）。１つは、友人あるいは恋人や配偶者などの現在の主要なアタッチメント対象との関係性の実態とともに、あるいはそれ以上に、過去における自己と養育者との関係性に関する記憶表象を重視する。その主たる測定方法が AAI であり、個人の過去の養育者との関わりに関する語りの構造に、無意識的に、その個人のアタッチメントに関する情報処理の特異性、すなわち、内的作業モデルの質が反映されると仮定される（遠藤, 1992, 2006；Hesse, 1999）。もう１つの流れは、親友や恋人あるいは配偶者など、基本的に個人が選択的に構築しうる現在の関係性の実態を問題にしている。そこでは、アタッチメントおよび内的作業モデルの概念が、種々の対人関係領域に通底する、共通の基本枠として応用されることになるが、そこに親子関係の視点は相対的に希薄である。その主たる測定方法は自己報告的な強制選択法あるいは多項目の質問紙法であり、個

人の無意識的過程に焦点を当てるAAIに対して、どちらかと言えば、個人が意識的に想起しうる関係性の側面を把捉しようとするところに大きな特徴があると言える（遠藤, 2007）。

質問紙によるIWMとTAT物語によるIWMにずれが生じることは、上述より測定するレベルに違いがあるため、当然の結果であり、TAT物語によるIWMがより無意識的なIWMを測定していることを示唆している。本研究においてTAT物語からIWMを測定することがある程度妥当であることが示唆されたことで、よりAAIに近い無意識的なIWMが反映される測定法の可能性を見出せた。今後は、より豊かに個人のIWMを反映するTAT物語によるIWMの測定方法を整理・改善し、臨床場面への活用を検討したい。

【　まとめ　】

TATを用いてIWMを捉えることについて、自己肯定感尺度・家族関係尺度との関連から、その妥当性がある程度うかがえた。刺激画からストーリーを作ることで、自己および他者に対する表象が、特にネガティブな刺激への反応や、刺激画の中の対人関係への言及によって、投影されている。

TATと愛着スタイル尺度との関連より、TATで捉えるIWMと愛着スタイル尺度で捉えるIWMは、ある程度関連はあるものの完全には一致しないことが示唆された。

TATによる評定と愛着スタイル尺度による評定が異なるケースを検討したところ、愛着スタイル尺度においてsecure傾向が高い人の中に、無意識的にはavoidant、ambivalentの要素を強くもつ人もいた。

以上より、個人のIWMを捉えるためにTATを用いることで、質問紙では扱えない無意識レベルでの表象を捉えることができ、また、その語りの内容を見ていくことで、より豊かにIWMを捉えられる可能性がある。青年期以降の愛着表象を調べる方法として、TATを用いた投影法的手法の有効性が確認できた。今後は、IWMの個人差をより反映した刺激画の厳選や、より具体的な評定基準の整理など、測定法としての改善を試み、臨床場面への活用の可能性を検討していきたい。

【　文献　】

Bellak, L. 1971　The T.A.T.andC.A.T. in clinical use (2nd ed.)New York: Basic Books.

ボウルビィ，J．黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子（訳）　1977　母子関係の理論Ⅱ—分離不安—　岩崎学術出版社

(Bowlby,J.　1973　*Attachment and loss,* vol.2，*Separation : Anxiety and anger.* New York : Basic Books.)

ボウルビィ，J．黒田実郎・吉田恒子・横浜恵三子（訳）　1981　母子関係の理論Ⅲ—愛情喪失—　岩崎学術出版社

(Bowlby,J. 1980 *Attachment and loss*, vol.3, *Loss : Sadness and depression*. New York : Basic Books.)

遠藤利彦 1992 愛着と表象－愛着研究の最近の動向：ワーキングモデル概念とそれをめぐる実証的研究の概観 心理学評論，35，201－233.

遠藤利彦 2006 語りにおける自己と他者、そして時間：アダルト・アタッチメント・インタビューから逆照射して見る心理学における語りの特質 心理学評論，49，470 - 491.

Freud,s. 1983 Totem and taboo.In A.A.Brill(Ed.) Basic writing of Sigmund Freud.New York:Modern Library.

Hesse, E. 1999 The Adult Attachment Interview:Historical and current perspectives. In J.Cassidy&P.R.Shaver(Eds.),Handbook of attachment:Theory,research,and clinical applications(pp.395-433).New York:Guilford Press.

平石賢二 1990 青年期における自己意識の発達に関する研究（1）一自己肯定性次元と自己安定性次元の検討 名古屋大学教育学部紀要－教育心理学科，37，217－234.

数井みゆき・遠藤利彦（編） 2007 アタッチメントと臨床領域 ミネルヴァ書房

久保恵 2000 愛着表象の投影法的研究—親子状況刺激画を用いて 心理学研究第 70 号第 6 号

久保田まり 1993 絵画統覚検査による幼児のアタッチメントの内的ワーキング・モデルに関する基礎的研究 秋田経済法科大学経済学部紀要，20，73－96

Murray,H.A.(1943)Thematic Apperception Test: Manual. Cambridge,Mass.:Harvard University Press.

Simpson,J.A.&Rholes,W.S.(Eds.) 1998 Attachment theory and close relationships.New York: Guilford Press.

託摩武俊・戸田弘二 1988 愛着理論からみた青年の対人態度—成人版愛着スタイル尺度作成の試み— 東京都立大学人文学報第 196 号、1-16

山本和郎 1992 心理検査 TAT かかわり分析—ゆたかな人間理解の方法 東京大学出版会

山本真理子・松井 豊・山成由起子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究，30，64-69.

【　資料　】

1．TAT 評定内訳（3者：A,B,C の評定結果と最終評定）

	A	B	C	合議評定		A	B	C	合議評定		A	B	C	合議評定
1	安	回	回	回	56	両	安	安・回	回	111	回	回	回	回
2	回	回	回	回	57	安	安	安	安	112	両	回	安	回
3	安・両	安	安	安	58					113	安	安	回	安
4					59	安	安	安	安	114	安	安	安	安
5	安	回	回	回	60					115	安	安	安	安
6					61	両	安	安	両	116	安(回)	回	回	回
7	両	安	安	両	62					117	安	回	回	回
8	回	安	安	安	63	両	安	安	両	118	安	安	安	安
9					64	安	安	回	安	119	安	安	回	安
10	安	両	両	両	65		安		安	120	安	両	両	両
11	回	安	安	回	66	安	安	両	安	121	両	両	回	両
12	回	安	安	回	67	両	安	安	両	122	両	安	安	安
13	安	安	安	安	68	安	安	安	安	123	安	安	安	安
14	安	回	回	回	69	安	安	安	安	124	安	両	安	安
15	安	安	安	安	70	安	安	安	安	125	安	安	安	安
16	両	安	安	両	71	安	安	安	安	126	安	安	両	安
17	両	安	安	両	72	安	安	安	安	127	安	安	回	安
18	両	安	回	回	73	安	安	安	安	128	回	両	回	回
19	安	安	安	安	74	安	安	安	安	129	安	両	両	両
20	両	安	安	安	75	(安)	両	両	両	130	回	安	安	安
21	回	安	回	回	76	回	回	回	回	131	安	安	安	安
22	両	安	安	両	77	安	安	安	安	132	両	両	両	両
23	両	安	安	安	78	安	安	安	安	133	安	安	安	安
24					79	安	安	安	安	134	回	両	回	回
25	安	安	安	安	80	安	回	安	回	135	安	安	安	安
26	両	安	安	安	81	両	安	安	安	136	安	安	安	安
27	両	安	安	両	82	安	安	安	安	137	安(回)	安	回	回
28	安	回	安	安	83	安	回	安	安	138	安	安	両	安
29	安	安	安	安	84	安	回	回	回	139	安	安	安	安
30	回	回	安	回	85	安	回	回	回	140	安	安	安	安
31	安	安	安	安	86	安	両	回	回	141	安	安	安	安
32	両	安	安	両	87	安	安	安	安	142	安	安	安	安
33	安	安	安	安	88	安	安	安	安	143	安	安	安	安
34	両	安	回	安	89	安	安	安	安	144	回	安	回	回
35	安	安	安	安	90	安	両	両	両	145	回	回	回	回
36	安	安	安	安	91	安	安	安	安					
37	回	安(回)			92	安	安	安	安					
38	安	安	安	安	93	両	回	両	両					
39	安	安	安	安	94	両	両	両	両					
40		安	安	安	95	安	両	安	安					
41	両	安	安	安	96	安	安	安	安					
42	安	安	安・両	両	97	安	安	安	安					
43		安	安	安	98	両	両	両	両					
44	両	安	回	安	99	回	回	回	回					
45	安	安	安	安	100	両	安	両	両					
46	両	安	安	安	101	両	両	両	両					
47	回	回	回	回	102	両	安	安	安					
48	両	安	安	両	103	安	安	安	安					
49	安	回	安	安	104	安	安	安	安					
50	回	安	回	回	105	安	安	回	安					
51	両	安	安	安	106	安	安	安	安					
52	安	安	安	安	107	安	回	回	回					
53	両	回	安	回	108	回	回	回	回					
54	両	安	安	両	109	両	安	両	両					
55	安	安	安	安	110	両	両	両	両					

２．ＴＡＴ図版の特性＜山本（1992）より抜粋＞

①マレー（1943）のマニュアルで述べているＴＡＴ図版についての記述
②坪内（1984）の整理した反応領域
③山本（1992）が 20 枚１セットとして試行する中で、その図版特性について経験的に感じてきた臨床的な意味を記述

図版１

①「ひとりの少年が彼の前にあるテーブルに置いてあるバイオリンを見つめている」
②・主要部分　少年・バイオリン
　・小部分　　弓・譜面らしい紙
　・特異部分　弦・目，腕・耳・髪・机・画面の暗さ
③この図版はまさに導入図版としてふさわしい特徴を持っている。同一視しやすく、反応の失敗が最も少ない。被検査者の検査への不安、意気込み、緊張、自信などが物語の展開の中に二重映しとして出てくる。

テーマの出現の仕方について…少年とバイオリンに着目して、そのふたつを関係付けた話が主である。大抵は、少年がバイオリンの練習をしたり修行したりしている。何かやり遂げようとする（達成欲求）テーマが多い。また、もらったり借りたりしたバイオリン、形見のバイオリンというのもある。バイオリンを壊したというテーマが出た時は、その人のボディ・イメージやセックス・アイデンティティに何らかの問題があると仮定し、他の物語によってそれを確かめると良い。また、この絵の中に描かれていない人物が導入された時（導入人物）は、他の絵でも同じであるがその人物との関係が深いことが予想される。

図版２

①「農村の風景：手前には、手に本を持った一人の若い女性がいる。背景には畠で仕事をしている一人の男がおり、一人の年上の女性があらぬ方を見つめている」
②・主要部分　若い女性・年取った女性・男性
　・小部分　　若い女性の本・年上の女性の背後の木・馬
　・特異部分　岩の割れ目・湖・畠の畝・男性の筋肉・山・妊娠・小屋・衣服・小さな馬・画面の暗さ
③2 枚目で 3 人の人物がいる複雑な場面が示され、被検者にとってはかなり緊張し戸惑う図版である。絵のちぐはぐさに敏感な人は、絵の細部にこだわったり、前の女性と背後とを全く関係の無いものとしたりする。そこに、強迫傾向や固執性の傾向や人間関係の葛藤の処理の仕方がでやすいことになる。

テーマの出現の仕方について…3 人の人物で 1 つの物語が作られることがこの絵に仕組

まれている課題である。大体が家族イメージに関するものである。時には男女の三角関係的テーマもでてくる。また、前面の若い女性と背後の2人との世界がどうしても結び付けられないこともある。

図版 14

①「明るい窓に向かっている男性（または女性）のシルエット、窓以外の絵の全ては黒である」

②・主要部分　男性（または女性）
　・小部分　　窓・窓の明るいこと
　・特異部分　画面の黒色

③「希望図版」と呼ぶことがある。この窓の明るさが、未来の希望を象徴しているように語られることが多いからである。特に黒い世界がこれまでの苦労や、閉じ込められた世界を象徴し、そこから開放されていく感じが窓について語られる。

1人でいる方が楽な人はこの絵を好む。内面の葛藤、野心、希望、生活設計が良く出る。その語り手の一人でいる内面の世界が良く出てくる。

図版 15

①「両手をぎゅっと握り合わせている不気味な男が墓石の間に立っている」

②・主要部分　男性・墓石
　・小部分　　握られた手・十字架・衣服
　・特異部分　光のきず・男性の顔の作りの造作・白髪・画面の暗さ

③これまでの 14 枚の図版において攻撃的な物語を作り、人を殺したり、その自分の出した攻撃的衝動を十分処理しきれていない時、この図版で死んだ人にその罪をわびに来る話が良く出てくる。自分の中の攻撃的欲求の処理の仕方を良くここで見ることができる。

愛する人や頼れる人を失って一人孤独になった物語を引き出すこともある。また、孤独、死に対する不安、老いに対する恐怖がテーマになって出てくることもある。

図版 14 の男性があごをやや上に向けて前向きの感じを示しているのに対し、それに続く図版 15 はあごを引いた過去を見つめる雰囲気をかもしだしている。この2つの図版は、1人でいる内面の世界が続けて出されることが多い。両方の図版で作られる物語の雰囲気のコントラストを見るのも大切である。

図版 5

①「中年の女性、半分開けたドアの敷居の所に立っていて、部屋の中をのぞいている」

②・主要部分　女性
　・小部分　　ドア・テーブル

・特異部分　本棚・花瓶・ランプ

③この図版は、次に続く６BM・７BM で母、または父と息子の関係、６GF・７GF で父、または母と娘の関係をテーマにして物語を作らせようとする導入的場面となっていると見ることができる。母親的な世界を中心とする家族全体の雰囲気が触発されるように組まれている。この部屋の中に導入されてくる人物とのぞいている女性との関係や情感の流れなどが物語の雰囲気と構造を決めていく。特に離人体験を持つ人は、寒々とした空虚感とひんやりとした雰囲気を示す人が多かった。

テーマとしては、「ご飯ですよ」「おやつを食べない」といった日常的な母親と子どもの関係や、母親と子ども間の緊張や母親の干渉のテーマが多い。特に、導入される子どもの年齢に注目すべきである。親に依存的でいて当然の年齢であるか、自立していこうとする年齢であるか、そこらが大切である。親がその部屋にいるはずと思っていた子どもがいなかったり、親がして欲しくない何かをしているといった内容は、親に対する反抗や敵意を伺わせる。不気味な物音や不信なことで見にくることもある。家族内の緊張、不信、不安を暗示させるとも考えられる。

図版 19

①「田舎の雪におおわれた小屋に雲のような形のものがおおいかぶさる怪しい絵」

②・主要部分　小屋または船

・小部分　　雪の窓・黒い形のもの・フクロウのようなもの

・特異部分　窓の中のもの・水，波，雪・雲・煙突・画面の暗さ

③著者は臨床体験から、この図版 19 は、語り手の母親との基本的関係（basic relation）を良く示す物語が作られると見ている。「母子基本関係図版」と呼んでいる。

ここで語られる物語が、小屋のまわりが雪や嵐であっても小屋の中にほのぼのと温かいものがあればほっとさせる。それに対して、冷え冷えとしていたり、廃墟であったり、大火事で燃えている時は、母子の基本的関係に重大な問題があると考えられる。

これまでの図版で作られた母子関係の物語に示されてきた母子関係の構造の断片が、この図版で創られる物語によって象徴的に基本構造を浮かび上がらせてくれる。

また、家や船、潜水艦、時には鯨のお腹の中といった囲いが登場する。その「囲い」の象徴的特性と雰囲気は、物語の中の母親イメージを暗示させる。

ＴＡＴの画面にとらわれ、感情移入できないまま物語を作ってきた人にとっては、この図版 19 はどうしていいか分からないものになる。「だれか有名画家の描いた絵」「抽象画」という反応に終わり、イメージが出てこない。それ自体、母との関係において基本的に問題があることを暗示させる。その場合、語り手の感じるこの場面の雰囲気について一言聞いておくと良い。

細かい所では、目、窓にこだわるのは強迫的傾向を暗示し、魔女、黒い形といったもの

に言及することは何か不穏な不安感を暗示させる。

心理治療をする者としては、この物語に「あたたかさ」や「やすらぎ」を感じさせるときは予後の良さに確信が持てる。そうでない時には、かなりの覚悟がいる。

＜　質問紙　＞

アンケートのお願い

はじめに

これから６枚の絵をお見せします。それぞれの絵について、絵を見て、そこから感じることをもとに自由にお話をつくってください。そこにいる人が何を感じ、何をしているのかを含んだ物語を作り、回答欄の番号に合わせて、記入してください。

その後

あなたの家族やあなた自身についてお尋ねします。

この調査結果は、統計的に処理しますので、皆さんの個別の結果を扱うことはありませんし、研究以外の目的に使うことはありませんので、ご協力をお願い致します。

（　性別　男　：　女　／　　回生　）

①

②

あなたのご家族の普段の生活についておうかがいします。

現在下宿や寮など実家以外に住んでおられる方は、実家にいた頃の生活についてお答え下さい。

以下の項目には「正解」や「不正解」、あるいは「望ましい答え」などはありません。

それぞれの項目に対し、当てはまる場合には　　はい　に○

当てはまらない場合には、いいえ　に○

を右側の回答欄にご記入ください。

1	おおそうじにはお父さんも手伝っている。	はい	いいえ
2	私の家では親は何も決められない。	はい	いいえ
3	遊びに行くときは絶対ではないが、親に行き先を告げるようにしている。	はい	いいえ
4	親が苦しんでいるのを見ると、親以上に自分が苦しくなる。	はい	いいえ
5	親に自分の将来のことを相談しても、言うことが毎日違う。	はい	いいえ
6	自分が病気になっても、家族は誰も看病してくれない。	はい	いいえ
7	父と母は仲がいい。	はい	いいえ
8	家族の誰かの様子が普段と違っていても、誰も声をかけない。	はい	いいえ
9	私は毎日 2～3 時間の長電話をしている。	はい	いいえ
10	私はどんな悪いことをしても、親にしかられたことがない。	はい	いいえ
11	ときどき母がおやつを買っておいてくれる。	はい	いいえ
12	誰かの帰りが遅いときには、その人が帰るまでみんな起きて待っている。	はい	いいえ
13	進路を決めるときには親の意見も聞いたが、最終的には自分で決めた。	はい	いいえ
14	私がよくないことをしたら、親は私になぜよくないことなのかを説明する。	はい	いいえ
15	親と腕を組んで買い物に行くことがある。	はい	いいえ
16	家族の誕生日や年齢をはっきり知らない。	はい	いいえ
17	友達についての悩みを親に相談することがある。	はい	いいえ
18	ちょっと失敗しただけでも、親に厳しくしかられる。	はい	いいえ
19	親は私に、「あなたは黙って親の言うことを聞いていたらいい」とよく言う。	はい	いいえ
20	私の家では親子でよくお風呂に入る。	はい	いいえ
21	家族の予定と友達の約束がかち合っても、友達の約束の方を優先する。	はい	いいえ
22	父は父の友人と、母は母の友人と遊びに行くことがある。	はい	いいえ
23	親は絶対、何があっても私の意見を聞き入れない。	はい	いいえ
24	私の家では話し合いが行われず、親が決定したことだけが子どもに伝えられる。	はい	いいえ
25	自分が悪いことをしたら、親に殴られることはないが、厳しくしかられる。	はい	いいえ
26	家族のそれぞれの友人についてはまったく知らない。	はい	いいえ
27	親はよく私の体に触れてくる。	はい	いいえ
28	母がクラス会などで夕ご飯を作れないようなときは、誰か暇な人が作る。	はい	いいえ

以下の各項目の内容は、普段のあなたにどの程度あてはまりますか。最も適当な所に○をつけて下さい。

	全くあてはまらない	あてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	あてはまる	非常によくあてはまる
私はわりあいにたやすく人と親しくなる方だと思う	1	2	3	4	5	6
私はあまり人と親しくなるのは好きではない	1	2	3	4	5	6
人は、本当はいやいやながら私と親しくしてくれているのではないかと思うことがある	1	2	3	4	5	6
私は人よりも知り合いができやすい方だ	1	2	3	4	5	6
私はあまり自分に自信を持てない方である	1	2	3	4	5	6
私は気楽に頼ったり頼られたりすることができる	1	2	3	4	5	6
人は全面的には信用できないと思う	1	2	3	4	5	6
私は時々、友達が本当は私を好いてくれていないのではないかとか、私と一緒にいたくないのではないかと心配になることがある	1	2	3	4	5	6
私は人に好かれやすい性質だと思う	1	2	3	4	5	6
私は人に頼らなくても、自分一人で十分にうまくやっていくことができると思う	1	2	3	4	5	6
私は誤解されやすい方だ	1	2	3	4	5	6
どんなことがあっても、友達は私を見捨てたりしないと思う	1	2	3	4	5	6
人に頼るのは好きではない	1	2	3	4	5	6
たいていの人は私を好いてくれていると思う	1	2	3	4	5	6
生涯つきあっていきたいと思うような友人はほとんどいない	1	2	3	4	5	6
人にあまりにも親しくされたり、こちらが望む以上に親しくなることを求められたりすると、イライラしてしまう	1	2	3	4	5	6
私はいつも人と一緒にいたがるので、時々人からうとまれてしまう	1	2	3	4	5	6
私は自分を信用できなくなることがよくある	1	2	3	4	5	6

次の特徴のおのおのについて、あなた自身にどの程度当てはまるかをお答え下さい。あなたが、あなた自身をどのように思っているか、また現在のあなた自身について、ありのままにお答え下さい。

	あてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	ややあてはまらない	あてはまらない
少なくとも人並みには、価値のある人間である。	5	4	3	2	1
他人との間に壁をつくっている。	5	4	3	2	1
相手に気を配りながらも自分の言いたいことを言うことができる。	5	4	3	2	1
色々なよい素質をもっている。	5	4	3	2	1
人間関係をわずらわしいと感じる。	5	4	3	2	1
自分のなっとくのいくまで相手と話し合うようにしている。	5	4	3	2	1
敗北者だと思うことがよくある。	5	4	3	2	1
自分は他人に対してこころを閉ざしているような気がする。	5	4	3	2	1
疑問だと感じたらそれらを堂々と言える。	5	4	3	2	1
物事を人並みには、うまくやれる。	5	4	3	2	1
自分はひとりぼっちだと感じる。	5	4	3	2	1
友だちと真剣に話し合う	5	4	3	2	1
自分には、自慢できるところがあまりない。	5	4	3	2	1
私は人を信用していない。	5	4	3	2	1
人前でもこだわりなく自由に感じたままを言うことができる。	5	4	3	2	1
自分に対して肯定的である。	5	4	3	2	1
友だちと一緒にいてもどこかさびしく悲しい。	5	4	3	2	1
人前でもありのままの自分を出せる。	5	4	3	2	1
だいたいにおいて、自分に満足している。	5	4	3	2	1
友人と話していても全然通じないので絶望している。	5	4	3	2	1
もっと自分自身を尊敬できるようになりたい。	5	4	3	2	1
他人に対して好意的になれない。	5	4	3	2	1
自分は全くだめな人間だと思うことがある。	5	4	3	2	1
自主的に友人に話しかけていく。	5	4	3	2	1
何かにつけて、自分は役に立たない人間だと思う。	5	4	3	2	1

第３章

内的作業モデルの児童期から青年期における変容に関する研究

－重要な他者との出会いをめぐって－

【　問題と目的　】

本論では、内的作業モデルの変容可能性について検討する。この内的作業モデルの変容可能性については、これまでにも多くの研究が行われてきた。

ボウルヴィは、内的作業モデル（以下IWMとする）について「IWM形成のもっとも敏感な時期は、６ヶ月から５歳前後とし、その後１０年間は次第に敏感性を減少させながらも変化するが、その後は一生を通じて比較的変化することなく持続する傾向がある」（山岸1998）と述べていると紹介している。戸田(1991)は、児童期までは愛着に関連した具体的な出来事に応じて変化しながらも発達するが、青年期においては、形式的操作の能力が高まり（メタ認知）、さらに新しい愛着対象の登場により、自分や他者との関係性を客観視することができるようになるために、IWM は大きく変更される可能性がある、と述べている。

嶋田・田中(2005)は、青年期の IWM の変化を、対人関係との関連からとらえようとした研究を行っている。大学生２７７名を対象とした調査では、対人関係の変化については、８割以上の学生が変化したと答えており、そのほとんどがポジティブな変化であった。また、変化をもたらした「重要な他者」としては、友だち・恋人・先生が多かった。IWMの変化と対人関係については、児童期不安定であったものが、青年期において安定に変化する、そのまま不安定であるかの２群において差が見られ、安定に変化した群の方が他者との関係をポジティブに捉え、特に自信や積極性の獲得が IWM の安定に影響を与えることが示されている。

IWMの研究においては、どのようにそのIWMを捉えるかが常に問題になり、特に児童期のIWMとなると、実際にどこまで正確に測れるかという問題が出てくる。

先の嶋田ら(2005)の研究において用いられた尺度は、幼少期は青柳・酒井(1997)による幼少期の attachment 尺度を用い、青年期には、詫間・戸田(1988)の IWM 尺度を用いている。これらの尺度は、IWM を安定、不安定の２群あるいは、安定・回避・アンビバレントの３群に分けて分析するものである。

これらに対し、そこで、本研究では、内的作業モデルの測定法として、中尾・加藤（2003）の研究を参考とし、「見捨てられ不安」と「親密性の回避」の２軸による４分類を採用する

ことにする。今回は、児童期から青年期にかけてのIWMの変容に焦点を当てるので、児童期のIWMに関しても同じように、２軸による尺度の作成を試みる。

これらの尺度を使い、児童期から青年期へのIWMの変容がどのように起こっており、それに重要な人物としての周りの人間（先生や友だち）がどの程度影響を与えているのかを明らかにするのを本研究の目的とする。

【　方法　】

１．対象：京都教育大学及び私立大学学生　計１１２名

（男性　４７名、女性　６３名、不明４名）

平均年齢２０．５歳（１９歳～３８歳）

２．各尺度について

（１）幼少期IWM尺度

児童期の尺度については、これまでいろいろな尺度が考えられてきた。

今回は、見捨てられ不安と親密性の回避を2軸とする質問紙を参考とし、ほぼ同じ内容で、質問項目の最初に「私は小さい頃、…」という表現をつけ、小さい頃を振り返ってもらい、つけてもらった。小さい頃とは、大学生である被検者の振り返りを考え、[小学校１～3年頃]のあなたにとって、という形で尋ねた。

（２）重要な人物に関する質問

重要な人物に関する質問項目は、山口(2005)を参考に、以下の３つの領域からなる質問紙を用いた。

①　重要な人物の属性

重要な人物について、以下のような内容について質問した。

「対人関係の変化」：まず、これまでの対人関係において、小学１～3年の頃と比べて変化があったか、について「変化した」「変化していない」の2択で答えてもらった。

「重要な人物の有無」：重要な人物といえる人物が、親以外で存在したかどうかを、「いる」「いない」で答えてもらった。

「人数」　：その重要な人物の人数は何人であるかを答えてもらった。

「変化との関係」　：変化したと答えた人に対し、それは重要な人物との出会いによるものであるかを「はい」「いいえ」で答えてもらい、「いいえ」の場合は、何による影響かも書いてもらった。

「関係」　：最も影響を受けた「重要な人物」との関係性について

[先生・友人・恋人・片思いの人・兄弟・先輩・後輩・親戚・芸能人・歴史上の人物]の中から選んでもらった。

また、それ以外の場合は、その他として記入してもらった。

「性別」　：重要な人物の性別を答えてもらった。

「時期」　：重要な人物からもっとも影響を受けた時期について［小学校高学年・中学校・高等学校・浪人中・大学］の中から選んでもらった。

「ﾌﾟﾗｽ・ﾏｲﾅｽ」　：重要な人物からの影響について、それはプラスであるか、マイナスであるかを、［プラスの影響・どちらともいえない・マイナスの影響］から選んでもらった。

「影響の％」　：現在の状況を 100％として、その重要な人物からの影響は、何％であるかを答えてもらった。

「具体的エピソード」:重要な人物になったきっかけやエピソードなどを自由に書いてもらった。

② 重要な人物のイメージ

「重要な人物」のイメージを聞くために、山口の研究を参考に、２８項目の特性に関する質問項目を提示し、それぞれが重要な人物のイメージとしてどの程度当てはまるかを、「全く当てはまらない」から「非常に当てはまる」までの、５件法でたずねた。

③ 重要な人物からの影響

重要な人物からどのような影響を受けたのかについて、山口の研究を基に、27 項目の質問を提示し、

「全く当てはまらない」から「非常に当てはまる」までの 5 件法でたずねた。

（３）青年期 IWM 尺度

青年期のＩWM尺度については、中尾・加藤（2005）を参考に、２軸による４分類の尺度を用いた。

３．分析の手続き

・各尺度の基礎統計（天井効果・フロアー効果）

・IWM 得点の４分類による児童期から青年期への変化パターンによって、重要な人物の特性やその影響にどのような違いがあるかを検討する。

・さらに、その変化パターン毎に、重要な人物のクロス表を作成し、変化のパターンと重要な人物の特性やその時期、影響の内容などについて検討する。

・最後に、IWM の変化を細かく見るために、「見捨てられ不安」「親密性の回避」のそれぞれの得点の児童期から青年期への変化に注目し、その変化の増減によって、

重要な人物の特性や影響にどのような違いがあるかについても検討する。

【　結果と考察　】

１．　各尺度項目の基礎統計(天井効果、ﾌﾛｱｰ効果)

まず、分析に先立ち、「児童期のＩWM」、「重要な人物のイメージ」、「重要な人物からの影響」、「青年期のＩWM」の４つの尺度について、天井効果、フロアー効果について検討した。

その結果、[児童期のＩWM]においては、一項目だけ平均－ＳＤにおいて、1 を下回る項目があった。それは、項目 5「私は小さい頃、親は私と一緒にいたくないのではないかと、しばしば気にした」であり、これは平均得点が、2.27 であり、ほとんどの人が当てはまらないと答えているものである。これは、親に対する見捨てられ不安に関する項目であるが、これほどまでに悲観的に感じることはほとんどないのではと思われ、フロアー効果も見られたので、今回の分析からは削除することにした。

次に、「重要な人物のイメージ」尺度では、いくつかの項目で天井効果が見られたが、これは重要な人物にかなり共通に見られるイメージとして、そのまま分析を行うことにした。また、同じように、」「重要な人物からの影響」尺度については、いくつかの項目でフロアー効果が見られたが、そのような影響がほとんどなかったということであり、尺度としてはそのままで分析を行った。

「青年期におけるＩWM」尺度では、天井効果、フロアー効果において、特に問題はなかった（付表１，２，３，４参照)。

２．各尺度の因子分析

次に、各尺度の因子的妥当性を確認するために、因子分析を行った。

（１）幼少期 IWM 尺度の因子分析

分析にあたっては、本来の質問紙構成において、２因子を想定していたので、２因子解による因子分析を行った。因子の抽出法としては主因子法を用い、その後 Kaiser の正規化を伴うプロマックス法による回転を行った。なお、因子間の相関は、0.332 であった。因子分析の結果、負荷量．４００以上を基準として見た場合、いずれの因子においても因子負荷量が．４００以下の項目が８項目あった。それらの項目を削除して、３回目の分析を行い、最終的な第１因子、第２因子の項目を決定した（表１)。第一因子では、先行研究において見捨てられ不安としてあげられていた項目が多く含まれており、この因子を「見捨てられ不安」（全２０項目）と命名した。また第２因子についても同じように、ほぼ親密性の回避と重なる項目が抽出され、これを「親密性の回避」（全１３項目）と命名した。

表1　児童期WM尺度 因子分析結果

	因子 Ⅰ	因子 Ⅱ
Ⅰ 見捨てられ不安		
28) 私は小さい頃、誰かと付き合っていないと何となく不安で不安定な気持ちになった。	.732	.096
30) 私は小さい頃、いろいろな人との関係について、非常に心配していた。	.723	.407
27) 私は小さい頃、人は私の本当の気持ちをわかっていないと感じていた。	.680	.451
38) 私は小さい頃、私がいてほしいと望むくらい人がそばにいてくれないと、イライラしてしまった。	.642	.209
26) 私は小さい頃、人が私に対して好意的であるということを何度も何度も言ってくれることが必要であっ	.633	.166
29) 私が小さい頃、私が望むほどの親密さを人は望んでいなかったと思う。	.613	.291
25) 私は小さい頃、人が望む以上の親密さを、私はいつも望んでいた。	.611	−.104
34) 私は小さい頃、知り合いを失うのではないかと結構心配していた。	.580	.149
24) 私は小さい頃、人ととても親密になりたいと望んだがために、時々人はうんざりして私から離れていってしまうことがあった。	.577	.138
19) 私は小さい頃、本当は、人は私に対して好意を持っていないのではとしばしば気になった。	.551	.385
3) 私は小さい頃、私が人のことを大切に思うほどには、人は私のことを大切に思っていないのではないかと心配していた。	.526	.390
42) 私は小さい頃、見捨てられるのではないかと心配だった。	.524	.367
23) 私は小さい頃、人ともっと親密になりたいと思うことがあった。	.502	−.212
7) 私は小さい頃、人がそばについていてくれないと不安だった。	.489	.114
9) 私は小さい頃、人と仲良くしたり心を開くのに抵抗を感じることがあった。	.488	.405
2) 私は小さい頃、人ともっと一体感をもちたかった。	.486	.161
1) 私は小さい頃、ひとりぼっちになってしまうのではないかと心配になることがあった。	.471	.266
8) 私は小さい頃、親戚の家に遊びに行っても、親がいないと不安になった。	.457	.234
32) 私は小さい頃、人が必要なときにいつでも私のためにいてくれないとイライラすることがあった。	.448	.251
17) 私は小さい頃、叱られるたびに親に見捨てられる恐怖を感じていた。	.419	.249
Ⅰ 親密性の回避		
20) 私は小さい頃、人と親密になることがとても心地よかった。	−.106	−.723
15) 私は小さい頃、人の近くにいるのは居心地がよかった。	−.091	−.718
41) 私は小さい頃、たやすく人と親密な関係を持てていた。	−.278	−.702
13) 私は小さい頃、比較的容易に人と親密になれていた。	−.271	−.636
11) 私は小さい頃、人とあまりに親密になることがどちらかというと好きではなかった。	.144	.621
37) 私は小さい頃、人を全面的に信頼するのは難しかった。	.280	.602
35) 私は小さい頃、人に何でも話しをしていた。	−.085	−.510
16) 私は小さい頃、人になぐさめやアドバイス、助けを求めることに抵抗はなかった。	−.313	−.486
33) 私は小さい頃、人に近づきすぎると不安になることがあった。	.456	.482
12) 小さい頃、親は私の良い面も悪い面もわかってくれていた。	−.129	−.443
40) 私は小さい頃、人にダメだなと言われると、自分は本当にダメだなあと感じていた。	.293	.386
6) 私は小さい頃、人に頼るのに抵抗があった。	.340	.376
4) 私は小さい頃、今の親とはちがう親が欲しいと思うことがあった。	.261	.343
寄与率	22.11	10.97

（2） 重要な人物の特性（イメージ）の因子分析

重要な人物に関する特性尺度についても、主因子法を用いて因子の抽出を行い、その後Kaiser の正規化を伴うﾊﾞﾘﾏｯｸｽ法による回転を行った。

分析の結果、負荷量０．４００以上を基準として見た場合、いずれの因子においても因子負荷量が０．４００以下の項目が４項目あった（「教養がある」「個性的な」「やさしい」「積極的な」）。この４項目を削除して、３回目の分析を行い、最終的な各因子の項目を決定した（表２）。第一因子では、「真正面から受け止めてくれる」「話を聞いてくれる」といった項目の負荷量が高く、さらに「信頼できる」「安心できる」といった項目が含まれており、全体的にこちらのことをきちんと受け止めて、理解してくれようとする他者であ

り、「当てになる存在」（全１３項目）と命名した。また第２因子については、「社交的」「活発な」といった項目の負荷量が高く、「好奇心旺盛」であり「前向きな」他者の存在を感じているようであり、「前向きな存在」（全６項目）と命名した。第３因子は、「リーダーシップのある」「厳しい」といった項目の負荷量が高く、また「信念を持っている」人であり、「「自分の意見をはっきり言う」ことのできる人であり、この因子を「大人的存在」（全５項目）と命名した。

なお、それぞれの因子の信頼性については、α係数を求めたところ、第１因子が 0.939、第２因子が 0.834、第３因子が 0.771 であり、第３因子がやや低めてあるが、信頼性は十分にあるものと考えられる。

表　　重要な他者のｲﾒｰｼﾞ 因子分析結果

	第1因子	第2因子	第3因子
Ⅰ「当てになる存在」　α＝0.939			
28 真正面から受け止めてくれる	0.863	0.033	0.178
25 話を聞いてくれる	0.833	0.175	−0.089
5 信頼できる	0.832	−0.048	0.227
23 自分を認めてくれる	0.807	0.007	0.076
24 励ましてくれる	0.793	0.290	−0.154
26 良い所を見つけてくれる	0.789	0.280	0.061
27 一人前の人間として扱ってくれる	0.771	0.045	0.051
13 安心できる	0.764	0.096	−0.088
4 誠実な	0.728	0.098	0.083
18 自己中心的	−0.668	−0.187	0.012
3 寛大な	0.666	0.168	−0.010
11 正義感の強い	0.440	0.288	0.378
17 冷たい	−0.419	−0.286	0.108
Ⅱ「前向きな存在」　α＝0.834			
9 社交的	0.246	0.820	0.136
15 活発な	−0.022	0.773	0.222
16 好奇心旺盛	−0.083	0.674	0.154
10 明るい	0.464	0.661	0.051
8 前向きな	0.368	0.512	0.355
12 面白い	0.366	0.427	−0.133
Ⅲ「大人的存在」　α＝0.771			
22 リーダーシップのある	−0.003	0.284	0.774
1 厳しい	−0.132	−0.089	0.673
21 信念を持っている	0.297	0.147	0.605
20 自分の意見をはっきり言う	−0.180	0.131	0.600
7 頼りになる	0.515	0.094	0.542
主因子法、バリマックス回転　寄与率	33.15	13.28	10.85
		46.43	57.29

（3） 重要な人物からの影響項目の因子分析

重要な人物からの影響尺度についても、主因子法を用いて因子の抽出を行い、その後Kaiser の正規化を伴うﾊﾞﾘﾏｯｸｽ法による回転を行った。

分析の結果、負荷量０．４００以上を基準として見た場合、いずれの因子においても因子負荷量が０．４００以下の項目が５項目あった（「勝気になった」「客観視するようになった」「“重要な人物”のようになりたいと思った」「自分の弱い部分が改善された」「真面目になった」）。また、複数の因子で負荷量 0.400 以上の項目があり（「ありのままの自分を受け入れられるようになった」）、合わせてこの６項目を削除して、３回目の分析を行い、最終的な各因子の項目を決定した（表３）。

第一因子では、「思っていることをいわなくなった」「無口になった」といった項目の負荷量が高く、さらに「人間不信になった」「人と比べるようになった」といった項目が含まれており、全体的に人に対する信頼が低下し、無口になったり、比較をしたりする内容であり、「人間不信」（全８項目）と命名した。また第２因子については、「自立しようと思った」「周りに流されず、自分を持つようになった」といった項目の負荷量が高く、「とにかく行動してみるようになった」「人に優しくできるようになった」といった項目が含まれており、全体的には、自己に対する理解が深まり、さらにその自己を受け入れ、自分や他者に対して、寛容で優しくなったという内容であり、「自己受容」(全 9 項目)と命名した。第３因子は、「学校が嫌いになった」「反抗的になった」「相手も見下すようになった」「短気になった」の４項目であり、周りの物や人に対して否定的に見るようになり、情緒的にも反抗的になったり、短気になったりと不安定であり、この因子を「情緒不安定」(全 4 項目)と命名した。なお、各因子の信頼性については、第１因子が、０．８４２、第２因子が、０．７９１、第３因子が、０．７２１であり、第３因子がやや低めであるが、項目数の少なさもあり、ある程度の信頼性は得ているのではと理解し、このまま採用した。

表　「重要な他者からの影響」尺度　因子分析

Ⅰ 人間不信	α=0.842	第1因子	第2因子	第3因子
影響17)	17 思っていることを言わなくなった	0.739	0.068	0.051
影響4)	4 無口になった	0.720	0.103	0.276
影響1)	1 自信が持てた	−0.686	0.246	−0.153
影響23)	23 人間不信になった	0.661	−0.086	0.474
影響6)	6 人と比べるようになった	0.625	−0.073	0.165
影響13)	13 飾らず自然体でいられるようになった	−0.616	0.336	−0.067
影響18)	18 人を信用できるようになった	−0.495	0.319	−0.248
影響8)	8 自分に厳しくなった	0.459	0.328	−0.395
Ⅱ 自己受容	α=0.791			
影響20)	20 自立しようと思った	−0.068	0.643	−0.026
影響9)	9 周りに流されず、自分を持つようになった	−0.346	0.637	0.156
影響3)	3 進路に関する決定をした	−0.066	0.607	−0.062
影響24)	24 将来について深く考えるようになった	−0.076	0.567	−0.268
影響11)	11 とにかく行動してみるようになった	−0.369	0.566	0.104
影響7)	7 視野が広くなった	−0.035	0.562	−0.060
影響25)	25 じっくり考えるようになった	0.130	0.551	−0.074
影響26)	26 “重要な人”を越えたいと思った	0.225	0.481	0.001
影響21)	21 人に優しくできるようになった	−0.157	0.400	−0.209
Ⅲ 情緒不安定	α=0.721			
影響12)	12 学校が嫌いになった	0.467	0.100	0.637
影響19)	19 反抗的になった	0.379	0.002	0.617
影響15)	15 相手を見下すようになった	0.157	−0.133	0.481
影響10)	10 短気になった	0.169	0.026	0.417

因子抽出法: 主因子法　回転法: バリマックス法

3．IWM 尺度（児童期・青年期）の４分類による分析

（１） 各尺度間の相関

児童期の IWM 得点と、青年期における IWM 得点との関係を見るために、それぞれの尺度の相関を求めた（表４）。

表４　　児童期・青年期の見捨てられ不安、親密性の回避尺度の相関

相関係数

	見捨てられ不安	親密性の回避 13項	青年期見捨てられ不	青年期親密性回避	平均	*SD*
見捨てられ不安	−	.44 **	.45 **	.11	3.24	0.91
親密性の回避		−	.06	.26 **	3.28	0.88
青年期見捨てられ不安			−	.12	3.41	1.01
青年期親密性回避				−	3.77	0.93

** p<.01

この結果より、児童期の見捨てられ不安と青年期の見捨てられ不安の間には、0.45 と言

う中程度の相関が見られ、児童期の親密性回避と青年期の親密性回避との間にも 0.26 と言う弱い相関が見られた。これは、児童期と青年期と言う時期は違うが、同じ内容を測っているので、多少の相関が見られるのは当然ではと考えられる。他方、児童期の見捨てられ不安と青年期の親密性回避には、0.11、また児童期の親密性回避と青年期の見捨てられ不安には、0.06 と全く関連が見られず、当然の結果であると考えられる。

一方、青年期における見捨てられ不安と親密性の相関は、0.12 と全く見られなかったのに対し、児童期における見捨てられ不安と親密性の回避においては、0.44 と中程度の相関が見られる。本来、この二つの因子は独立の要因であり、相関は低いと考えられるが、児童期においてはかなり高い相関が示されている。これは、大学生に対し、児童期を振り返り、回顧的にその時代を想起して答えてもらったので、必ずしも「見捨てられ不安」と「親密性の回避」が独立したものと認知されず、かなり重なったものとしてイメージされた可能性がある。その結果、この 2 因子の相関がやや高くなったのではと考えられる。

（2） 4 分類による児童期から青年期への変化の分析

児童期、青年期における IWM 尺度を使って、見捨てられ不安（高・低）×親密性の回避（高・低）による 4 分類(安定型・拒絶型・とらわれ型・恐れ型)を行った。

それぞれの高低の組合せは以下の通りである。

見捨てられ不安	親密性の回避		
低	低	；	安定型
低	高	；	拒絶型
高	低	；	とらわれ型
高	高	；	恐れ型

児童期・青年期における IWM 尺度の各得点の平均値を基に、高群・低群を作り、クロス表を作成した（表５）。

表5　児童期4分類 と 青年期4分類 のｸﾛｽ表

		青年期4分類					合計
		安定型	拒絶型	とらわれ型	おそれ型	欠損	
幼児期4類型	安定型	18	10	3	4	2	37
	拒絶型	4	7	1	3	1	16
	とらわれ型	3	1	8	6	4	22
	おそれ型	5	7	7	18	0	37
合計		30	25	19	31	7	112

まず、児童期の分類を見ると、安定型と恐れ型が、37 名と同数であった。この結果と

青年期の 4 分類をクロスしてみてみると、まず児童期から青年期にかけて変化がなかったものは、安定型で 18 名、拒絶型で 7 名、とらわれ型で 8 名、おそれ型で 18 名、計 51 名であった。それ以外のもの（54 名）は、何らかの変化があったと言うことである。つまり、ほぼ 5 割の者が、児童期から青年期において、IWM の何らかの変容が生じていると言うことである。

この数字をどう理解するかであるが、Bowlby は、IWM は、ほぼ 10 歳ごろまでに形成され、その後は多少の変化が起こりうるが、かなり安定したパターンとして、その人の人生に影響を及ぼすと考えているが、今回の結果では、5 割ぐらいの被検者において、変化が生じたということになる。

次に、児童期・青年期の IWM を、大きく安定型と不安定型（拒絶型・とらわれ型・おそれ型）の二つに分けて、その児童期から青年期への変化のパターンを「安定→安定」「安定→不安定」「不安定→安定」「不安定→不安定」の４つに分類した（表６）。

表６　児童期から青年期への変化

幼児期	→	青年期	
			人数
安定		安定	18
安定		不安定	17
不安定		安定	12
不安定		不安定	58

この４つのパターンを独立変数とし、「重要な他者イメージ」や「他者からの影響」を従属変数とした一要因の分散分析を行った（表７）。

幼少期から青年期への変化4パターンによる分散分析

		平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
イメージ因子1	ｸﾞﾙｰﾌﾟ間	2.80	3.00	0.93	1.20	0.32
	ｸﾞﾙｰﾌﾟ内	63.99	82.00	0.78		
	合計	66.79	85.00			
イメージ因子2	ｸﾞﾙｰﾌﾟ間	0.85	3.00	0.28	0.49	0.69
	ｸﾞﾙｰﾌﾟ内	47.56	82.00	0.58		
	合計	48.40	85.00			
イメージ因子3	ｸﾞﾙｰﾌﾟ間	1.90	3.00	0.63	1.12	0.35
	ｸﾞﾙｰﾌﾟ内	46.34	82.00	0.57		
	合計	48.23	85.00			
影響因子1	ｸﾞﾙｰﾌﾟ間	3.38	3.00	1.13	1.95	0.13
	ｸﾞﾙｰﾌﾟ内	46.96	81.00	0.58		
	合計	50.34	84.00			
影響因子2	ｸﾞﾙｰﾌﾟ間	2.00	3.00	0.67	1.47	0.23
	ｸﾞﾙｰﾌﾟ内	37.19	82.00	0.45		
	合計	39.19	85.00			
影響因子3	ｸﾞﾙｰﾌﾟ間	1.66	3.00	0.55	1.15	0.33
	ｸﾞﾙｰﾌﾟ内	39.45	82.00	0.48		
	合計	41.11	85.00			

分散分析の結果、すべての因子で有意な差は見られなかった。

この結果をどのように理解するかであるが、IWM 得点の変化に関して、重要な他者のイメージやその影響は、それほど関連はないともいえるが、ただこの 4 群においては、その人数のバランスにやや偏りがあり、また安定から不安定に変化したと言っても、数値的には平均値に近いところでのわずかの差である場合も考えられる。

（3）変化４パターンと重要な人物との関連について

次にこの４パターンによって、重要な人物に関する各質問項目にどのような違いがあるかを検討するためにクロス表を作成した。

表８　　４パターンによる他者による変化の有無

		他者による変化		合計
		変化した	変化していない	
幼少期→青年期変化	安定→安定	14	4	18
	安定→不安定	17	0	17
	不安定→安定	10	1	11
	不安定→不安定	55	3	58
合計		96	8	104

この４パターンに対し、他者との出会いによって、変化が生じたかということであるが、変化していないというものはわずか８名であり、そのうち 7 名は、安定から安定へ、不安定から不安定へという形で、得点の上でも IWM の変化が起こっていない。ただ、変化した者の内、69 名（14 名＋55 名）は IWM 尺度得点の変化で見ると、それほど大きな変

化はなく、意識的な上での他者による変化とIWM得点としての変化においては、かなりずれがあるものと考えられる（表８）。

表９　　４パターンによる他者の存在の有無

		他者の存在		合計
		いる	いない	
幼少期→青年期変化	安定→安定	14	4	18
	安定→不安定	15	2	17
	不安定→安定	12	0	12
	不安定→不安定	47	11	58
合計		88	17	105

次に、４パターンにおいて、重要な他者の存在について聞いたが、全体では88名の者がいると答えており、９割以上のものが重要な他者との出会いを経験していることがわかる。一方そのような他者の存在しない者17名のうち、11名が「不安定→不安定」の群であり、IWM得点が変容しうるような他者との出会いそのものが、持ちにくいのではないかと考えられる（表９）。

表10　　４パターンによる他者との関係性

		他者との関係								合計
		先生	友人	親友	恋人	片思いの人	兄弟	先輩	近所の人	
幼少期→青年期変化	安定→安定	6	3	3	1	1	0	0	0	14
	安定→不安定	4	3	2	2	0	1	0	0	12
	不安定→安定	3	0	3	2	0	1	0	0	9
	不安定→不安定	11	10	3	7	0	4	3	1	39
合計		24	16	11	12	1	6	3	1	74

次に、ではその重要な他者とは、具体的にどのような関係の人物であるかを見たものが、表10である。全体的には、先生が最も多く、次いで友人、恋人、親友となっている。親以外で、IWMの変容に影響を与えるのは、大きくは学校の先生か、同世代の友人・恋人ということである。ただし、これらの人物との出会いは、「不安定→安定」もあるが、「安定→不安定」もあり、プラス、マイナスのさまざまな影響を及ぼしうることが推察される。

表11　　４パターンによる他者による影響の時期

		影響の時期					合計
		小高学年	中学校	高等学校	浪人中	大学	
幼少期→青年期変化	安定→安定	2	3	6	0	3	14
	安定→不安定	1	6	5	1	1	14
	不安定→安定	0	2	3	2	2	9
	不安定→不安定	11	10	18	3	4	46
合計		14	21	32	6	10	83

次に、それらの重要な他者からの影響の時期であるが、最も多いのは高等学校であり、

次いで中学校、小学高学年となっている。大学というのは少ないが、今回の被検者が大学2回生ぐらいであるので、大学における変化というのはまだ実感としては持ちにくいのではと考えられる。ただ、ボウルヴィの考えでは、ほぼ10歳ぐらいまでにIWMは形成され、それから10年ぐらいは緩やかに変化するということであるが、今回の被検者の結果を見ると、中学生から高校生にかけて、意識のうえでは何らかの変化を感じていることがうかがえる。これは実際のIWMの変容とどのようにつながるものであるかは今後検討する必要があると思われる（表11）。

表12　4パターンによる他者による変化の影響のプラス・マイナス

		影響のプラ·マイ			合計
		プラス	どちらとも	マイナス	
幼少期→青年期変化	安定→安定	13	1	0	14
	安定→不安定	12	1	1	14
	不安定→安定	8	2	0	10
	不安定→不安定	36	7	3	46
合計		69	11	4	84

次に、他者による影響が、プラスのものであるか、マイナスのものであるかについてたずねたものである。8割以上がプラスの影響であり、また1割以上がどちらともいえないということであり、確かにその影響が自分にとって、どのようなものであるかは、すぐには判断できにくいということも考えられる。その一方で、マイナスの影響であったというものがわずかではあるがいることも重要であり、「不安定→不安定」あるいは「安定→不安定」の群であり、IWM尺度得点の変化とも一致するものであった（表12）。

表13　4パターンによる他者による変化の有無

		他者の影響有無		合計
		他者による変化	他者による変化ではない	
幼少期→青年期変化	安定→安定	10	1	11
	安定→不安定	12	1	13
	不安定→安定	9	0	9
	不安定→不安定	41	2	43
合計		72	4	76

最後に、その変化が他者との出会いによるものであるか、そうではないかについて尋ねたものである。ほとんどが、他者による変化であり、やはりIWMの変容においては、人との出会い（特に重要な他者との）によって変化しうることが、この結果からも示されていると思われる（表13）。

4．「見捨てられ不安」・「親密性の回避」の得点の変化量から見た検討

（1）各尺度得点の基礎統計

前節で見たように、IWMのタイプ別の安定、不安定の変化について検討したが、結果的にはその変化への重要な他者の特性や影響については、明確には示されなかった。そこで、IWMの変化について、より詳しく検討するために、見捨てられ不安、親密性の回避によるタイプわけを行うのではなく、この得点そのものが、個人の中でどのように変化しているかを見ていくことで、その個人のIWMの変容について検討していくことにする。

まず、「見捨てられ不安」、「親密性の回避」のIWM得点の変化を見る前に、それぞれの尺度得点の基本統計量を見てみると、平均値では、ほぼ同じぐらいであり、青年期の方が見捨てられ不安、親密性の回避ともにわずかに高くなっている程度である（表14）。

表　　幼少期・青年期IWM尺度の記述統計量

	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
児童期見捨てられ不安	112	1.15	6.25	3.24	0.91
児童期親密性の回避	112	1.00	6.08	3.28	0.88
青年期見捨てられ不安	105	1.39	6.28	3.41	1.01
青年期親密性の回避	105	1.33	6.42	3.77	0.93

そこで、児童期と青年期における見捨てられ不安・親密性の回避それぞれの尺度得点の変化を見るために、差をとって分析を行った。

見捨てられ不安変化＝「青年期見捨てられ不安」－「児童期見捨てられ不安」

親密性回避変化　　＝「青年期親密性の回避」　－「児童期親密性の回避」

この変化量の平均を出したものが表15である。この値がマイナスということは、児童期から青年期にかけて見捨てられ不安や親密性の回避が減少したということであり、プラスの場合は、逆に青年期にかけて増加したということである。見捨てられ不安が低く、親密性の回避も低いということは、戦術のタイプわけでも示したように、安定型ということになるので、児童期から青年期にかけて、見捨てられ不安や親密性の回避得点が減少したということは、より安定型のほうに近づいているということである。

表15　児童期から青年期へのIWM得点の変化量

記述統計量（青年期－幼少期の差）

	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
見捨てられ不安変化	105	-3.58	2.91	0.18	1.01
親密性回避変化	105	-3.67	3.58	0.48	1.11

（2）増減による各尺度得点の分散分析

この平均値を基準として、変化量がそれ以下のもの（減少及び微増）の群→　減

変化量がそれ以上のもの（増加）の群　　→　増

とし、不安（減・増）、回避（減・増）の２×２の４群を以下の表のように分けた。

表 16　増減による４群の組み合わせとその人数

		見捨てられ不安		
		減	増	計
親密性の回避	減	30	17	47
	増	16	23	39
	計	46	40	86

この見捨てられ不安（減・増）×親密性の回避（減・増）の４群を用いて、他者のイメージ３因子、他者からの影響３因子のそれぞれの得点について、二要因の分散分析を行った。

表　「当てになる存在」得点の不安(増減)×回避(増減)に関する2要因分散分析結果

見捨てられ不安	減		増		主効果		交互作用
親密性の回避	減	増	減	増	不安	回避	
平均値	4.15	3.65	3.83	3.76	0.29	1.99	1.17
標準偏差	0.63	0.95	0.93	1.06	n.s.	n.s.	n.s.
N	30	16	17	23			

まず、他者のイメージである「あてになる存在」得点では、主効果、交互作用において優位な値は見られなかった（表 17)。

表　「前向きな存在」得点の不安(増減)×回避(増減)に関する2要因分散分析結果

見捨てられ不安	減		増		主効果		交互作用
親密性の回避	減	増	減	増	不安	回避	
平均値	4.20	3.58	3.95	3.87	0.01	4.68	2.75
標準偏差	0.65	1.02	0.74	0.59	n.s.	*	n.s.
N	30	16	17	23			

＊p<.05

次に、他者のイメージである「前向きな存在」得点については、親密性の回避において主効果が見られた（F=4．68、p<.05)。つまり、親密性の回避が減少した群においては、重要な他者の特性として「前向きな存在」得点が高くなっている。親密性の回避得点を下げるには、重要な他者として、前向きな姿勢を持った人との出会いによって影響を受けることで変化しうるのではと考えられる（表 18)。

表　「大人的存在」得点の不安(増減)×回避(増減)に関する2要因分散分析結果

見捨てられ不安	減		増		主効果		交互作用
親密性の回避	減	増	減	増	不安	回避	
平均値	3.87	4.13	4.11	3.74	0.20	0.20	3.55
標準偏差	0.81	0.77	0.58	0.76	n.s.	n.s.	+
N	30	16	17	23			

+p<.10

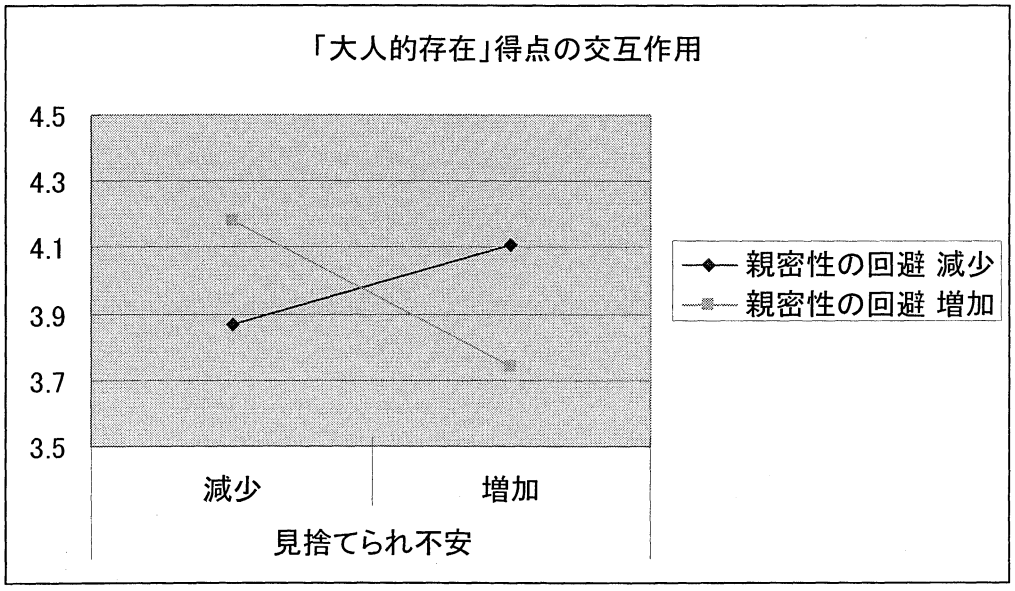


図１　「大人的存在」得点の不安・回避による分散分析

次に第３因子である「大人的存在」得点についてみると、主効果は見られなかったが、見捨てられ不安と親密性の回避における交互作用が、有意傾向ではあるが見られた（F=3.55 p<.10）（表 19、図１）。図１に示されたように、重要な他者における大人的存在の特性は、見捨てられ不安が減少した群と増加した群では、親密性の回避の増減においては、全く逆の効果となっている。見捨てられ不安が減少した群においては、親密性の回避が増加した群が大人的存在の得点は高くなっているが、見捨てられ不安の増加した群では、親密性の回避が減少した群の方が、大人的存在の得点が高くなっている。つまり、重要な他者である人物の持つ大人的存在に関しては、見捨てられ不安と親密性の回避に対して、異なった作用を示し、見捨てられ不安を減少させる一方で、親密性の回避を増大させ、また見捨てられ不安を増加させる一方で、親密性の回避を減少させると言うことも起こりうる。重要な他者の特性の中で、この「大人的存在」というのは、非常に安心感を与え、親しみやすいという一面があると同時に、厳しさや現実的と言うことで、やや不安を与えたり、近づきがたいと言うところもあるのではと考えられる。

表　「人間不信」得点の不安(増減)×回避(増減)に関する2要因分散分析結果

見捨てられ不安	減		増		主効果		交互作用
親密性の回避	減	増	減	増	不安	回避	
平均値	2.07	2.56	2.55	2.82	5.05	5.36	0.47
標準偏差	0.51	0.62	0.63	1.04	*	*	n.s.
N	30	16	17	23			

＊p<.05

次に、重要な他者からの影響について、まず「人間不信」については、見捨てられ不安、親密性の回避、ともに主効果が見られた（それぞれ F=5.05,p<.05、F=5.36,p<.05)。人間不信は、見捨てられ不安の増加群、親密性の回避の増加群でともに高く、これら２つが高まっていると言うことは、結果的に人間不信になっているということである。これらより、IWM が不安定になると、人間への不信感が高まり、対人関係上の適応が難しくなると思われる（表 20)。

表　「自己受容」得点の不安(増減)×回避(増減)に関する2要因分散分析結果

見捨てられ不安	減		増		主効果		交互作用
親密性の回避	減	増	減	増	不安	回避	
平均値	3.58	3.56	3.95	3.30	0.16	5.31	4.52
標準偏差	0.65	0.66	0.54	0.73	n.s.	*	*
N	30	16	17	23			

＊p<.05

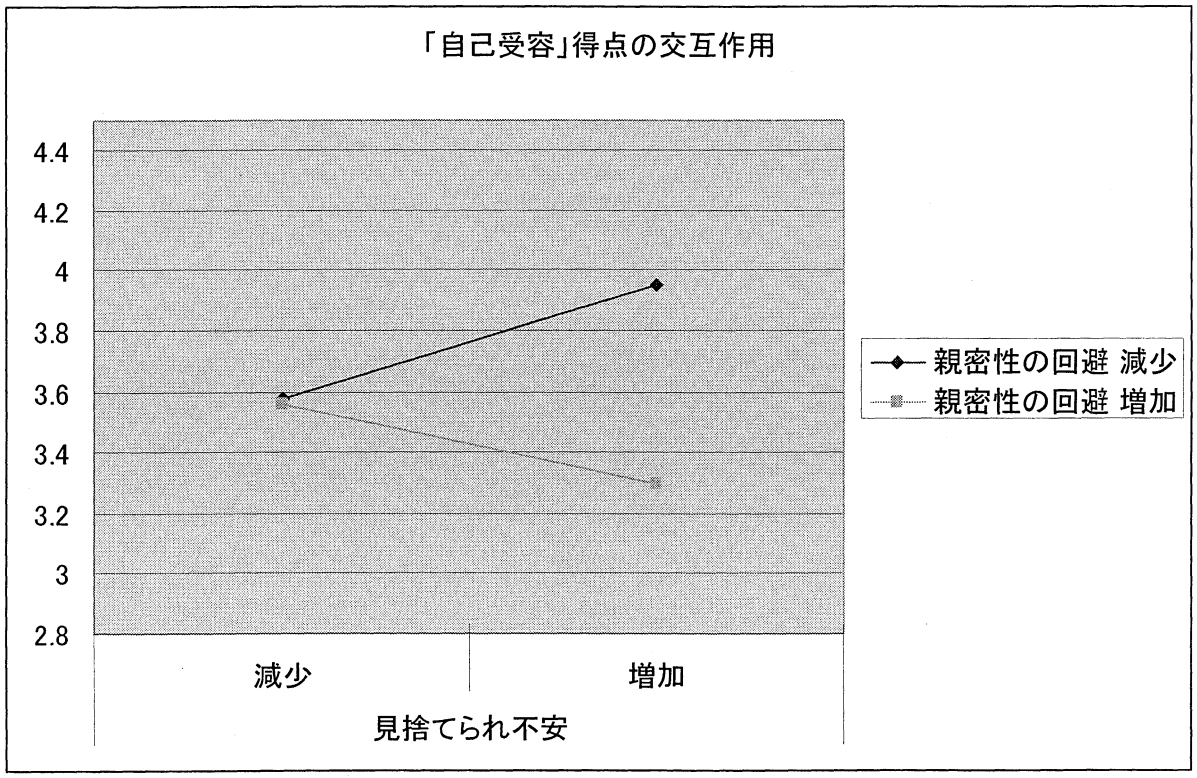


図２　「自己受容」得点の不安・回避による分散分析

次に他者からの影響の「自己受容」についてであるが、まず親密性の回避において主効果が見られた（F=5.31,p<.05）（表 21）。つまり、親密性の回避の増減において、減少している群の方が自己受容の得点が高くなっている。他者との出会いによって、親密性の回避が減っていくことによって、自己受容も高まっていくものと考えられる。

また、見捨てられ不安と親密性の回避において、交互作用も見られた(F=4.52,p<.05)（図２）。

見捨てられ不安が減少した群では、親密性の回避の増減に関わりなく、自己受容の得点は同じぐらいであったが、不安が増加した群においては、親密性の回避が増加した群では自己受容得点は低くなっているが、親密性の回避が減少した群では、自己受容は高くなっている。つまり、見捨てられ不安自体は増加し、高まっても他者との親密性の回避が減少し、親密になることで自己受容は高くなるのではと考えられる。

表　「情緒不安定」得点の不安（増減）×回避（増減）に関する2要因分散分析結果

見捨てられ不安	減		増		主効果		交互作用
親密性の回避	減	増	減	増	不安	回避	
平均値	1.54	1.88	1.97	1.82	1.35	0.31	2.36
標準偏差	0.50	0.65	0.64	0.91	n.s.	n.s.	n.s.
N	30	16	17	23			

最後に、他者からの影響において、「情緒不安定」得点について検討したが、主効果、交互作用ともに有意ではなかった（表 22）。

【　まとめ　】

1．　IWM の変容を検討するにあたり、まずその尺度としての妥当性・信頼性について検討し、児童期においても青年期と同じように「見捨てられ不安」と「親密性の回避」の２つの因子が抽出された。

2．　また重要な人物の特性として「当てになる存在」「前向きな存在」「大人的存在」の３つの因子が、またその人物からの影響として「人間不信」「自己受容」「情緒的不安定」の３因子が、それぞれ抽出された。

3．　児童期から青年期における IWM 得点の変化は、約５割の被検者においてみられ、IWM そのものが、児童期以降の様々な人との出会いを通じ、変容しうるものであることが示された。

4．　IWM の変容に関する重要な人物として、学校の先生や親友、恋人などが考えられる。また、その影響を受けた時期としては、高校を中心に、中学や大学時代においても見られた。

5．　見捨てられ不安、親密性の回避の各得点の変化の増減から、重要な人物の特性について検討した。その結果、前向きな存在の他者との出会いによって、親密性の

会費が低下することが示された。また、大人的存在としての重要な人物は、見捨てられ不安と親密性の回避にとって、逆の効果を示す場合があることが示唆された。

さらに、見捨てられ不安や親密性の回避の増加は、人間不信を招き、社会適応上の問題になる可能性が考えられる。

以上が、本研究の大まかな内容であるが、今後はさらに細かくデータを解析し、その結果を読み込んでいく必要があると考えている。

【 文献 】

嶋田美由紀・田中雄三　2005　青年期の対人関係が内的作業モデルの変化におよぼす影響　鳴門生徒指導研究　15　16-29、

【資料】

表　　各尺度の天井効果･フロア－効果

		度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差	平均-SD	平均+SD
幼児期IWM	1	112	1	7	3.59	1.85	1.74	5.44
幼児期IWM	2	112	1	7	3.80	1.55	2.26	5.35
幼児期IWM	3	110	1	7	3.11	1.58	1.53	4.68
幼児期IWM	4	112	1	7	3.14	2.01	1.13	5.16
幼児期IWM	5	112	1	7	2.27	1.38	0.89	3.65
幼児期IWM	6	112	1	7	3.63	1.77	1.86	5.39
幼児期IWM	7	112	1	7	3.90	1.58	2.33	5.48
幼児期IWM	8	111	1	7	3.59	1.89	1.70	5.49
幼児期IWM	9	111	1	7	3.01	1.72	1.29	4.73
幼児期IWM	10	111	1	7	4.68	1.69	2.99	6.38
幼児期IWM	11	112	1	7	2.63	1.40	1.23	4.04
幼児期IWM	12	112	1	7	5.10	1.45	3.65	6.54
幼児期IWM	13	112	1	7	4.73	1.58	3.15	6.31
幼児期IWM	14	112	1	7	3.37	1.47	1.90	4.84
幼児期IWM	15	111	1	7	4.84	1.29	3.55	6.13
幼児期IWM	16	111	1	7	4.45	1.42	3.03	5.87
幼児期IWM	17	112	1	7	2.52	1.45	1.07	3.97
幼児期IWM	18	111	1	7	3.10	1.55	1.55	4.65
幼児期IWM	19	112	1	7	3.50	1.69	1.81	5.19
幼児期IWM	20	112	1	7	4.92	1.46	3.46	6.38
幼児期IWM	21	112	1	7	3.89	1.67	2.22	5.57
幼児期IWM	22	112	1	7	3.55	1.59	1.96	5.15
幼児期IWM	23	112	1	7	4.55	1.43	3.12	5.99
幼児期IWM	24	112	1	6	2.69	1.29	1.40	3.98
幼児期IWM	25	111	1	7	3.01	1.47	1.54	4.48
幼児期IWM	26	110	1	7	2.79	1.50	1.29	4.29
幼児期IWM	27	112	1	7	3.50	1.59	1.91	5.09
幼児期IWM	28	112	1	7	3.31	1.62	1.69	4.93
幼児期IWM	29	112	1	6	3.09	1.27	1.82	4.36
幼児期IWM	30	112	1	7	3.44	1.72	1.71	5.16
幼児期IWM	31	112	1	7	3.65	1.87	1.78	5.52
幼児期IWM	32	112	1	7	2.92	1.44	1.48	4.36
幼児期IWM	33	112	1	6	2.69	1.25	1.44	3.93
幼児期IWM	34	112	1	7	3.00	1.57	1.43	4.57
幼児期IWM	35	112	1	7	4.22	1.58	2.65	5.80
幼児期IWM	36	112	1	7	2.88	1.26	1.61	4.14
幼児期IWM	37	112	1	7	3.38	1.50	1.87	4.88
幼児期IWM	38	112	1	7	2.75	1.40	1.35	4.15
幼児期IWM	39	112	1	7	3.38	1.33	2.05	4.71
幼児期IWM	40	111	1	7	3.76	1.61	2.14	5.37
幼児期IWM	41	112	1	7	4.36	1.37	2.99	5.73
幼児期IWM	42	112	1	6	2.60	1.37	1.23	3.96

付表 1　児童期の IWM 尺度の基礎統計

表　「重要な他者のｲﾒｰｼﾞ」尺度の天井効果･ﾌﾛｱｰ効果

	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差	平均-SD	平均+SD
重要ｲﾒｰｼﾞ 1）	91	1	5	3.31	1.17	2.14	4.48
重要ｲﾒｰｼﾞ 2）	91	1	5	3.97	1.06	2.91	5.03
重要ｲﾒｰｼﾞ 3）	91	1	5	3.63	1.23	2.40	4.85
重要ｲﾒｰｼﾞ 4）	90	1	5	3.74	1.21	2.53	4.96
重要ｲﾒｰｼﾞ 5）	91	1	5	4.29	1.09	3.20	5.37
重要ｲﾒｰｼﾞ 6）	91	1	5	3.97	1.05	2.92	5.02
重要ｲﾒｰｼﾞ 7）	91	1	5	4.07	1.00	3.07	5.06
重要ｲﾒｰｼﾞ 8）	91	2	5	3.91	1.00	2.92	4.91
重要ｲﾒｰｼﾞ 9）	91	1	5	3.95	1.05	2.90	4.99
重要ｲﾒｰｼﾞ 10）	91	1	5	4.08	0.92	3.16	5.00
重要ｲﾒｰｼﾞ 11）	91	1	5	3.65	1.10	2.55	4.75
重要ｲﾒｰｼﾞ 12）	91	1	5	3.93	1.02	2.91	4.95
重要ｲﾒｰｼﾞ 13）	91	1	5	4.05	1.12	2.94	5.17
重要ｲﾒｰｼﾞ 14）	91	1	5	3.69	1.19	2.50	4.88
重要ｲﾒｰｼﾞ 15）	91	1	5	3.90	1.04	2.86	4.95
重要ｲﾒｰｼﾞ 16）	91	2	5	3.82	1.00	2.83	4.82
重要ｲﾒｰｼﾞ 17）	91	1	5	2.21	1.08	1.13	3.29
重要ｲﾒｰｼﾞ 18）	91	1	5	2.81	1.40	1.42	4.21
重要ｲﾒｰｼﾞ 19）	91	1	5	4.05	0.92	3.13	4.98
重要ｲﾒｰｼﾞ 20）	91	1	5	4.26	0.88	3.38	5.14
重要ｲﾒｰｼﾞ 21）	91	2	5	4.24	0.86	3.38	5.10
重要ｲﾒｰｼﾞ 22）	91	1	5	3.69	1.21	2.48	4.90
重要ｲﾒｰｼﾞ 23）	91	1	5	4.11	1.22	2.89	5.33
重要ｲﾒｰｼﾞ 24）	91	1	5	3.96	1.32	2.64	5.27
重要ｲﾒｰｼﾞ 25）	91	1	5	4.05	1.23	2.82	5.29
重要ｲﾒｰｼﾞ 26）	91	1	5	3.98	1.19	2.79	5.17
重要ｲﾒｰｼﾞ 27）	91	1	5	3.81	1.11	2.70	4.93
重要ｲﾒｰｼﾞ 28）	91	1	5	3.97	1.22	2.74	5.19

付表２　重要な他者のイメージ尺度の基礎統計

表　「重要な他者からの影響」尺度の天井効果･フロア－効果

	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差	平均-SD	平均+SD
影響1)	91	1	5	3.69	1.16	2.53	4.85
影響2)	91	1	5	3.82	1.05	2.77	4.87
影響3)	91	1	5	3.07	1.41	1.65	4.48
影響4)	91	1	5	1.97	1.09	0.88	3.06
影響5)	91	1	5	3.57	1.42	2.16	4.99
影響6)	91	1	5	2.58	1.13	1.46	3.71
影響7)	91	1	5	4.09	0.80	3.29	4.89
影響8)	91	1	5	3.51	0.96	2.55	4.46
影響9)	91	1	5	3.80	0.91	2.89	4.71
影響10)	91	1	5	1.91	0.90	1.01	2.81
影響11)	91	1	5	3.29	1.06	2.23	4.34
影響12)	91	1	5	1.69	1.08	0.61	2.77
影響13)	91	1	5	3.42	1.27	2.15	4.68
影響14)	91	1	5	2.62	1.17	1.44	3.79
影響15)	90	1	5	1.69	0.92	0.77	2.61
影響16)	91	1	5	3.09	1.04	2.05	4.13
影響17)	91	1	5	2.33	1.23	1.10	3.56
影響18)	91	1	5	3.29	1.03	2.26	4.31
影響19)	91	1	5	1.86	1.02	0.84	2.87
影響20)	91	1	5	3.69	1.09	2.60	4.78
影響21)	91	1	5	3.70	0.90	2.80	4.60
影響22)	91	1	5	3.68	1.01	2.67	4.69
影響23)	90	1	5	1.84	1.16	0.68	3.00
影響24)	91	1	5	3.36	1.27	2.09	4.63
影響25)	91	1	5	3.80	1.01	2.79	4.82
影響26)	91	1	5	3.16	1.37	1.80	4.53
影響27)	91	1	5	3.56	1.21	2.35	4.77

付表３　重要な他者からの影響尺度の基礎統計

表　「青年期IWM」尺度の天井効果・フロアー効果

	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差	平均-SD	平均+SD
青年期IWM 1)	110	1	7	4.82	1.75	3.07	6.56
青年期IWM 2)	110	1	7	3.58	1.87	1.71	5.46
青年期IWM 3)	111	1	7	5.21	1.43	3.77	6.64
青年期IWM 4)	111	1	7	4.08	1.68	2.40	5.76
青年期IWM 5)	110	1	7	3.79	1.70	2.09	5.49
青年期IWM 6)	111	1	7	3.46	1.72	1.74	5.17
青年期IWM 7)	110	1	7	3.98	1.78	2.21	5.76
青年期IWM 8)	111	1	7	4.00	1.77	2.23	5.77
青年期IWM 9)	111	1	6	2.49	1.33	1.15	3.82
青年期IWM 10)	111	1	7	3.40	1.84	1.56	5.24
青年期IWM 11)	110	1	7	3.75	1.64	2.11	5.38
青年期IWM 12)	111	1	7	2.52	1.31	1.21	3.84
青年期IWM 13)	111	1	7	2.79	1.48	1.31	4.27
青年期IWM 14)	111	1	7	3.11	1.69	1.42	4.79
青年期IWM 15)	111	1	7	4.30	1.48	2.82	5.78
青年期IWM 16)	111	1	7	3.68	1.26	2.42	4.95
青年期IWM 17)	110	1	7	3.64	1.66	1.98	5.29
青年期IWM 18)	110	1	7	3.89	1.60	2.29	5.50
青年期IWM 19)	109	1	6	2.87	1.27	1.60	4.14
青年期IWM 20)	109	1	7	3.42	1.65	1.77	5.07
青年期IWM 21)	110	1	7	3.41	1.50	1.91	4.91
青年期IWM 22)	110	1	7	3.56	1.34	2.23	4.90
青年期IWM 23)	110	1	7	4.17	1.42	2.75	5.59
青年期IWM 24)	110	1	7	3.60	1.52	2.08	5.12
青年期IWM 25)	110	1	7	3.88	1.55	2.33	5.43
青年期IWM 26)	110	1	7	2.75	1.35	1.41	4.10
青年期IWM 27)	110	1	7	4.27	1.48	2.79	5.76
青年期IWM 28)	110	1	7	2.73	1.34	1.39	4.07
青年期IWM 29)	110	1	7	3.95	1.87	2.08	5.81
青年期IWM 30)	110	1	7	3.38	1.61	1.77	5.00

付表４　青年期 IWM 尺度の基礎統計

子どもの頃の対人関係についてのアンケート

アンケート調査にご協力いただき有り難うございます。本アンケートは、日本学術振興会科学研究費、基盤研究（C）の一環として行うものであり、研究以外の目的には一切使用しません。

アンケート結果は、統計的に処理し、個人的な情報を扱うことはありませんので、ご安心ください。

質問の内容をよく読んで、記入漏れがないように注意し、思った通りにお答えください。

まず、下の性別・年齢をご記入ください。

性別（　男・女　）

年齢（　　）歳

IWM研究会　研究代表
京都教育大学　教育学科
准教授　内田　利広

1. 以下の各項目の内容は、小さい頃（小学校1～3年頃）のあなたにどの程度あてはまりますか。
最も適当な所に○をつけて下さい。下線は真ん中です。

		全くあてはまらない	あてはまらない	あまりあてはまらない		ややあてはまる	あてはまる	非常によくあてはまる
1)	私は小さい頃、ひとりぼっちになってしまうのではないかと心配になることがあった。	1	2	3	4	5	6	7
2)	私は小さい頃、人ともっと一体感をもちたかった。	1	2	3	4	5	6	7
3)	私は小さい頃、私が人のことを大切に思うほどには、人は私のことを大切に思っていないのではないかと心配していた。	1	2	3	4	5	6	7
4)	私は小さい頃、今の親とはちがう親が欲しいと思うことがあった。	1	2	3	4	5	6	7
5)	私は小さい頃、親は私と一緒にいたくないのではないかと、しばしば気にした。	1	2	3	4	5	6	7
6)	私は小さい頃、人に頼るのに抵抗があった。	1	2	3	4	5	6	7
7)	私は小さい頃、人がそばについていてくれないと不安だった。	1	2	3	4	5	6	7
8)	私は小さい頃、親戚の家に遊びに行っても、親がいないと不安になった。	1	2	3	4	5	6	7
9)	私は小さい頃、人と仲良くしたり心を開くのに抵抗を感じることがあった。	1	2	3	4	5	6	7
10)	私は小さい頃、人に見捨てられるのではないかと心配になることは、ほとんどなかった。	1	2	3	4	5	6	7
11)	私は小さい頃、人とあまりに親密になることがどちらかというと好きではなかった。	1	2	3	4	5	6	7
12)	小さい頃、親は私の良い面も悪い面もわかってくれていた。	1	2	3	4	5	6	7
13)	私は小さい頃、比較的容易に人と親密になれていた。	1	2	3	4	5	6	7
14)	私は小さい頃、親が出かける時には、むりやりついて行こうとした。	1	2	3	4	5	6	7
15)	私は小さい頃、人の近くにいるのは居心地がよかった。	1	2	3	4	5	6	7
16)	私は小さい頃、人になぐさめやアドバイス、助けを求めることに抵抗はなかった。	1	2	3	4	5	6	7
17)	私は小さい頃、叱られるたびに親に見捨てられる恐怖を感じていた。	1	2	3	4	5	6	7
18)	私は小さい頃、自分が人にたよることをなかなか許すことができなかった。	1	2	3	4	5	6	7
19)	私は小さい頃、本当は、人は私に対して好意を持っていないのではとしばしば気になった。	1	2	3	4	5	6	7
20)	私は小さい頃、人と親密になることがとても心地よかった。	1	2	3	4	5	6	7
21)	私は小さい頃、親から離れてひとりで行動するのは怖かった。	1	2	3	4	5	6	7

	全くあてはまらない	あてはまらない	あまりあてはまらない		ややあてはまる	あてはまる	非常によくあてはまる
22) 私は小さい頃、人に甘えることに、抵抗があった。	1	2	3	4	5	6	7
23) 私は小さい頃、人ともっと親密になりたいと思うことがあった。	1	2	3	4	5	6	7
24) 私は小さい頃、人ととても親密になりたいと望んだがために、時々人はうんざりして私から離れていってしまうことがあった。	1	2	3	4	5	6	7
25) 私は小さい頃、人が望む以上の親密さを、私はいつも望んでいた。	1	2	3	4	5	6	7
26) 私は小さい頃、人が私に対して好意的であるということを何度も何度も言ってくれることが必要であった。	1	2	3	4	5	6	7
27) 私は小さい頃、人は私の本当の気持ちをわかっていないと感じていた。	1	2	3	4	5	6	7
28) 私は小さい頃、誰かと付き合っていないと何となく不安で不安定な気持ちになった。	1	2	3	4	5	6	7
29) 私が小さい頃、私が望むほどの親密さを人は望んでいなかったと思う。	1	2	3	4	5	6	7
30) 私は小さい頃、いろいろな人との関係について、非常に心配していた。	1	2	3	4	5	6	7
31) 私は小さい頃、何かをするときは母親の顔色をうかがっていた。	1	2	3	4	5	6	7
32) 私は小さい頃、人が必要なときにいつでも私のためにいてくれないとイライラすることがあった。	1	2	3	4	5	6	7
33) 私は小さい頃、人に近づきすぎると不安になることがあった。	1	2	3	4	5	6	7
34) 私は小さい頃、知り合いを失うのではないかと結構心配していた。	1	2	3	4	5	6	7
35) 私は小さい頃、人に何でも話しをしていた。	1	2	3	4	5	6	7
36) 私は小さい頃、親から見放されてもあまり気にしなかった。	1	2	3	4	5	6	7
37) 私は小さい頃、人を全面的に信頼するのは難しかった。	1	2	3	4	5	6	7
38) 私は小さい頃、私がいてほしいと望むくらい人がそばにいてくれないと、イライラしてしまった。	1	2	3	4	5	6	7
39) 私は小さい頃、人と親密な関係がもてなくても気にしなかった。	1	2	3	4	5	6	7
40) 私は小さい頃、人にダメだなと言われると、自分は本当にダメだなあと感じていた。	1	2	3	4	5	6	7
41) 私は小さい頃、たやすく人と親密な関係を持てていた。	1	2	3	4	5	6	7
42) 私は小さい頃、見捨てられるのではないかと心配だった。	1	2	3	4	5	6	7

2．これからたずねる質問に対して、当てはまるものに○を付けてください。

(1) あなたは、今の自分の性格が特に対人関係において、小学校１～３年の頃と比べて変化したと思いますか？

（ 変化した ・ 変化していない ）

★あなたが現在の性格になるに当たって、親以外で、今までの生活の中の様々な活動や体験を通して、あなたの態度や生き方、対人関係に 小学校高学年以降で 最も影響を与えた人を『 重要な人 』とします。

(2)あなたには“ 重要な人 ”が存在しますか？ （ いる ・ いない ）

・ いるとすれば、何人いますか？ （ ）人

(3) (1)で「変化した」と答えた人は、その変化が、“重要な人”との出会いによるものだと思いますか？

（ はい ・ いいえ ）

・「いいえ」と答えた人は、その変化は何による影響が大きかったと思いますか？

★“ 重要な人 ”が「 **いない** 」人は、6ページの３．へ進んで下さい。

★“ 重要な人 ”が「 **いる** 」人は **以下の質問にそのまま** 進んで下さい。

＜その中でも、**１番強く**影響を受けた“ 重要な人 ”を **１人選び** 、その人についてお答え下さい。＞

(4)あなたに１番強く影響を与えた“ 重要な人 ”との関係は？

（ 先生 ・ 友人 ・ 親友 ・ 恋人 ・ 片思いの人 ・ 兄弟 ・先輩 ・ 後輩 ・ 親戚 ・
芸能人 ・ 歴史上の人物 ・ その他{ } ）

(5)その“重要な人”の性別は？ （ 男 ・ 女 ）

(6)その“重要な人”から **１番強く** 影響を受けたのはいつ頃ですか？

（ 小学校高学年 ・ 中学校 ・ 高等学校 ・ 浪人中 ・ 大学 ）

(7)その“重要な人”に受けた影響はプラスでしたか、マイナスでしたか？

（ プラスの影響 ・ どちらともいえない ・ マイナスの影響 ）

(8)現在のあなたを100%とします。その“重要な人”から受けた影響はあなたの何%を占めると思いますか？

（ ）%

(9)その人があなたにとって“重要な人”となったきっかけや、影響を受けた具体的な言葉やエピソードはどのようなものですか。

(10) あなたが一番強く影響を受けたその“重要な人”に当てはまるものに○をつけて下さい。

		(1)全く当てはまらない	(2)当てはまらない	(3)どちらでもない	(4)当てはまる	(5)非常に当てはまる
1	厳しい	1	2	3	4	5
2	優しい	1	2	3	4	5
3	寛大な	1	2	3	4	5
4	誠実な	1	2	3	4	5
5	信頼できる	1	2	3	4	5
6	積極的な	1	2	3	4	5
7	頼りになる	1	2	3	4	5
8	前向きな	1	2	3	4	5
9	社交的	1	2	3	4	5
10	明るい	1	2	3	4	5
11	正義感の強い	1	2	3	4	5
12	面白い	1	2	3	4	5
13	安心できる	1	2	3	4	5
14	教養がある	1	2	3	4	5
15	活発な	1	2	3	4	5
16	好奇心旺盛	1	2	3	4	5
17	冷たい	1	2	3	4	5
18	自己中心的	1	2	3	4	5
19	個性的	1	2	3	4	5
20	自分の意見をはっきり言う	1	2	3	4	5
21	信念を持っている	1	2	3	4	5
22	リーダーシップのある	1	2	3	4	5
23	自分を認めてくれる	1	2	3	4	5
24	励ましてくれる	1	2	3	4	5
25	話を聞いてくれる	1	2	3	4	5
26	良い所を見つけてくれる	1	2	3	4	5
27	一人前の人間として扱ってくれる	1	2	3	4	5
28	真正面から受け止めてくれる	1	2	3	4	5

(11) “重要な人”との出会いを通して、どのような影響を受けたのかについて、あなたにどの程度当てはまると思いますか、次の(1)から(5)のいずれかに○をつけて下さい。

		(1)全く当てはまらない	(2)当てはまらない	(3)どちらでもない	(4)当てはまる	(5)非常に当てはまる
1	自信が持てた	1	2	3	4	5
2	客観視するようになった	1	2	3	4	5
3	進路に関する決定をした	1	2	3	4	5
4	無口になった	1	2	3	4	5
5	“重要な人”のようになりたいと思った	1	2	3	4	5
6	人と比べるようになった	1	2	3	4	5
7	視野が広くなった	1	2	3	4	5
8	自分に厳しくなった	1	2	3	4	5
9	周りに流されず、自分を持つようになった	1	2	3	4	5
10	短気になった	1	2	3	4	5
11	とにかく行動してみるようになった	1	2	3	4	5
12	学校が嫌いになった	1	2	3	4	5
13	飾らず自然体でいられるようになった	1	2	3	4	5
14	勝気になった	1	2	3	4	5
15	相手を見下すようになった	1	2	3	4	5
16	真面目になった	1	2	3	4	5
17	思っていることを言わなくなった	1	2	3	4	5
18	人を信用できるようになった	1	2	3	4	5
19	反抗的になった	1	2	3	4	5
20	自立しようと思った	1	2	3	4	5
21	人に優しくできるようになった	1	2	3	4	5
22	自分の弱い部分が改善された	1	2	3	4	5
23	人間不信になった	1	2	3	4	5
24	将来について深く考えるようになった	1	2	3	4	5
25	じっくり考えるようになった	1	2	3	4	5
26	“重要な人”を越えたいと思った	1	2	3	4	5
27	ありのままの自分を受け入れられるようになった	1	2	3	4	5

3. 以下には、いろいろな人が対人関係の中でどのような気持ちを持つかについての文をあげてあります。
それぞれの文は、「あなたが普通の対人関係の中で一般的に体験している気持ちや感じ方」に、どのくらいよく当てはまりますか。いろいろな対人関係の中であなたが普通によく体験していることを思い浮かべながら、もっとも当てはまる番号に○印をつけてください。下線は真ん中です。

		全くあてはまらない						非常によくあてはまる
1	心の奥底で何を感じているかを人にみせるのはどちらかというと好きではない。	1	2	3	4	5	6	7
2	私は、見捨てられるのではないかと心配だ。	1	2	3	4	5	6	7
3	私は、人と親密になることがとてもここちよい。	1	2	3	4	5	6	7
4	私は、いろいろな人との関係について、非常に心配している。	1	2	3	4	5	6	7
5	私が人のことを大切に思うほどには、人が私のことを大切に思っていないのではないかと私は心配する。	1	2	3	4	5	6	7
6	私は、知り合いを失うのではないかとけっこう心配している。	1	2	3	4	5	6	7
7	私は人に心を開くのに抵抗を感じる。	1	2	3	4	5	6	7
8	私はいつも、人が私に対していだいていてくれる気持ちが、私が人に対していだいている気持ちと同じくらい強ければいいのになぁと思う。	1	2	3	4	5	6	7
9	私があまりにも気持ちの上で完全に一つになることを求めるがために、ときどき人はうんざりして私から離れていってしまう。	1	2	3	4	5	6	7
10	私は一人ぼっちになってしまうのではないかと心配する。	1	2	3	4	5	6	7
11	私は、心の奥底のある考えや気持ちを人に話すことに抵抗がない。	1	2	3	4	5	6	7
12	私が人ととても親密になりたいと強く望むがために、ときどき人はうんざりして私から離れていってしまう。	1	2	3	4	5	6	7
13	私は人とあまり親密にならないようにしている。	1	2	3	4	5	6	7
14	私には、人が私に対して好意的であるということを何度も何度も言ってくれることが必要だ。	1	2	3	4	5	6	7
15	私は比較的容易に人と親密になれると思う。	1	2	3	4	5	6	7
16	私は、人にもっと自分の感情や自分たちの関係に真剣であることを示させようとしているのを感じることがときどきある。	1	2	3	4	5	6	7

		全くあてはまらない						非常によくあてはまる
17	私は、自分が人に依存することをゆるすことがなかなかできないと思う。	1	2	3	4	5	6	7
18	私は、(知り合いに)見捨てられるのではないかと心配になることはほとんどない。	1	2	3	4	5	6	7
19	私は、人とあまり親密になることがどちらかというと好きではない。	1	2	3	4	5	6	7
20	私は人に自分のことを好きになってもらうことができなかったら、私はきっと気が動転して、悲しくなったり腹が立ったりする。	1	2	3	4	5	6	7
21	私は、人に何でも話す。	1	2	3	4	5	6	7
22	私が親密になりといと望むほどには、人は私と親密になりたいと思っていないと私は思う。	1	2	3	4	5	6	7
23	私はたいてい、人と自分の問題や心配ごとを話し合う。	1	2	3	4	5	6	7
24	私は誰かとつき合っていないと、なんとなく不安で不安定な気持ちになる。	1	2	3	4	5	6	7
25	私は人に頼ることに抵抗がない。	1	2	3	4	5	6	7
26	私は、私がいてほしいと望むぐらいに人がそばにいてくれないと、イライラする。	1	2	3	4	5	6	7
27	私は、人になぐさめやアドバイス、助けを求めることに抵抗がない。	1	2	3	4	5	6	7
28	私は、人が必要なときにいつでも私のためにいてくれないとイライラする。	1	2	3	4	5	6	7
29	人にダメだなぁを言われると、自分は本当にダメだなぁと感じる。	1	2	3	4	5	6	7
30	私は、知り合いが私のことをほっといて自分一人で何かすることが重なってくると腹が立ってきてしまう。	1	2	3	4	5	6	7

これで質問紙は終了です。
ご協力、ありがとうございました。

なお、本調査のあと、協力いただける方には簡単なインタビューを行いたいと思っています。
ご協力いただける方は、以下に学籍番号の記入をお願いいたします。

番号(　　)

第４章

「愛着」や「内的作業モデル」に関する論文リスト

『愛着』や『内的作業モデル』に関する研究は、現在も多く研究されている。2000年以降に発表された『愛着』や『内的作業モデル』に関する論文を掲載する。対象により、グループ化し、年代順で並べた。

１.「乳幼児」・「母子」を対象とした論文

「乳幼児」・「母子」を対象にした研究が最も多く行われている。教育・臨床現場だけでなく、医療現場においても、近年多く行われている。

【2007】

稲垣千代・渡邉孝憲　2007　母親の養育態度と内的作業モデルとの関連について　家庭教育研究所紀要　(29)　16-28

狗巻修司　2007　自閉症幼児の他者理解の発達と療育上の留意点：愛着対象の形成に焦点をあてて　福祉社会研究　7　107-121

意東直子・西村正子　2007　父性意識の向上を目指して－カンガルーケア実施による心理的変化と愛着形成の影響について　周産期医学　37(8)　1049-1053

鎌田佳奈美・石原あや・川村千恵子　2007　乳幼児をもつ母親の内的ワーキングモデルと社会支援に対する態度との関連　大阪府立大学看護学部紀要　13(1)　1-8

加藤孝士　2007　養育者への重要な他者からのサポートと内的作業モデルの関連　発達心理学研究　18(3)　185-195

長沼佐代子　2007　母親の愛着パターンと観察場面に見られる母子相互作用の関連－安定型ととらわれ型の母親とその子どもの比較から　白百合女子大学発達臨床センター紀要　(10)　39-51

山上雅子　2007　自閉症スペクトラム障害と愛着研究の進歩　発達教育学研究　1　15-27

【2006】

青木豊・松本英夫　2006　愛着研究・理論に基礎付けられた乳幼児虐待に対するアプローチについて　児童青年精神医学とその近接領域　47(1)　1-15

青木豊・松本英夫・寺岡菜穂子（他）　2006　症例研究 乳幼児の愛着障害－3 症例によ

る診断基準の検討（第 45 回日本児童青年精神医学会総会特集(1)スローガン：児童青年精神医学の深化に向けて） 児童青年精神医学とその近接領域 46(3) 318-337
萩野聡子・村瀬聡美・金子一史（他） 2006 妊娠期における父親・母親の抑うつ傾向と胎児への愛着との関連 児童青年精神医学とその近接領域 47(1) 29-37
長谷川香奈・戸田弘二 2006 乳児の情緒的反応に対する内的作業モデルの影響 学校臨床心理学研究 4 101-117
福澤雪子・山川裕子 2006 <原著>産後 1 か月間の母親の対児愛着と精神状態 川崎医療福祉学会誌 16(1) 81-89
井手裕子 2006 幼児期における内的作業モデルの検討Ⅱ：親和動機との関連性 金城学院大学論集. 人文科学編 3(2) 106-119
岩藤裕美 2006 親への移行における夫婦間及び対児愛着形成の変化と育児困難感との関連性について－計画妊娠と非計画妊娠の夫婦を比較して 日本=性研究会議会報 18(1) 2-20
西脇雅彦・安井素子・竹内あゆ美（他） 2006 広汎性発達障害幼児の統合保育(第 1 報)担任との愛着形成による発達支援 治療教育学研究 26 31-37
大村典子・光岡攝子 2006 妊娠期から生後 1 年までの児に対する母親の愛着とその経時的変化に影響する要因 小児保健研究 65(6) 733-739
酒井佐枝子・加藤寛 2006 養育者の対人関係のあり方と養育行動との関係 心的トラウマ研究 (2) 53-62
佐藤奈緒子・森岡由起子・佐藤文・生地新・村田亜美 2006 産後うつ状態に影響を及ぼす背景因子についての縦断的研究(第一報)：母親自身の被養育体験・内的ワーキングモデルおよび児への愛着との関連 母性衛生 47(2) 320-329
佐藤奈緒子・森岡由起子・佐藤文・生地新・村田亜美 2006 産後うつ状態に影響を及ぼす背景因子についての縦断的研究(第二報)：産後うつ状態と対児感情・児への愛着との関連 母性衛生 47(2) 330-343
田口由佳 2006 幼児の母親における愛着の世代間伝達仮説－質問紙調査による愛着スタイルと養育行動の関連の検討 聖心女子大学大学院論集 28(1)(通号 30) 117-136
山川賀世子 2006 幼児期の愛着とソーシャル・ネットワーク－6 歳時の愛着と 3～6 歳時の人間関係の枠組みの関連 聖心女子大学大学院論集 28(2)(通号 31) 72-88
山川賀世子 2006 幼児の愛着の測定：Attachment Doll Play の妥当性の検討 教育心理学研究 54(4) 476-486
吉田敬子 2006 胎児期からの親子の愛着形成（特集 子どもの心(1))－(子どもの心を育む) 母子保健情報 54 36-46

【2005】
桂田恵美子　2005　幼児の攻撃行動と愛着、母親の養育行動との関連　人文論究 55(2)　75-93
近藤由佳里・大庭智子・田中智子・古賀・あゆみ・光吉久美子・大塚康代・野口ゆかり・新小田春美・平田・伸子・加来恒壽　2005　「できちゃった結婚」妊婦における母性不安と母性意識・愛着形成について：計画妊娠の初産婦と比較して　母性衛生　45(4) 518-529
大神純子・吉留厚子・宮崎文子　2005　新生児への早期頻回タッチングが初産婦の愛着形成におよぼす影響－状態不安と愛着形成の関連　ペリネイタル・ケア　24(12) 1240-1246
尾崎康子　2005　幼児期における自閉性症状に及ぼす母子支援の有効性：愛着形成と母子分離のプロセスからの検証　富山大学教育実践総合センター紀要　6　127-136
榊原美紀・別府哲　2005　複数の大人と安定した愛着関係をもつことに困難を示した自閉症児の愛着行動と他者理解の障害と発達　岐阜大学教育学部研究報告. 人文科学　54(1) 241-258
山川賀世子　2005　愛着の発達不全－Dタイプの検討　臨床発達心理学研究　4　13-22
吉田弘道　2005　愛着評価法と発達評価法　小児科　46(11)　1743-1749

【2004】
石井かやの　2004　子どもから母親への愛着－子どもの病理・気質への理解　小児科臨床 57　1280-1286
金子一史・本城秀次・村瀬聡美　2004　母親から子どもへの愛着形成－心理社会的検討　小児科臨床　57　1273-1279
溝口美鈴　2004　妊娠期・産後における母親の子どもへの愛着と子どもの気質および母親の愛着スタイルとの関連　名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要. 心理発達科学 51　322-324
森下正康・木村あゆみ　2004　母親の養育態度におよぼす内的ワーキング・モデルとソーシャルサポートの影響　和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要　14　123-131
中西美紀・岩堂美智子　2004　幼児を持つ母親の仲間関係と育児困難感：内的ワーキングモデル尺度を用いて　生活科学研究誌　3　107-114
李和貞　2004　5歳児の自己概念と父母に対する愛着との関連—愛着の内的ワーキングモデルを中心に　早稲田大学大学院教育学研究科紀要　別冊　(11-2)　71-82
榮玲子　2004　妊婦の胎児への愛着形成に影響する要因の検討　日本助産学会誌 18(1) 49-55
澤田敬　2004　親子の愛着形成とペリネイタルビジット－育児混乱・虐待予防（特集 産

科医療のフロントライン)　周産期医学　34(3)　381-386
寺坂由紀・中山美香・北林ちなみ（他）　2004　母子の絆についての一考察－母子相互作用に関して　飯田女子短期大学看護学科年報　(7)　169-182
上田七生　2004　乳児－保育者間の愛着関係に関する縦断的研究－3歳時の担任交替の影響と友達関係　広島大学心理学研究　(4)　185-192
上田七生　2004　乳児－保育者間の愛着関係の変容過程：質的データによる量的データの妥当性の検討　広島大学大学院教育学研究科紀要．第三部，教育人間科学関連領域　52　333-338

【2003】

土井靖子　2003　施設における被虐待児への治療的介入の心理学的考察－「特定の他者」との関係性における愛着の視点より－　児童学研究：聖徳大学児童学研究紀要　5　115-125
笛吹素子　2003　母親の愛着形成に関する研究：出産形態と環境因に着目して　名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要．心理発達科学　50　330-331
平沼典子・篠田美紀　2003　母親の内的ワーキングモデルと子離れに関する研究　児童・家族相談所紀要　(20)　51-57
本郷一夫　2003　幼児期－愛着関係のネットワークの中で　児童心理　57(7 786)　642-645
堀内勁　2003　母乳育児の母子相互作用　ペリネイタル・ケア　22(7 282)　612-615
藤本昌樹・小堀友子・鈴木国威・鎌倉利光・糸井尚子　2003　母親の不安と養育態度、子ども観に関する共分散構造モデル　小児保健研究　62(3)　359-364
藤岡孝志　2003　愛着障害の子ども及びその親への修復的愛着療法に関する研究　日本社会事業大学研究紀要　50　97-120
雄山真弓・辻野順子　2003　母親の養育タイプに関する要因の発見：日本と中国の大学生を対象として　情報処理学会研究報告．ICS,[知能と複雑系]　30　161-165
雄山真弓・辻野順子　2003　母親の養育タイプに関する要因の発見：日本と中国の大学生を対象として（〈特集〉「アクティブマイニング」及び一般：文部科学省科学研究費特定領域研究「情報洪水時代におけるアクティブマイニングの実現」公開シンポジウム）　電子情報通信学会技術研究報告．AI,人工知能と知識処理　102(711)　45-49
雄山真弓・辻野順子　2003　母親の養育タイプに関する要因の発見：日本と中国の大学生を対象として　人工知能基礎論研究会　52　161-165
小林隆児・小林広美・船場久仁美・仲間友子・山本奈津子・財部盛久　2003　自閉症児・養育者間における動因的葛藤、愛着(「甘え」)、情動的コミュニケーション　精神神經學雑誌　105(9)　1145-1150

宮本邦雄　2003　愛着研究の新しい動向：乳児の鎮静化作因顔認知　東海女子大学紀要　22　97-107
野網由紀・白井瑞子・奥尾恵美　2003　産褥早期の愛着形成に影響を及ぼす要因　香川母性衛生学会誌　3(1)　45-50
岡嶋久美・玉井友香・森岡嗣雅子　2003　NICU における親の愛着形成とキーパーソンとしての祖父母の役割と関係性：若年層の親との関わりを通して親子の愛着段階の図式化を試みて　日本看護研究学会雑誌　26(3)　464
奥山眞紀子　2003　乳幼児期の子どもの心と体の SOS の気づき方・見つけ方　子どもの健康科学　4(1)　47-50
押野修司・川俣実・孔順姫・東チヨ子・奥山眞紀子　2003　被虐待児の愛着障害と感覚機能の発達の特徴　作業療法　22　345
尾崎康子　2003　愛着と気質が母子分離に及ぼす影響：2.3 歳児集団の継続的観察による検討　教育心理学研究　51(1)　96-104
上田七生　2003　乳児と保育者との愛着関係の発達および変容の過程：第 1 愛着対象者との愛着関係が不安定な乳児を対象に　広島大学大学院教育学研究科紀要．第 3 部．教育人間科学関連領域　51　359-363
上田七生・山崎晃　2003　乳幼児の愛着形成に関する短期縦断的研究－保育者との関係が第一愛着対象者との関係に及ぼす影響　保育学研究　41(2)　222-230
若葉陽子　2003　不十分な母子愛着関係と強い心理的不安が発吃の基盤となった幼児吃音の治癒過程　特殊養育研究施設研究報告　2　59-69
吉田敬子・山下洋　2003　育児不安　小児科臨床　56(4 657)　709-717
吉永陽一郎　2003　タッチケア　小児科臨床　56(4 657)　703-708
芳野道子　2003　愛着の世代間伝達－内的作業モデルとその内なるものへの癒し　家族問題相談研究　(2)　55-67

【2002】
古市真智子　2002　ある自閉症児のプレイセラピィの経過：セラピストに対する愛着の形成過程　治療教育学研究　22　95-103
数井みゆき　2002　養育システムの発達～愛着システムとの関連についての一考察～　茨城大学教育学部紀要．人文・社会科学・芸術　51　45-64
中島登美子　2002　母親の愛着質問紙(MAQ)の信頼性・妥当性の検討　小児保健研究　61(5)　656-660
中島登美子　2002　カンガルーケアを実施した母親の愛着と早期産体験の癒し　日本看護科学会誌　22(1)　13-22
楢木野裕美・鎌田佳奈美・鈴木敦子　2002　子ども虐待の予防に向けた育児支援(1)妊娠各

期における妊婦のInternal Working Modelと親になることに対する態度の関連　日本小児看護学会誌　11(1)(通号 20)　51-57
西村ゆかり・中村真由美・稲田信子　2002　低出生体重児へのタッチケアが母子愛着形成に及ぼす影響　日本看護学会論文集, 母性看護　33　28-30
野田優江　2002　早期乳幼児期における虐待の発生機序と予防的アプローチの考察－母子愛着形成を中心に　武庫川女子大学発達臨床心理学研究所紀要　(4)(通号 17)　273-280
岡山久代　2002　妊婦の胎児への愛着に対する実母ならびに夫との関係の影響：パス解析による因果モデルの検討　日本看護研究学会雑誌　25(5)　15-25
大村典子・松原まなみ・山磨康子・北村智恵美岸本長代　2002　周産期における母親の内的ワーキングモデルとその経時的変化　母性衛生　43(1)　18-24
高橋正泰　2002　母子関係の心理アセスメント－愛着行動に関する検討　リハビリテイション心理学研究　30　15-29
土取洋子　2002　ハイリスク児の母親の心理的反応と愛着形成－ソーシャル・サポート、ネットワーク構造の検証と再構成　岡山県立大学保健福祉学部紀要　9　1-11
齋藤涼子・寺本志帆・柳香織里（他）　2002　精神発達遅滞があり母親に対する攻撃性の強い患者が愛着を育む過程　日本精神科看護学会誌　45(1)　20-23
上田七生　2002　母子間の愛着関係の安定性と養育態度との関連　広島大学心理学研究　(2)　195-200
若葉陽子・巻島麻衣子　2002　0歳児から初診時まで母子愛着関係に問題があった吃音児の治癒過程　特殊教育研究施設研究報告　1　71-79

【2001】
原田真由美　2001　極低出生体重児の母親の愛着形成過程とその関連要因　日本新生児看護学会誌　8(1)　20-31
本城秀次　2001　妊婦の胎児に対する愛着と抑うつに関する研究　第 7 回健康文化研究助成論文集　3　105-111
金子一史・瀬地山葉矢・佐々木靖子（他）　2001　妊娠期の母親のメンタルヘルスが母子関係に与える影響について－母親愛着および抑うつの視点からの検討　研究助成論文集　(通号 37)　39-46
数井みゆき　2001　乳幼児期の保育と愛着理論：子どものより良い発達を求めて　母子研究　(21)　62-79
駒田閑子・別府哲・宮本正一　2001　幼児における移行対象と愛着の発達　岐阜大学教育学部研究報告. 人文科学　50(1)　101-112
小林隆児　2001　発達障害治療における愛着形成のもつ意味　乳幼児医学・心理学研究

10(1) 29-34
今野義孝 2001 わが子虐待の世代間伝達は断ち切れるか?－超早期における愛着形成を通して 特殊教育学研究 39(3) (通号 137) 53-59
今野義孝・水谷徹・星野常夫 2001 わが子虐待の早期発見と早期教育に関する考察：母子の愛着形成とわが子虐待の予防 文教大学教育学部紀要 35 105-117
中島登美子 2001 母親の愛着尺度日本版の信頼性・妥当性の検討 日本看護科学会誌 21(1) 1-8
中島登美子 2001 早期産の母親の子どもに対する愛着的感情と気分－カンガルーケアと抱っこケアを実施した母親の退院前の比較から 日本看護学会誌 10(1) 43-49
岡山久代・高橋真理 2001 胎児への愛着モデルの検証：妊婦と母親との関係及び夫との関係の影響について 日本看護研究学会雑誌 24(3) 250
奥山眞紀子 2001 被虐待児の精神症状の特徴－愛着を含む他者関係および自己制御の問題を中心として－ 平成 12 年度厚生科学研究（子ども家庭総合研究事業）報告書 426-448
大村典子・山磨康子・松原まなみ 2001 周産期における母親の内的ワーキングモデルと胎児および乳児への愛着 日本看護科学会誌 21(3) 71-79
太田にわ 2001 日本版 MAI 尺度による母性愛着の評価と関連要因に関する研究：第 1 報日本小児科学会雑誌 105(8) 867-875
繁多進 2001 愛着の発達 乳幼児医学・心理学研究 10(1) 17-28
下田あい子・戸部和代・今関節子（他） 2001 報告 NICU に入院した児の母親と正常分娩をした母親の不安・愛着の比較 日本新生児看護学会誌 8(2) 45-52
諏訪きぬ 2001 保育者の育児意識の変容(1)母性愛、愛着形成要因に対する意識を中心に 明星大学教育学研究紀要 (通号 16) 83-90
庄司順一 2001 子どもの養育環境の問題と愛着障害 乳幼児医学・心理学研究 10(1) 35-41
横山美江・清水忠彦 2001 多胎児に対する母親の愛着感情の偏りと関連要因の分析 日本公衆衛生雑誌 48(2) 85-94

【2000】
天野菜穂子・宮本正一 2000 新入園児の愛着と母親行動の予期能力 岐阜大学教育学部研究報告. 人文科学 48(2) 85-94
別府哲 2000 自閉症幼児における愛着対象の形成と療育(<特集>障害児の療育・教育と発達心理学) 障害者問題研究 28(3) 218-228
井森澄江 2000 幼児期における父親行動,母親行動と子どもの内的ワーキングモデル 東京家政大学研究紀要. 1, 人文社会科学 40 225-232

神園幸郎　2000　自閉症児における愛着の形成過程：母親以外の特定の他者との関係において　琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要　2　1-16

数井みゆき・遠藤利彦・田中亜希子・坂上裕子・菅沼真樹　2000　日本人母子における愛着の世代間伝達　教育心理学研究　48(3)　323-332

斉藤早香枝　2000　乳児期の愛着形成における母親の愛着表象と母子相互作用の影響　北海道大学医療技術短期大学部紀要　(13)　41-52

辻野順子・雄山真弓・乾原正・甲村弘子　2000　母親の胎児及び新生児への愛着の関連性と愛着に及ぼす要因：知識発見法による分析　母性衛生　41(2)　326-335

2．「児童期・思春期の子ども」を対象にした論文

一番、対象としては少ない分野であるが、近年研究が増えてきている分野である。今後も研究の余地があるのではないかと考える。

【2007】

福田汐里・菱川匡子・二宮やよい（他）　2007　前思春期から思春期にかけて変化する親子の愛着関係と自己イメージ及びその関連要因について　学長研究奨励費研究結果論文集　3　74-79

中井大介・庄司一子　2007　中学生の教師に対する信頼感と幼少期の父親および母親への愛着との関連　パーソナリティ研究　15(3)　323-334

中村直美・内田一成　2007　中学生における他者への愛着とレジリエンスとの関連について：性差についての臨床心理学的研究　上越教育大学心理教育相談研究　6(1)　1-11

【2006】

生田憲正　2006　対象の内在化過程から見た思春期の精神発達－第二の個体化過程論とアタッチメント(愛着)研究からの知見（特集 子どもの心(1))－(子どもの心を育む)　母子保健情報　54　59-63

粕谷貴志・河村茂雄　2006　中学生の内的作業モデルとソーシャル・スキルとの関連　カウンセリング研究　39(2)　124-131

【2005】

福田佳織・畠山千佳・高橋道子　2005　母親の就業は娘の被養育経験認知、内的ワーキングモデル、子どもへの敏感性に影響を及ぼすのか　学校教育学研究論集　11　29-38

糟谷貴志・河村茂雄　2005　中学生の内的作業モデルと学校適応との関連　カウンセリング研究　38(3)　206-215

粕谷貴志・河村茂雄　2005　中学生の内的作業モデル把握の試み－尺度の信頼性・妥当

性の検討　カウンセリング研究　38(2)　141-148

【2004】

五十嵐哲也・萩原久子　2004　中学生の不登校傾向と幼少期の父親および母親への愛着との関連　教育心理学研究　52　264-276

生田憲正・大西美代子・長沼佐代子　2004　思春期患者におけるアタッチメント分類の世代間伝達に関する研究　研究助成論文集　(通号 40)　16-20

北本桜香・宮本邦雄　2004　児童の抑うつと家族雰囲気について－親の内的作業モデルとの関連－　東海女子大学紀要　23　139-148

【2003】

三浦潤子　2003　養育行動と学校環境適応感の関連についての検討：内的作業モデルの伝達を通して　臨床教育心理学研究　29（1）　9-19

【2002】

本多潤子　2002　資料 児童の「母親に対する愛着」測定尺度の作成　カウンセリング研究 35(3)　246-255

本多潤子・桜井茂男　2002　児童の家族画を用いた「母親との愛着」の測定　筑波大学心理学研究　24　203-210

【2001】

松浦ひろみ　2001　児童期から前思春期にかけての愛着表象評価の試み－親子状況ピクチャーを用いて　教育学・心理学論叢　([1])　161-174

野崎薫　2001　小学生が学校内で愛着を感じる空間に関する考察　山梨県立女子短期大学紀要　(34)　55-61

岡部彩子　2001　愛着スタイル別にみた中学生の親子関係と友達関係　人間文化論叢 4　269-279

【2000】

粕谷貴志・菅原正和・河村茂雄　2000　中学生の内的作業モデルとソーシャル・スキルとの関連について　岩手大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要　10　91-98

3．「青年期」を対象とした論文

青年と「愛着」・「内的作業モデル」に関する研究はこれまでにも多く研究されているが、

近年においても多く研究されてきている。

【2007】

橋本泰子・雲井千香子　2007　青年女子における愛着タイプに関する心理研究－自立尺度,SCT,バウムテスト　桜美林論集　34　157-167

金政祐司　2007　青年・成人期の愛着スタイルの世代間伝達－愛着は繰り返されるのか　心理学研究　78(4)　398-406

金政祐司　2007　青年期の愛着スタイルと友人関係における適応性との関連　社会心理学研究　22(3)　274-284

尾崎康子・杉本宜子　2007　青年期における愛着と攻撃性との関連　富山大学人間発達科学部紀要　2(1)　37-45

島義弘　2007　青年期の愛着と Big Five：日本人サンプルでの検討　パーソナリティ研究　16(1)　121-123

園田直子・片岡祥　2007　コラージュにおける自己像・他者像とアタッチメントスタイル久留米大学心理学研究　6　1-10

【2006】

井上俊哉・大井京子・西村純一・井森澄江・斉藤こずゑ　2006　親子関係の生涯発達心理学的研究 (II)・PBI と IPA の尺度の再検討　東京家政大学研究紀要. 1, 人文社会科学　46　245-251

金政祐司　2006　恋愛関係の排他性に及ぼす青年期の愛着スタイルの影響について　社会心理学研究　22(2)　139-154

工藤晋平　2006　おそれ型の愛着スタイルにおける攻撃性の抑圧・P-F スタディを用いた検討　パーソナリティ研究　14(2)　161-170

宮本邦雄　2006　女子大学生の内的作業モデルと宗教意識・ストレスコーピング・抑うつの関連　東海女子大学紀要　25　101-108

中尾達馬・加藤和生　2006　4 つの成人愛着スタイルにおける愛着対象・手段・方略間での愛着行動の一貫性と安全欲求の検討　九州大学心理学研究　7　9-19

中内結実子　2006　青年期における相互自律性と愛着スタイル　ロールシャッハ法研究　10　53-65

大井京子・西村純一・井森澄江・井上俊哉・斉藤こずゑ　2006　親子関係の生涯発達心理学的研究(III)・愛着および親の養育態度の検討　東京家政大学研究紀要. 1, 人文社会科学　46　253-261

大石佳世子・小林康江　2006　青年期における親になることに対する態度の構成要素と内的ワーキングモデルとの関連　山梨県母性衛生学会誌　5（1）　64-70

高井真奈美・丸島令子　2006　青年期における内的作業モデルとパーソナリティの特徴について　神戸親和女子大学大学院研究紀要　2　63-73
玉瀬耕治・今村友美　2006　「甘え」と愛着（アタッチメント）　教育実践総合センター研究紀要（奈良教育大学）　15　39-46

【2005】
金政祐司　2005　愛されることは愛することよりも重要か？－愛すること、愛されることへの欲求と精神的健康、青年期の愛着スタイルとの関連　対人社会心理学研究　(5)　31-38
金政祐司　2005　青年期の愛着スタイルと感情の調節と感受性ならびに対人ストレスコーピングとの関連：幼児期と青年期の愛着スタイル間の概念的一貫性についての検討　パーソナリティ研究　14(1)　1-16
中尾達馬・加藤和生　2005　成人における愛着スタイルと愛着行動の状況間一貫性　九州大学心理学研究科　6　9-20
李和貞　2005　青年の父・母へのアタッチメント表象と自尊感情の関係　学術研究，教育心理学編　54　35-45
李和貞　2005　3因子構造の青年用愛着尺度作成の試みとその検証　早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊　(13-1)　73-81
嶋田美由紀・田中雄三　2005　青年期の対人関係が内的作業モデルの変化におよぼす影響　鳴門生徒指導研究　15　16-29
丹羽智美　2005　青年期における親への愛着と環境移行における適応過程　パーソナリティ研究　13(2)　156-169
谷口弘一・浦光博　2005　親子関係の内的ワーキングモデルと友人関係に対する認知が高校生の友人関係におけるサポート授受に及ぼす影響－縦断的研究による分析　実験社会心理学研究　44(2)　157-164
若尾良徳　2005　青年のアタッチメントスタイルとパートナーとの相互作用場面における自己報告及び、行動に表出された不安との関連　和洋女子大学紀要．人文系編　45　117-129
山口倫子　2005　愛着度と情緒関係からみたパラサイト・シングルと親子関係　甲子園大学紀要．B，現代経営学部編　32　155-168

【2004】
工藤晋平　2004　「見立て」における成人愛着スタイルの利用とそのアセスメント－語りおよび治療者の情緒的反応から見た特徴　心理臨床学研究　22(4)　406-416
三宅邦建　2004　いじめの被害者経験と、その自己開示と成人期の愛着との関係　九州保

健福祉大学研究紀要　5　1-10
中尾達馬・加藤和生　2004　”一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討　九州大学心理学研究科　5　19-27
中尾達馬・加藤和生　2004　成人愛着スタイル尺度（ECR)の日本語版作成の試み　心理学研究　75(2)　154-159
山岸明子　2004　女子青年がもつ現在の対人的枠組みと成育史に記述された母親及び友人との関係の質との関連　発達心理学研究　15(2)　195-206

【2003】
古屋敬子　2003　外界および自己についての情報処理に関する一考察：内的ワーキングモデルの観点から　京都大学大学院教育学研究科紀要　49　494-506
金政祐司　2003　成人の愛着スタイル研究の概観と今後の展望－現在、成人の愛着スタイル研究が内包する問題とは　対人社会心理学研究　(3)　73-84
金政祐司・大坊郁夫　2003　青年期の愛着スタイルと社会的適応性　心理学研究　74(5)　466-473
金政祐司・大坊郁夫　2003　青年期の愛着スタイルが親密な異性関係に及ぼす影響　社会心理学研究　19(1)　59-76
桂田恵美子・杉原洋子　2003　親への愛着と性役割的性格との関連　秋田大学教育文化学部研究紀要．人文科学・社会科学　58　55-61
中尾達馬・加藤和生　2003　成人愛着スタイル尺度間にはどのような関連があるだろうか？：４カテゴリー（強制選択式、多項目式）と３カテゴリー（多項目式）との対応性　九州大学心理学研究科　4　57-66
大石史博・宇恵弘　2003　青年期における愛着の基礎的研究（2)：愛着と親子関係、家庭の雰囲気及び人格特性の関係について　関西福祉科学大学紀要　6　145-152
瀧川由美子　2003　幼少期のアタッチメント形成が青年期に与える影響について：幼少期のアタッチメントの連続性から考える　奈良文化女子短期大学紀要　34　41-47
丹波智美　2003　青年期の親への愛着によるソーシャル・サポート、サポート希求の差異とそのバランスの検討：父親、母親、友人に焦点をあてて　名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要．心理発達科学　50　279-284
山岸明子　2003　<原著論文>女子看護短大生における内的作業モデルの連続性とその変動に関連する要因：縦断的データに基づいて　順天堂医療短期大学紀要　14　121-130
矢野由佳子　2003　短大生の対人態度と不安－内的作業モデルと特性不安からの検討　東京成徳短期大学紀要　(36)　19-26

【2002】

金子俊子　2002　青年期女子の愛着スタイルが他者関係に及ぼす影響－基本的信頼感から親密性へのプロセスについて　大阪産業大学論集 人文科学編 (通号 106) 31-50
金政祐司　2002　恋愛イメージ尺度の作成とその検証－親密な異性関係、成人の愛着スタイルとの関連から　対人社会心理学研究 (2) 93-101
工藤晋平　2002　見立てにおける愛着理論の観点の適用について：おそれ型の事例を通しての試論　九州大学心理学研究 3 129-136
三浦喜代　2002　自己受容と内的作業モデルの関係性　武庫川女子大学発達臨床心理学研究所紀要 4 (通号 17) 311-319
丹羽智美　2002　青年期における親への愛着が友人関係に及ぼす影響：環境移行期に着目して　名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要.心理発達科学 49 135-143
戸田弘二・牧野高壮・菅原英治　2002　青年期後期の家族関係と精神的健康及び精神的・身体的不適応との関連　北海道教育大学教育実践総合センター紀要 (3) 221-233

【2001】
宮本邦雄・佐藤かおり・北本桜香　2001　女子大学生の内的作業モデルと家族表象－家族描画と円環母子関係イメージ画を指標として－　東海女子大学紀要 21 67-77
中尾達馬・加藤和生　2001　成人の愛着行動とはどのようなものか?：女子大学生の自由記述の内容分析を通して　九州大学心理学研究 2 99-106
西本幹子　2001　青年期における父親・母親に対する愛着関係と対人コンピテンスに関する研究　追手門学院大学心理学論集 (9) 1-9
大石史博・宇恵弘　2001　青年期における愛着の基礎的研究(1)：成人用愛着尺度作成の試み　関西福祉科学大学紀要 4 79-86
坂上裕子・菅沼真樹　2001　愛着と情動制御：対人様式としての愛着と個別情動に対する意識的態度との関連　教育心理学研究 49(2) 156-166
酒井厚　2001　青年期の愛着関係と就学前の母子関係：内的作業モデル尺度作成の試み　性格心理学研究 9(2) 59-70
鳥丸佐知子　2001　青年の抑うつと母親への愛着認識の関連性について－高校生への質問紙調査から　京都女子大学教育学科紀要 (41) 60-73

【2000】
久保恵　2000　愛着表象の投影法的研究：親子状況刺激画を用いて　心理學研究 70(6) 477-484
久保恵　2000　対人恐怖心性と認知的・投影的親子関係像：内的ワーキングモデルの観点からの検討　教育心理学研究 48 (2) 182-191
大石史博・宇恵弘　2000　成人用愛着質問紙法作成の試み　関西女子短期大学紀要 9

59-67
竹澤みどり・小玉正博　2000　<原著>大学生における愛着スタイルとネガティブな対人記憶想起との関連　筑波大学臨床心理学論集　15　29-37
山岸明子　2000　内的作業モデル尺度の構造と4時点での変動：女子看護短大生を対象として　順天堂医療短期大学紀要　11　41-50

4．学会で発表された論文

【2007】

河合三奈子・福井義一　2007　PE039 愛着スタイルがソーシャルサポートとストレス過程の認知に及ぼす影響　日本教育心理学会総会発表論文集（49）　456
落合千里　2007　PG023 愛着関係が青年期の対人態度に及ぼす影響(2)　日本教育心理学会総会発表論文集（49）　649
岡村季光・豊田弘司　2007　PB022 「居場所」(安心できる人)を規定する要因：内的作業モデルによる検討　日本教育心理学会総会発表論文集　(49)　126
龍祐吉・小川内哲生・橋元慶男　2007　PG009 児童の学業的延引行動に及ぼす内的作業モデルと内発的動機づけの影響　日本教育心理学会総会発表論文集　(49)　635
田中真理・永井智・坂征拓・設楽紗英子　2007　PE022 大学生における愛着と感情制御との関連　日本教育心理学会総会発表論文集（49）　439
丹羽智美　2007　PC008 親への愛着尺度の妥当性検討：2側面4類型と3類型との関連から　日本教育心理学会総会発表論文集（49）　215

【2006】

原田直子・冨田幸世・大村恵・秋月令子・北本佳文・前山直美　2006　O-143 母子同室と母子異室間の主観的幸福感・愛着形成の相違に関する検討(Group26 産褥 III,一般口演)　母性衛生　47(3)　164
橋本泰子・雲井千香子　2006　P-1201 女子大生の愛着タイプと自立、そしてパーソナリティ　日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集　(15)　18-19
本城秀次　2006　母子愛着と内的ワーキングモデル(どう支える?親になりきれない親－第46回日本母性衛生学会学術集会シンポジウム〔3〕より－)　母性衛生　46(4)　477-479
松岡陽子・黒石憲洋　2006　P-2317 対人態度の親子間相関：内的作業モデル尺度を用いて日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集　(15)　176-177
武山ゆう・岡本祐子　2006　B-2 被虐待体験のある青年の関係性の障害に関する研究：愛着の視点から(研究発表B)　日本青年心理学会大会発表論文集　(14)　28-29

谷内彩乃・吉村裕美・北村幸恵・徳瀬美紀・福永純子・小柳寛子・宮原千佳・平田伸子・野口ゆかり・新小田春美　2006　O-075 0歳児を持つ父親の精神健康度に関わる要因：愛着形成、妻への精神的支援、育児、家事行動との関連(Group14 母性・父性 II,一般口演)　母性衛生　47(3)　141

臼井淳美・山口順子・川崎佳代子　2006　P-184 入院を体験した妊婦の胎児及び乳児に対する愛着に関する研究(Group51 母性・父性,ポスターセッション)　母性衛生　47(3)　244

【2005】

後藤節子・水野妙子　2005　269 妊娠期・産褥期における精神的健康と児への愛着形成(母子保健、訪問指導 1, 第 46 回 日本母性衛生学会総会 学術集会抄録集)　母性衛生　46(3)　192

本城秀次　2005　(1) 母子愛着と内的ワーキングモデル(どう支える?親になりきれない親, 第 46 回 日本母性衛生学会総会 学術集会抄録集)　母性衛生　46(3)　43

金政祐司　2005　P11-2 青年期の愛着スタイルと友人関係での適応性との関連について：友人とのペアデータを用いて　日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集　(14)　165-166

島義弘　2005　P11-1 愛着尺度の検討：ECR と RQ を用いて　日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集　(14)　163-164

浦知恵・交野好子　2005　137 夫婦相互の育児支援と子どもへの愛着度に関する研究：父親の育児に焦点をあてて(育児 1, 第 46 回 日本母性衛生学会総会 学術集会抄録集)　母性衛生　46(3)　148

臼井淳美・川崎佳代子　2005　280 ハイリスク妊娠によって入院を経験した初産婦における胎児に対する愛着に関する研究(母性、父性 1, 第 46 回 日本母性衛生学会総会 学術集会抄録集)　母性衛生　46(3)　196

【2004】

福澤雪子・山川裕子　2004　母親の対児愛着感情の分析－退院時・1か月時の産褥早期における調査　日本看護学会論文集, 母性看護　35　195-197

河本洋実・大井伸子・澤村陽子・江國一二美・松井たみこ・品川佳満　2004　141 母親の児への愛着とそれに影響する要因に関する検討(胎児、新生児 1)(第 45 回日本母性衛生学会総会学術集会)　母性衛生　45(3)　141

近藤由佳里・大庭智子・田中智子・古賀あゆみ・光吉久美子・大塚康代・野口ゆかり・新小田春美・平田伸子・加耒恒壽　2004　326 できちゃった結婚妊婦の母性不安と母性発達(母性意識・愛着形成)について：計画妊娠初産婦と比較して(母性、父性 4)(第 45 回日

本母性衛生学会総会学術集会)　母性衛生　45(3)　203
南田智子・我部山キヨ子　2004　324 初期接触がマザーリングに及ぼす影響：初産婦における産褥早期の愛着の発達について(母性、父性 4)(第 45 回日本母性衛生学会総会学術集会)　母性衛生　45(3)　202
榮玲子・松村惠子・野口純子・竹内美由紀・宮本政子　2004　323 妊娠期における母親の胎児への愛着と自我状態(母性、父性 4)(第 45 回日本母性衛生学会総会学術集会)　母性衛生　45(3)　202
佐藤奈緒子・森岡由起子・佐藤文・生地新　2004　123 母親自身の被養育体験・愛着スタイルは産後うつ状態に影響を及ぼし、児への愛着障害を生起させる要因となる（妊娠、分娩、産褥 24）（第 45 回日本母性衛生学会総会学術集会）　母性衛生　45(3)　135
上田七生・山崎晃　2004　P96 乳児-保育者間の愛着関係の変容過程：質的データによる検討(ポスター発表 II)　日本保育学会大会発表論文抄録　(57)　876-877
渡部貴子・才門尚美・藤田愛・遠藤由美子　2004　002 挙児希望の有無が初産婦の胎児への愛着形成に及ぼす影響および愛着形成に関連する要因の検討(妊娠、分娩、産褥 1)(第 45 回日本母性衛生学会総会学術集会)　母性衛生　45(3)　95
渡辺久子　2004　虐待と愛着の病理(第 45 回日本母性衛生学会総会学術集会)　母性衛生　45(3)　29
矢内由　2004　<学術研究集会・研究報告>乳児と養育者との愛着関係の生成過程の検討　児童研究　83　105-110

【2003】

福澤雪子・山川裕子　2003　産褥早期の母親の対児愛着と精神状態の関連－愛着評価票と日本版エジンバラ産後うつ病質問票を用いた調査結果の一考察　日本看護学会論文集,母性看護　34　103-105
甲斐田章子・溝手博義・田中芳明・つる知光・浅桐公男・中溝博隆・副島博子・小林英史・疋田茂樹　2003　第 1・第 2 鰓弓症候群患児とその家族の愛着形成への過程（第 40 回九州小児外科学会）　日本小児外科学会雑誌　39(6)　805
甲斐田章子・溝手博義・田中芳明・つる知光・疋田茂樹・浅桐公男・中溝博隆・副島博子・小林英史・緒方宏美・石井信二　2003　P-206 第 1・第 2 鰓弓症候群患児とその家族の愛着形成への過程＆acd：患児が自宅へ帰るための支援　日本小児外科学会雑誌　39(3)　316
粕谷貴志・昆保典・六本木郁子・安藤拓也　2003　幼児の愛着タイプ評定項目作成の試み　日本保育学会大会発表論文抄録　(56)　702-703
西川好美・河野恵美子・近藤香織・山田真紀・秋山良子・林千代香・甲斐田章子・溝手博義　2003　顔面形成不全を呈した児と家族の愛着形成に向けての援助（第 13 回小児外

科 QOL 研究会)　日本小児外科学会雑誌　39(1)　159
右田幸・桑名仁美　2003　長期入院児の愛着形成過程の分析　日本看護学会論文集, 小児看護　34　32-34
上田七生・山崎晃　2003　P51 乳児と保育者との愛着関係の形成および変容過程：第 1 愛着対象者との愛着関係が不安定な乳児を対象に　日本保育学会大会発表論文抄録 (56)　796-797
矢内由　2003　011 内的作業モデルに関する一考察:マザー・イメージの形成に向けて　日本保育学会大会発表論文抄録　(56)　22-23

【2002】
粕谷貴志　2002　青年期の内的作業モデルと敵意的攻撃性　日本教育心理学会総会発表論文集　(44)　299
中尾達馬・加藤和生　2002　Brennan et al.(1998)の成人愛着スタイル尺度の日本語版作成とその妥当性の検証　日本教育心理学会総会発表論文集　(44)　300
大石史博・宇恵弘　2002　愛着と人格特性　日本教育心理学会総会発表論文集(44)　32
高橋由利子　2002　愛着スタイルと自尊心：対人関係スタイルの観点から　日本教育心理学会総会発表論文集　(44)　77
丹波智美　2002　青年期における親への愛着と適応過程　日本教育心理学会総会発表論文集　(44)　291
上田七生・山崎晃　2002　P26 乳幼児の愛着形成に関する短期縦断的研究：保育者との関係が母子関係に及ぼす影響　日本保育学会大会発表論文抄録　(55) 698-699

【2001】
粕谷貴志　2001　PC19 中学生の内的作業モデルと学校適応との関連　日本教育心理学会総会発表論文集　(43)　225
宮本邦雄・佐藤かおり・北本桜香　2001　PG15 女子大学生の家族描画と内的作業モデル　日本教育心理学会総会発表論文集　(43)　631
中尾達馬・加藤和生　2001　愛着スタイルごとのネガティブ感情に対する対処法の違い：自由記述の分析を通して　日本行動計量学会大会発表論文抄録集　29　228-231
李和貞　2001　PE31 親の養育態度が子どもの愛着認知と自己概念に及ぼす影響　日本教育心理学会総会発表論文集　(43)　442
辻野順子・雄山真弓・乾原正　2001　PA17 母親の分離不安の構造と母親の愛着との関連性　日本教育心理学会総会発表論文集　(43)　17

【2000】

遠藤利彦　2000　1. 乳幼児保育現場における愛着の測定（保育者：子ども間の愛着測定と保育臨床）　日本保育学会大会発表論文抄録　(53)　S30-S31

本多潤子・桜井茂男　2000　PA23 家族画による児童の母親に対する愛着の測定　日本教育心理学会総会発表論文集　(42)　23

藤本昌樹　2000　PA22 愛着が精神的健康に及ぼす影響：家族機能・家族表象との関連から　日本教育心理学会総会発表論文集　(42)　22

金田利子・鳥居真千子　2000　愛着理論(母子関係理論)から見た保育者の育児意識：静岡市における10年前との比較調査から　日本保育学会大会発表論文抄録　(53)　126-127

金子龍太郎　2000　2. 乳児院の子どもの愛着（保育者：子ども間の愛着測定と保育臨床）　日本保育学会大会発表論文抄録　(53)　S31

数井みゆき　2000　親子関係のストーリー：成人愛着面接（27 親と子の間を映す三枚の鏡：浮世絵・母子イメージ画・語りの中に見る親子関係の諸相）　日本教育心理学会総会発表論文集　(42)　S85

久保恵・松浦ひろみ　2000　PC80 児童期から前思春期にかけての愛着表象 (2)：親子状況ピクチャー(PARS)による学年差の検討と親子間の比較　日本教育心理学会総会発表論文集　(42)　292

西山修　2000　5. 幼稚園・保育所における愛着の測定（保育者：子ども間の愛着測定と保育臨床）　日本保育学会大会発表論文抄録　(53)　S31

大井京子　2000　PD18 青年期女子における語りに見られた自己認知と愛着スタイル　ambivalentの語りに関する一考察　日本教育心理学会総会発表論文集　(42)　335

李和貞　2000　PD36 韓・日における幼児の自己概念及び父母の養育態度：幼児の父・母に対する愛着(Attachment)を中心に　日本教育心理学会総会発表論文集　(42)　353

白石敏行・湯地由美　2000　6. 討論（保育者：子ども間の愛着測定と保育臨床）　日本保育学会大会発表論文抄録　(53)　S31

立元真　2000　4. 幼稚園・保育所の子どもの愛着と保育者（保育者：子ども間の愛着測定と保育臨床）　日本保育学会大会発表論文抄録　(53)　S31

立元真・西山修・田爪宏二　2000　保育者－子ども間の愛着測定の試み (2)：幼稚園・保育所における測定の試み　日本保育学会大会発表論文抄録　(53)　736-737

田爪宏二　2000　3. 乳児院における愛着の測定（保育者：子ども間の愛着測定と保育臨床)日本保育学会大会発表論文抄録　(53)　S31

5．その他

上の４つに含めることができなかった論文を集めた。

【2007】

村澤博美　2007　わが子への愛着形成不全を訴えた女性との面接過程　教育学論集 49 125-151

島義弘　2007　愛着の内的作業モデルに関する一考察－構造と機能に着目して　心理学評論　50(2)　151-162

【2006】

久保田まり　2006　教育講演 愛着研究の動向－発達・臨床的問題に焦点をあてて　乳幼児医学・心理学研究　15(1)　1-9

【2005】

北川恵 2005　アタッチメント測定手法としての投影法の意義・成果・課題　四天王寺国際仏教大学紀要　41　1-14

中谷隆　2005　内的作業モデル（IWM)雑考　県立広島女子大学子ども文化研究センター研究紀要　10　1-11

【2004】

高橋由利子　2004　愛着理論とその測定方法—最近の文献研究より　目白大学人間社会学部紀要　(4)　53-66

高畠克子　2004　愛着理論から内的作業モデルを経て対人関係内化モデルへの系譜　臨床教育学研究　(10)　21-38

【2003】

藤本昌樹　2003　愛着理論と精神保健－臨床場面における内的作業モデルの適用－　東京成徳大学研究紀要　10　27-49

伊藤佐枝　2003　愛着の居場所、愛着という居場所－志賀直哉初期作品に於ける男女の関係性をめぐって　日本近代文学　69　108-122

内田利広・山口美穂・河合三奈子　2003　内的作業モデルに関する文献展望と今後の課題－IWM研究の臨床領域への活用に向けて　京都教育大学紀要　(103)　111-128

【2002】

濱野佐代子　2002　人とコンパニオンアニマル(犬)の愛着尺度－愛着尺度作成と尺度得点による愛着差異の検討　白百合女子大学発達臨床センター紀要　(6)　26-35

三井知代　2002　展望 愛着研究と摂食障害　ヒュ･マンサイエンス　(5)　35-41

菅沼真樹　2002　愛着理論から見た老年期　東京大学大学院教育学研究科紀要 41 311-317

只野文基・辰沢剛・宮本哲弘（他）　2002　愛着行動と愛着障害の臨床的評価に関する研

究－「愛着行動評価尺度」作成の試み　研究助成論文集　(通号 38)　94-103

【2000】

浅田真子　2000　ペット・ロス体験後の飼い主の心理状態－ペットに対する愛着の強さから　武庫川女子大学発達臨床心理学研究所紀要　(2) (通号 15)　121-131

三原理恵　2000　愛着理論から見た発達病理と精神病理　東京大学大学院教育学研究科紀要　39　327-338

執筆者一覧

第１章　河合三奈子（八幡市福祉センター）

第２章　山口美穂（守山市発達支援センター）

第３章　内田利広（京都教育大学教育学科　准教授）

第４章　大田千登世（京都教育大学大学院
学校教育専修教育臨床心理学コース　１回生）

平成 17-19 年度

科研費　基盤研究（C）　　研究報告書

**「内的作業モデルの世代間伝達と
その変容プロセスに関する研究」**

平成２０年３月

研究代表者　内田利広
（京都教育大学　准教授）

印刷　株式会社　コームラ